

特別權ニ屬セザル刑事訴訟第二審トシテ區裁判所ノ判決ニ對スル控訴又ハ區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告等  
 控訴院ハ第二審ノ合議裁判所ニシテ其裁判權ハ第一地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴第二區裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ付爲シタル地方裁判所ノ判決ニ對スル上告第三地方裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告等  
 大審院ハ最高裁判所ニシテ其裁判權ハ第一終審トシテ區裁判所ノ判決ニ對スル地方裁判所及控訴院ヲ經由シタル上告及皇族ニ對スル民事訴訟ニ付第一審ノ判決ニ非ザル控訴院ノ判決ニ對スル上告○控訴院ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告第二第一審ニシテ終審トシテ刑法第二編第一章及第二章ニ掲ケタル重罪并ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮又ハ更ニ重キ刑ニ處スベキモノ、豫審及裁判（詳細ハ三年二月公布ノ法律第六號）  
 續テ裁判所位置及管轄區域ヲ公布セラレ即チ大審院ヲ東京ニ置キ全國ヲ管轄セシメ東京大阪名古屋廣島長崎函館ノ六控訴院ヲ置ク而シテ地方裁判所ハ總テ四十八又區裁判所ハ二百九十九アリ其管轄ハ後表ノ如シ（明治廿三年八月法律第六十二號ヲ參照セヨ）  
 我國司法上ノ地位如何ナルヤハ以上示ス所ニヨリテ自ラ明確ニスルコトヲ得ン加フ

ルニ諸般法律ノ制定ニ從ヒ先ニ治罪法アリ後ニハ現今施行ノ刑事訴訟法明治二十三年十月六日法律ヲ以テ發布民事訴訟法同年三月二十七日法律第二十九號ヲ以テ發布ノ制定アリテ私權ヲ保護シ濫刑ノ虞ナカラシムルノ法頗ル周到ヲ極ム  
 又憲法第五十八條第二項ニ曰ク裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其職ヲ免セラル、コトナシト是レ裁判官ノ獨立ヲ認メタルモノニシテ即チ諸種ノ權勢ニ左右セララル、コトナク何人ト雖モ故ナク免黜ヲ行フニ能ハズトナセシナリ斯ノ如ク我國司法權ノ有様ハ古昔數種ノ機關ト混同錯雜シテ分ツベカラザリシモノガ今ハコノ曖昧ナル境界ヲ脱シテ全ク獨立ノ新光ヲ放チ來レリ是レ我國ノ進歩上著シキ一大現象トシテ歎ヘザルベカラザルナリ

### 裁判所位置及管轄區域表

控訴院 地方裁判所 區裁判所

東京	京橋、芝、麹町	五區
橫濱	橫濱、磯子、磯子	四區
千葉	千葉、松戸、佐倉、一宮、木郷	八區

京		控		訴		院		大																											
水戸	水戸、太田、土浦	六區	宇都宮	宇都宮、真岡、太田原	五區	浦和	浦和、越ヶ谷、幸手	六區	前橋	前橋、沼田、中之條	六區	靜岡	靜岡、藤枝、沼津、下田	七區	甲府	甲府、飯沼	三區	長野	長野、飯山、松本、上諏訪、大町	十區	新潟	新潟、三條、新發田、村上、長岡	十區	京都	京都、伏見、木津、園部	八區	大阪	大阪、池田、茨木、枚方、天王寺	八區	奈良	奈良、斑鳩、橿原、大和	四區	神戶	神戶、伊丹、明石、篠山、柏原、洲本	十一區

古名		控		訴		院		大																											
岡山	岡山、片上、高梁、新見	八區	大津	大津、水口、八幡	六區	福井	福井、三國、武生	六區	金澤	金澤、小松、大聖寺	六區	富山	富山、魚津	四區	和歌山	和歌山、妙寺、田邊	五區	德島	德島、無量、宮岡	五區	高知	高知、安藝、赤岡	五區	松山	松山、大洲、八幡濱	六區	高松	高松、三木松	四區	名古屋	名古屋、一宮、津島、半田	八區	安濃津	安濃津、松阪、四日市、龜山	七區

司法制

我、日本帝國ノ國防上ニ於ケル位置ハ、四面環海ノ島國ナルヲ以テ、大陸各國ニ於ケル

國防軍制

國防軍制

第二十章

函館控訴院

根室 根室、厚岸、釧路 三區  
 札幌 札幌、岩内、小樽、増毛 五區  
 函館 函館、江刺、函館、森、青森、野邊地、弘前、餘ヶ澤、五所川原、八戸 六區

仙臺控訴院

仙臺 仙臺、大河原、古川、石巻、登米、氣仙沼 六區  
 福島 福島、郡山、中村、白河、平、若松、田島 七區  
 山形 山形、新莊、米澤、長井、酒田、鶴岡 六區  
 盛岡 盛岡、花巻、遠野、福岡、宮古、磐井、水澤 七區  
 秋田 秋田、本莊、能代、大館、花輪、大曲、横手、湯澤 八區

長崎控訴院

宮崎 宮崎、低肥、都城、延岡、高千穂 五區  
 鹿島 鹿島、知覽、加治木、鹿屋、水引、大島 六區  
 熊本 熊本、三角、御船、宮地、八代、山鹿、高瀬、人吉、天草 九區  
 大分 大分、臼杵、佐伯、竹田、杵築、中津、玉津、豆田 八區  
 福岡 福岡、甘木、飯塚、久留米、福島、行幸、小倉、柳河 八區  
 佐賀 佐賀、武雄、唐津、伊萬里 四區

廣島控訴院

鳥取 鳥取、倉吉、米子、溝口 四區  
 松江 松江、木次、今市、濱田、大森、益田、西郷 七區  
 山口 山口、徳山、岩國、柳井津、萩、赤間關、船木 七區  
 廣島 廣島、吳、竹原、三次、庄原、尾ノ道、福山 六區

岐訴院

岐阜 岐阜、八幡、大垣、御嵩、高山 五區

か、如く諸列國ト境域相密適スルニアラズ、又四圍外敵ハ間ニアリテ僅ニ堡塞ニ據リテ國境ヲ保ツガ如キ地ニアラズ、只我國ノ北西ハ西比利亞朝鮮支那ト一葦水ヲ隔テ、相對峙スルヲ以テ古來國際上多少ノ關係ヲ生ゼザルニアラザリシモ、而モ毎ニ列國間ニ起リ易キ境界上ノ爭端ハ如キハ曾テ之ヲ生ゼハ、下ナハ是レ我が位置ノ海水ヲ以テ相隔絶セラレタルニヨラズンバアラズ。加ルニ其東隣ナル米國トハ渺茫タル太平洋ノ洪波四千五百里ヲ隔テタルヲ以テ其警備亦タ境界相接スルガ如キニアラズ、是ヲ以テ本邦ノ位置ハ國防上比較的ニ安全ナリト謂ハザルベカラズ。然レ此ハ此ノ安全ナル所以ハ却テ他ニ困難ナル所以ニシテ、我國防線ノ延長ノ如キ又我邦ノ地形ノ如キ國防上頗ル顧慮スベキ點ナリ、抑我國防線ノ延長ニアリテハ甚々長クシテ無慮七千九百五十二里ニ亘リ面積三方里半ニ付一里ノ國防線ヲ有セリ故ニ國防線ノ長サヨリ言ハバ決シテ幅員廣キ大國ニ讓ラズ、斯ク國防線ノ長キハ全ク國ノ形勢ガ狹長ニシテ島嶼多キニヨル加旃、國防線ハ盡ク海岸線ニシテ國防線ト海防線トハ全ク同一ナリ故ニ若シ一朝外敵ヲ受クル時ハ無數ノ港灣ハ總テ敵ノ侵入ニ便ニシテ之ヲ防禦スルニ於テハ頗ル許多ノ兵員ヲ要セザルベカラズ。又國防ニ對スル我邦ノ地形ニ就テ之ヲ觀ルニ幅狹クシテ其長徑ハ八百里ニモ亘ル

地形ナレバ兵馬ノ駈引ニ時日ヲ要スルノ不便ヲ感スベシ。例ヘバ北海道ノ守兵ヲ以テ遼々九州ニ來襲スル外敵ノ防禦ニハ應スベカラズ、又九州ノ兵ヲ轉用シテ北門守備ノ兵ニカヲ併スルト亦甚々難シ。且内地ニハ山岳充斥シテ通路不便ナレバ之ヲ横キリテ南海岸ヨリ北海岸ニ赴援スル時ノ如キ幅狹キ割合ニハ頗ル時日ヲ要スベシ。只此際ニアリテ鐵道ハ兵ノ運用ヲ迅活ナラシムル利器ナレバ我邦ノ鐵道ハ海岸ニ敷設セザレバ内地ハ山岳重疊シテ工事困難ナルヲ以テ多ク海岸鐵道ナリ兵要上、海岸鐵道ハ甚々不利ニシテ兵士兵器運搬ノ秘密ヲ敵ニ知ラレ、又敵艦ノ砲撃若クハ線路ヲ破壊セラル、等ノ恐レアルヲ免ガレズ、此等ノ諸點ハ我邦國防上不利シタル所以ナラン乎

### 徵兵

我帝國ノ陸海軍ハ天皇ノ統帥セララル、所ニシテ全國皆兵ノ制ナリ、故ニ日本臣民ノ男子ニシテ滿十七歳ヨリ滿四十歳マテハ總テ兵役ニ服スルノ義務アリ。現制ニヨレバ兵役ヲ分テ三種トス、常備兵役、後備兵役、及ビ國民兵役、是ナリ、又常備兵役ヲ分テ現役及豫備役トス、現役ハ陸軍ハ三年、海軍ハ四年ニシテ滿二十歳ニ至リタルモノ之ニ服ス、豫備役ハ陸軍ハ四年、海軍ハ三年ニシテ共ニ現役ヲ終リタルモノ

之ニ服ス後備役ハ五年ニシテ常備兵役七年ヲ終リタルモノ之ニ服ス而シテ常備兵役及後備兵役ニアラザルモノニシテ滿十七歳ヨリ滿四十歳マデノモノハ總テ國民兵役ニ服セシム又一年志願兵ノ制アリテ滿十七歳以上滿二十歳以下ニシテ徵兵令ニ定メタル學校ヲ卒業シ服役中ノ費用ヲ自辨スルモノハ一年間陸軍現役ニ服シ豫備二年後備五年ニ服役セシム

陸軍現役兵ハ壯丁ノ身材藝能職業ニ從ヒ歩騎砲工輜重ノ各兵科及職工雜卒ニ區別シ海軍ニアリテハ沿海地方及島嶼ノ壯丁ヲ調査シ其職業ニ從ヒ之ヲ水兵火夫職工及雜卒ニ區別ス又警備隊ヲ置キタル島嶼ノ壯丁ハ直ニ之ニ充テ其地ニ於テ服役セシム北海道ハ屯田兵ノ制ニシテ平時ハ農耕ニ從事セシム

日本全國ニ於ケル陸軍徵兵員(明治十二年)ハ三十六萬三千五百五十七人アリ之ヲ各師管ニ區別スレバ第一(東京)ニ七萬三千三百八十五人第二(仙臺)ニ六萬八百八十一人第三(名古屋)ニ五萬三千三百三十三人アリ第四(大阪)ニ六萬九百九十人第五(廣島)ニ五萬八千七百四十六人第六(熊本)ニ五萬四千二人アリ其内抽籤ヲ以テ現役ニ服シタルモノハ陸軍ニ一萬八千七十六人海軍ニ三百五人志願兵ニ四百一人ナリ又七萬四千三百七十二人ハ陸軍豫備徵員ニ百八十九人ハ海軍豫備徵員ニ編入セラレタルモノニシテ其他ハ徵

集ヲ猶豫延期シテ國民兵ニ編入セラレタルモノ。又ハ其他ノ事故ニヨリ不採用ノ者ナリ

我帝國兵員ノ總數ハ凡ソ兵役ノ義務ヲ有スル男子六百九十六萬三千四百四十八人(二十二年末)アレバ兵員ハ少クモ六百五十萬人ニ下ラザルベシ故ニ我國ノ兵員ハ頗ル夥多ナリト云フベシ今之ヲ國防上ヨリ配當スレバ一方里ノ邦土ヲ二百六十二人ノ兵ヲ以テ守衛スルノ割合ニシテ海岸線一里ニ付九百二十五人ノ兵ヲ以テ防禦スルモノニ當レリ又之ヲ人口ニ配當スレバ一兵員ニ付人口ノ六人強ナリ

我國常備兵數ハ陸軍十七萬六千二百七十八人アリ之ヲ我國土ハ面積ニ配當スレバ一方里ニ付七人一強ニシテ人口ニ配當スレバ一兵員ヲ以テ二百二十七人餘ノ國民ヲ保護スルモノニ當ル人或ハ我邦兵數ノ甚ダ寡少ナルヲ説キ其外國ニ及バザルヲ慨歎シ甚シキハ之ヲ聞テ萎縮恐怖スルモノアリ誤レリト謂フベシ我國洋式ノ軍制ヲ採用シタルハ日淺ク從テ兵員充分ナラズ之ヲ擴張セザルベカラザルハ世人ノ均シク認ムル所實ニ目今ノ急務ナリト雖也之ヲ以テ只一概ニ寡少ナリト謂フベカラズ況ンヤ萎縮スルオヤ抑兵備ハ國家防衛ノ要具ナレバ其國ニ應ゼザルベカラズ之ヲ標準トスルニ二要件アリ(一)國ノ面積(二)國ノ人口是ナリ今歐洲ニ於テ最モ陸軍ノ

強盛ナリトノ稱アル諸國及外一兩國ノ陸軍ト我國陸軍トヲ示セバ左ノ如ク

國名	一万里ニ付 兵員	一兵員ニ付 人口
日本	七人一強	二百二十七人強
魯西亞	一八四強	百八十八人弱
獨逸(附屬地ヲ除)	十三人強	九十五人強
佛蘭西(全上)	十五人強	七十四人強
伊太利(全上)	十三人強	百十九人強
支那	二人弱	二百七十五人強

右ニ付テ之ヲ觀レバ獨佛伊ノ如キ夙ニ強國ヲ以テ稱セラレ殊ニ近時兵備ノ競争ニ忙シキ國々ニ比スレバ我兵備ハ劣レリト雖モ魯國ニ比スレバ人口ニ割合フ兵員ニ於テハ稍少ナク面積ニ比スル兵員ハ大ニ優ル所アリ又支那ニ至リテハ面積人口共ニ大ニ優ルヲアルヲ觀ルベシ彼ノ獨佛伊モ其屬地殖民地等ヲ算入スレバ幾分カ減スル所アルベシ

### 軍政

帝國全軍ハ大元帥ノ統監シ玉フ所ニシテ陸軍大中將一人帝國全軍ノ參謀總長ニ任

ノ天皇ニ直隸シ帷幄ノ軍務ニ參シ出師國防作戰ノ計畫ヲ掌トル陸軍參謀本部ハ出師計畫國隊編制國防及作戰計畫並ニ陣中要務規定交通法及外國ノ軍事ヲ調査シ兼テ内外地誌外國政誌及戰史ノ編纂等專ラ陸戰參謀ノ事業ヲ掌ル海軍參謀本部ハ出師作戰ノ計畫海岸防禦謀報ノ調査出師準備ノ計畫海上運輸法ノ調査等專ラ海軍軍事計畫ヲ掌ル

陸軍ハ全國各地ニ師團司令部旅團司令部大隊區司令部ヲ配置シ師團司令部ニ於テハ中將ヲ以テ師團長トシ師管内ニ在ル軍隊ヲ統率シ軍事ニ係ル諸件ヲ總理シ師管内軍隊ノ出師準備ヲ整理シ又徵兵ノ事等ヲ統轄セシム旅團司令部ニ於テハ少將ヲ以テ旅團長トシ部下ノ歩兵二聯隊及旅管ニ包括スル四大隊區司令部ヲ統轄シ軍隊ノ訓練風紀軍紀將校ノ教育内務及糧食被服裝具ノ等ヲ統監セシム大隊區司令部ハ中少佐一名ヲ以テ大隊區司令官トシ其大隊區内徵兵事務及召集事務等ヲ掌ラシム又別ニ憲兵アリテ專ラ軍事警察行政警察司法警察ヲ掌ル憲兵司令部ハ東京ニ置キ憲兵大佐一名ヲ以テ憲兵司令官トシ全國ノ憲兵隊ヲ統轄シ各府縣ニ憲兵隊ヲ配置シ憲兵隊ヲ更ニ區分シテ其管區ニ憲兵分隊ヲ置キ之ヲ又巡察區ニ分チ常ニ其管内ノ情勢ヲ審ニシテ不俱ニ備ヘシム

海軍ハ我帝國ノ海岸及海面ヲ分チテ五海軍區トシ第一海軍區ヨリ第五海軍區ニ至ル各海軍區ノ軍港ニハ鎮守府アリテ其軍區ヲ管轄セリ鎮守府司令長官ハ將官ヲ以テ之ニ任シ管内ノ軍令ヲ主掌シ軍紀風紀訓練ヲ監督シ軍政ヲ管理ス各軍港ニハ同令官アリテ港内ノ守備其他諸般ノ事ヲ掌ル鎮守府所在ノ地ニハ海兵團ト稱スルモノアリテ軍艦乗員ノ補充及軍港守衛ノ兵ニ充ツベキ現役下士卒ヲ教育訓練シ新兵ヲ徵募シ豫備後備兵ヲ招集スル所ナリ又軍艦ハ各鎮守府ニ分屬シ之ヲ大艦隊中艦隊小艦隊ノ三種ニ編制セリ艦隊司令長官及司令官之ヲ統率シテ環海ヲ守衛シ攻守ノ役ニ服ス又各鎮守府ノ軍港要港ニハ水雷隊ヲ置キ近海ノ水路ヲ熟知セシメ軍港要港ノ守備ニ充ツルノ制トス

陸軍區

帝國陸軍ノ管區ハ師管ヲ以テ大區畫トシ全國ヲ六師管ニ大別シ更ニ之ヲ十二旅管ニ分チ又毎旅管ヲ四大隊區ニ分チ一大隊區ヲ二區乃至四區ノ監視區ニ分テリ之ヲ軍政上ノ區畫トス而シテ其各管下ニ於ケル壯丁ヲ徵集シテ之ヲ隊伍ニ編成シ中隊大隊聯隊ト稱シ一地方ニ屯在スル一團躰ヲ旅團ト稱ス又二旅團ヲ合スレバ一師團ト謂フ一師管ノ中心トナリテ樞機命令ヲ司ル所ヲ師團司令部トシ其ノ旅管ニ於ケ

ル中心ヲ旅團司令部トシ大隊區ノ中心ヲ大隊區司令部ト稱セリ又軍隊ノ一地方ニ永久配備駐屯スルモノアリ之ヲ衛戍ト稱ス

第一師管ノ管區ハ東海道ノ東部即チ相模甲斐以東及ヒ東山道中信濃上野下野ニシテ面積三千二百二十一方里人口凡八百十六萬ヲ管ス而シテ其司令部ハ東京ニアリ第一師管ハ之ヲ第一旅管及第二旅管ニ分シ第一旅管ハ東京市ハ江戸川ヨリ西南ノ諸區ヨリ武藏ノ西部及相模甲斐信濃上野ノ諸國ニシテ旅團司令部ハ東京ニアリ而シテ更ニ旅管ヲ麻布横濱高崎長野ノ四大隊區ニ分チ小笠原島警備隊區ニ屬ス第二旅管ハ東京市江戸川以東ヨリ武藏ノ東部下野常陸上下總安房ヲ管ス旅團司令部ハ佐倉ニ置キ高崎衛戍之ニ屬ス管内ハ更ニ佐倉水戸本郷宇都宮ノ四大隊區ニ分テリ第二師管ハ越後岩代磐城等ノ以北陸奥ニ至ル所謂東北地方及ヒ北海道ニシテ面積一萬一千六百六十七方里人口六百二十五萬ヲ管ス師管司令部ハ仙臺ニアリ又之ヲ第三旅管及ヒ第四旅管ノ二部ニ分シ第三旅管ノ區域ハ越後岩代磐城及陸前南部ヲ管シ旅團司令部ハ仙臺ニアリ第三旅管ハ更ニ柏崎新發田福島仙臺ノ四大隊區ニ分チ佐渡警備隊區之ニ屬ス第四旅管ハ陸奥羽前羽後陸中及ヒ陸前北部ヲ管ス旅團司令部ハ青森ニアリ第四旅管ハ更ニ青森盛岡秋田山形ノ四大隊區ニ分チ新發田衛戍之

ニ屬ス  
 第三師管ノ管區ハ東海道西南部及ヒ越前加賀越中能登美濃飛騨及ヒ紀伊ノ東部ニ  
 シテ面積二千五百六十四方里人口六百三十一萬ヲ管シ其師團司令部ヲ名古屋トス  
 又之ヲ第五及第六ノ二旅管ニ分ツ第五旅管ハ東海道ノ南西部及ヒ紀伊ノ東半ニシ  
 テ旅團司令部ヲ名古屋ニ置ク其大隊區ハ名古屋津豐橋靜岡ノ四區トス第六旅管ハ  
 尾張ノ北部美濃飛騨越前越中加賀能登ヲ管シ旅團司令部ハ金澤ニアリ而シテ更ニ金  
 澤富山岐阜福井ノ四大隊區ニ分レタリ豐橋衛戍之ニ屬ス  
 第四師管ノ師團司令部ハ大阪トシ其管轄區域ハ近江伊賀大和及ヒ紀伊以西ノ地中  
 國ハ伯耆及ヒ備中東半ニ至ルマデノ間面積二千三百三十方里人口六百五十八萬ヲ  
 管シ管下ヲ第七及ヒ第八ノ兩旅管トス第七旅管ハ畿内諸國（攝津ノ東ノ地）及ヒ近江紀  
 伊ノ西半ヲ管シ大阪ヲ旅團司令部トス其大隊區ハ大阪和歌山大津京都トス第八旅  
 管ノ管區ハ中國東部半及ヒ若狹攝津ノ西半淡路ニシテ姫路ニ旅團司令部アリ其大  
 隊區ハ姫路岡山神戸宮津ニ分レタリ  
 第五師管師團司令部ハ廣島ニアリ而シテ其管轄區ハ中國西部及ヒ四國一圓トス面  
 積二千六百八十四方里人口六百二十二萬アリ管內ヲ更ニ第九第十ノ二旅管ニ分ツ

第九旅管ハ中國西部ニシテ旅團司令部ハ廣島トス廣島尾ノ道山口松江ノ四大隊區  
 及ヒ隱岐警備隊區之ニ屬ス第十旅管ハ四國一圓ニシテ其旅團司令ハ丸龜ニアリ更  
 ニ丸龜德島松山高知ノ四大隊區ニ分ツ  
 第六師管ハ九州一圓及ヒ琉球面積二千八百二十八方里人口六百十萬ヲ管シ其師團  
 司令部ヲ熊本トス管下ヲ第十一及ヒ第十二旅管ニ兩分ス第十一旅管ハ肥後以南及  
 ヒ豊後南半ヨリ薩摩大隅日向ヲ管シ旅團司令部ハ熊本ニアリ大隊區ハ熊本宮崎大  
 分鹿兒島ニ分レ大島仲繩ノ二警備隊區之ニ屬ス第十二旅管ハ豊後北半豊前筑前筑  
 後肥前ヲ管シ旅團司令部ヲ小倉ニ置ク大隊區ハ小倉佐賀福岡長崎ニ分チ五島對馬  
 ノ二警備隊區之ニ屬ス

以上ハ我帝國陸軍管區制定ノ概略トス其各管區ノ區域境界線ノ如何ナルヤハ陸海  
 軍管區之圖ニ就テ之ヲ知ルヘシ又各管區配備團隊編制ハ左表ノ如シ

近 備 東 京	師團及地所			旅團及地所			兵步 聯隊	騎兵大隊	砲兵聯隊	工兵大隊	輕重兵大隊	諸隊衛戍地
	第 一	第 二	第 三	第 一	第 二	第 三						



第 五 廣 島	第 四 大 坂	第 三 名 古 屋	第 二 仙 臺	第 一 東 京	第 一 東 京		第 二 佐 倉		第 三 仙 臺		第 四 青 森		第 五 名 古 屋		第 六 金 澤		第 七 大 坂		第 八 姬 路		第 九 廣 島					
					第 一	第 一	第 二	第 二	第 三	第 三	第 四	第 四	第 五	第 五	第 六	第 六	第 七	第 七	第 八	第 八	第 九	第 九	第 十	第 十	第 十	第 十
					第 一	第 一	第 二	第 二	第 三	第 三	第 四	第 四	第 五	第 五	第 六	第 六	第 七	第 七	第 八	第 八	第 九	第 九	第 十	第 十	第 十一	第 十一
廣 島	廣 島	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪	大 阪			

水陸  
陸軍  
海軍  
工兵  
警備隊

即チ歩兵二十八聯隊騎兵七大隊砲兵七聯隊工兵六大隊一中隊輜重六大隊及憲兵三  
大隊屯田兵八中隊警備隊若干アリ

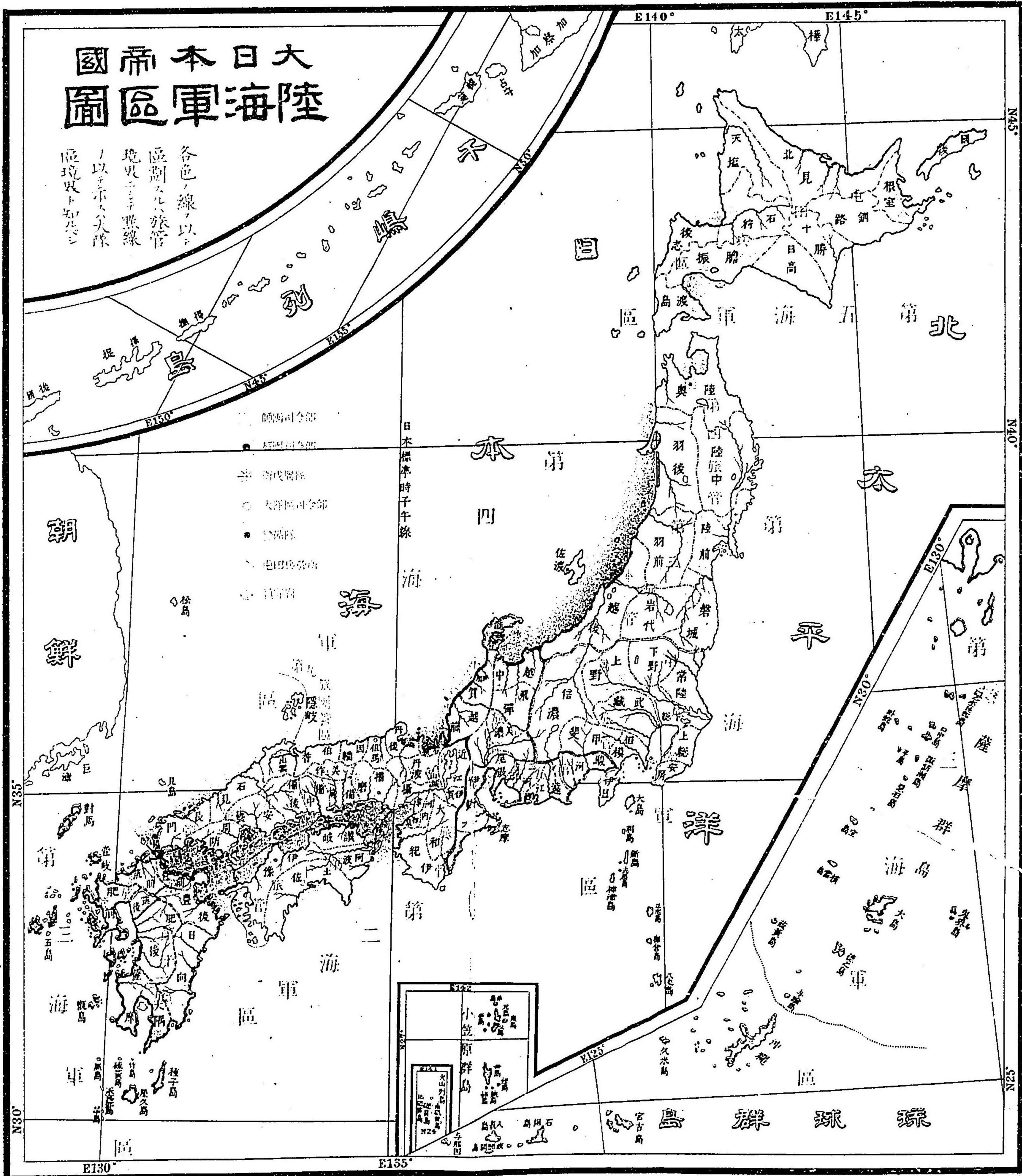
海軍區

帝國海防線ハ總延長里程數ハ七千九百五十二里ニ及ブ而シテ之ヲ五海軍區畫トス第  
一海軍區ハ太平洋岸即チ本州東南海岸ノ國防幹線ニシテ其區域東ハ陸中ノ南九戸、  
北閉伊郡界ヨリ起リ西ハ紀伊ノ南牟婁東牟婁郡界ニ至ル海岸海面及ビ小笠原島ノ  
海岸海面ヲ管シ其海岸線ノ延長里程ハ一千〇五十七里アリテ沿海人口凡ソ二百一  
萬アリ第一海軍區ノ鎮守府ハ相模三浦郡横須賀港ニアリテ之ヲ横須賀鎮守府ト稱  
ス  
第二海軍區ノ海防線ハ支レテニトナリ其一線ハ瀬戸内海ニシテ其一線ハ本邦南岸

第 六 熊 本	第 十 松 山		第 十 二		第 十 三		第 十 三		第 十 三		第 十 三	
	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十
	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十	第 十
福 岡	小 倉	熊 本	熊 本	松 山	九 龍	九 龍	九 龍	九 龍	九 龍	九 龍	九 龍	九 龍

# 大日本帝國 陸海軍區圖

各色ノ線ヲ以テ  
區劃スルヲ旅管  
境及ニテ點線  
ノ以テ示ス大隊  
區境以下知ル



ニ當ル太平洋海岸ナリ其區域紀伊南牟婁東牟婁郡境ヨリ石見長門ノ國界ニ至リ又九州東海岸ハ筑前豐前ノ國界ヨリ日向南那珂南諸縣郡界ニ至ル海岸海面及ヒ四國ノ海岸及ヒ内海ニシテ其ノ海岸線ノ延長里程ハ二千〇六十七里アリ沿海人口凡ツ三百十萬ヲ管ス第二海軍區ノ鎮守府ハ安藝國安藝郡吳港ニアリ之ヲ吳鎮守府ト稱ス

第三海軍區ハ九州西南海岸ニシテ筑前豐前ノ國界ヨリ起リ其西岸ニ沿テ日向南那珂南諸縣郡界ニ至ル海岸并ニ海面及ヒ壹岐對馬沖繩諸島ノ海岸及海面ヲ管ス其海岸線ノ延長里程ハ一千四百九十七里ニシテ沿海人口凡百七十萬アリ鎮守府ハ肥前國東彼杵郡佐世保港ニアリ之ヲ佐世保鎮守府ト稱ス

第四海軍區ハ日本海岸ニシテ其管區ハ石見長門ノ國界ヨリ日本海岸ヲ沿ヒ羽後陸奥ノ國界ニ至ルノ海岸海面及隱岐佐渡ノ海岸海面ヲ管シ其海岸線ノ延長里程ハ千〇五十五里沿海人口ハ凡百十二萬アリ其鎮守府ノ位置ハ丹後國加佐郡舞鶴港ニ定メラレ之ヲ舞鶴鎮守府ト稱ス舞鶴鎮守府ハ未ダ開應セス依テ其開應マデハ第四海軍區ハ越後以東ハ横須賀鎮守府ニ於テ之ヲ管轄シ越中以西ハ吳鎮守府ニ於テ之ヲ管轄ス

第五海軍區ハ本州東北岸及ヒ北海道沿岸ニシテ其區域ハ陸中北九戸南九戸兩郡以  
 北海岸海面及ヒ北海道全部ノ海岸海面トシ其海岸線延長ハ二千二百七十六里沿海  
 人口凡ヲ八百十一萬アリ其鎮守府ハ膽振國室蘭郡室蘭港ニ定メラレ之ヲ室蘭鎮守  
 府ト稱ス室蘭鎮守府ハ未ダ開廳セズ故ニ其開廳マテハ第五海軍區ハ横須賀鎮守府  
 ニ於テ之ヲ管轄ス

現今海軍軍人及軍醫總人員ハ一萬四千〇三十九人ニシテ内常備兵一萬二千八百〇  
 七人アリ其各地ニ屯在スルモノ左ノ如シ(人員ハ第十  
 統計年鑑)

第一海軍區	横須賀鎮守府	七百三十一人
	全 海兵團	千四百三十八人
第二海軍區	吳 鎮守府	三百五十三人
	全 海兵團	千四百七十四人
第三海軍區	佐世保鎮守府	二百五十八人
	全 海兵團	千〇五十八人

其外軍艦乘組人及水雷隊事務官等ナリ又我帝國軍艦及乘組人員ヲ示セバ左表ノ如

軍艦及乘組人員表 (第十統計年)

區別		艦名	艦質	排水量	馬力	砲數	乘組人員	
常備艦隊	計	高千穂	鋼	三,七五九	七,五二七	八	三九八	
		扶桑	鐵製甲鐵帶	三,七七七	三,九三二	一〇	三六七	
		浪速	鋼	三,七五九	七,七二〇	八	三四六	
		高雄	鋼骨鐵皮	一,九二七	二,五〇七	五	二一五	
		葛城	鐵骨木皮	一,六三二	一,四〇四	七	二三五	
		大和	全	一,六五六	一,〇七一	七	二二六	
		龍驤	木製鐵帶	一,六五一〇	二,四一五一	四五	一,七八七	
		筑波	木	二,五七一	八〇〇	一五	三四二	
		八重山	鋼	一,七四八	五,四二二	三	二九六	
		武藏	鐵骨木皮	一,六六五	一,八三〇	七	四一五	
橫須賀	計	迅鯨	木	一,四六四	—	—	二四九	
		砲術練習艦	—	—	—	—	—	
		練習艦	—	—	—	—	—	
		非役艦	—	—	—	—	—	
		高等水兵練習艦	—	—	—	—	—	
		水雷術練習艦	—	—	—	—	—	
鎮守府	計	淺間	全	一,四四五	—	—	—	
		天城	全	一,〇三〇	七三〇	一一	一六〇	
		愛宕	鋼骨鐵皮	七四四	九七〇	二	一五三	
		千代田	鋼	二,四四〇	五,六〇〇	一〇	一五五	
		金剛	鐵骨木皮	二,二八四	二,〇三四	九	三一四	
		比叡	全	二,二八四	二,二二七	九	三三五	
		天龍	木	一,五四七	一,一六二	六	一九三	
		筑紫	鋼	一,三七二	二,四〇〇	六	二七	
		摩耶	鐵	七五〇	七三五	二	一〇一	
		赤阪	鋼	六二二	九五〇	四	一一五	
鎮守府	計	石川	木	一,二四五	—	—	—	
		鳳翔	木	二五三	—	—	—	
		館山	木	六二二	二二四	三	六四	
		練習艦	—	—	—	—	—	
		非役艦	—	—	—	—	—	
		警備艦	—	—	—	—	—	
		非役艦	—	—	—	—	—	
		練習艦	—	—	—	—	—	
		總計	—	—	—	—	—	—
		總計	—	—	—	—	—	—

區別		艦名	艦質	排水量	馬力	砲數	乘組人員	
鎮守府	計	淺間	全	一,四四五	—	—	—	
		天城	全	一,〇三〇	七三〇	一一	一六〇	
		愛宕	鋼骨鐵皮	七四四	九七〇	二	一五三	
		千代田	鋼	二,四四〇	五,六〇〇	一〇	一五五	
		金剛	鐵骨木皮	二,二八四	二,〇三四	九	三一四	
		比叡	全	二,二八四	二,二二七	九	三三五	
		天龍	木	一,五四七	一,一六二	六	一九三	
		筑紫	鋼	一,三七二	二,四〇〇	六	二七	
		摩耶	鐵	七五〇	七三五	二	一〇一	
		赤阪	鋼	六二二	九五〇	四	一一五	
鎮守府	計	石川	木	一,二四五	—	—	—	
		鳳翔	木	二五三	—	—	—	
		館山	木	六二二	二二四	三	六四	
		練習艦	—	—	—	—	—	
		非役艦	—	—	—	—	—	
		警備艦	—	—	—	—	—	
		非役艦	—	—	—	—	—	
		練習艦	—	—	—	—	—	
		總計	—	—	—	—	—	—
		總計	—	—	—	—	—	—

總計	畿中	府守鎮保世佐								
		計	警備艦	測量艦	練習艦	警備艦	練習艦			
			海	磐城	滿珠	春日	海門	日進		
三四	千島	松島	嚴島	六	鳥海	磐城	滿珠	春日	海門	日進
	全	全	鋼		鐵	全	全	全	全	木
	七五〇	四、二七八	四、二七八	六、五一一	七三二	七〇八	八六二	一、二八九	一、四二九	一、四九二
	五〇〇	五、四〇〇	五、四〇〇	四、五四一	七三四	五九〇		一、二〇〇	一、三〇七	七一〇
		一三	二二	二六	二	四	四	五	七	四
				八二〇	一〇五	一一七	九八	一七二	二〇七	一二一
	五、九八一									

### 第四編

## 財政及自治制

### 第二十一章

#### 租税及國家ノ經營

國家ノ職務ハ總テ國家ノ經費ナリトノ套語アルガ如ク既ニ國家ヲ組織シ其職務ヲ履行スル時ハ第一ニ其活動ニ要スルモノハ經費是ナリ。而シテ其經費ハ國家ヲ組成スル各人ヨリ釀納スベキモノニシテ之ヲ名ケテ租税ト稱シ國民ハ必ズ租税負擔ハ義務ヲ有ス之ヲ納税義務ト云フ

凡ソ租税ニハ國家ヨリ直接ニ徵收スルモノ即チ國税ト地方自治體ヨリ徵收スルモノ即チ地方税トノ二種アリ而シテ又別ニ市費及町村費ト稱スルモノアリテ市及町村ナル自治體活動ニ要スル經費ヲ支辨スルモノトス

### 國稅

國稅ハ之ヲ國家事業ニ要スル經費ニ支辨スルモノニシテ其徵收ハ左ノ科目ニ別テリ  
 (一)地租  
 (二)所得稅  
 (三)酒造  
 (四)醫藥營業稅  
 (五)烟草稅  
 (六)證券印稅  
 (七)醬油稅  
 (八)菓子稅  
 (九)沖

總縣酒類出港稅(一)米商會所稅(二)株式取引所稅(三)國立銀行稅(三)賣藥稅(四)船稅(五)車稅  
 (六)度量衡稅(七)北海道水產稅(八)銃獵免許稅(九)牛馬買賣免許稅(十)海關稅其手數料雜收  
 入及其他ノ收入ニシテ右ニ對スル歳入額及歳出額ヲ各年ニ就キ示セバ左ノ如シ

年 度	歳 入 額	歳 出 額
明治二十四年度 豫算	八三、四六二、五三三	七七、〇一二、二五二
全 二十三年度 現計	一〇六、〇一三、〇五〇	八一、八九六、五六七
全 二十二年度 全	九六、六八七、九七九	七九、七一一、六七一
全 二十一年度 全	九二、八一四、八〇六	八一、〇八九、〇一三
全 二十年度 全	八八、一九一、四四五	七九、六八七、五一五
全 十九年度 決算	八五、三三六、一四四	八三、二二三、九六〇
全 十八年度 全	六二、一五六、八三五	六一、一一五、三一一
全 十七年度 全	七六、六六九、六五四	七六、六六三、一〇八
全 十六年度 全	八三、一〇六、八五九	八三、一〇六、八五九
全 十五年度 全	七三、五〇八、四二七	七三、四八〇、六六七

國稅科目ノ中其額ノ重、モナル、モ、ハ、ヲ舉グレバ第一地。租。ニシテ明治廿四年度ニ於テ

三千八百七十七萬餘圓ヲ占メ内田。租。二千七百八十九萬餘圓。畑。租。六百四十四萬圓ナ  
 リ次ニ酒造稅。ニシテ一千五百五十六萬餘圓ナリ其他百萬圓以上ノ稅目ハ海關稅。四  
 百四十八萬圓。烟草稅。百八十四萬餘圓。醬油稅。百三十萬圓等ナリ此等ノ收入總額ヲ指  
 シテ國家ノ歳入ト云フ  
 歳出ハ殆ト歳入ト大差ナキ額ニシテ明治廿三年度ノ現計ハ八千一百八十九萬六千  
 五百六十七圓ニシテ明治廿四年度ノ豫算ハ七千七百一萬二千二百五十二圓ナリ而  
 ノ明治廿四年度ノ支出額ハ左ノ如シ

外務省	七四五、三八六	司法省	三七五、二七〇
内務省	一一、二一〇、五四一	文部省	一、〇〇五、五八三
大藏省	二八、一六七、二五二	農商務省	八六九、九八五
陸軍省	一三、六七二、七二一	遞信省	六一、五七七、六四九
海軍省	七、四三〇、四三二	國庫豫備金	一、〇〇〇、〇〇〇
合計	七四、〇一二、二五二		

但右ハ歳出經常部及歳出臨時部ヲ合算セリ

地方稅

地方税ノ賦課ハ之ヲ(一)地稅割(二)營業稅(三)雜種稅(四)戶數割ノ各科目ニ分チ各府縣ニ於テ徵收スル租稅ニシテ其支出スベキ費目ハ(一)警察廳舎建築修繕費(二)土木費(三)府縣會議諸費(四)衛生及病院費(五)教育費(六)郡區廳舎建築修繕費(七)郡區吏員給料旅費及廳中諸費(八)教育費(九)浦役場及難破船諸費(一〇)管内限諸達書及揭示諸費(一)勸業費(二)戶長以下給料旅費自治制施行前(三)地方稅取扱費(四)府縣廳舎建築修繕費(五)府縣監獄費及建築修繕費(六)衆議院議員撰舉費及其他諸費ニシテ全國三府四十二縣ニ於ケル地方稅收入總計額ハ左ノ如シ

明治廿一年度 全 廿二年度 全 廿三年度  
 二二、二九七、六九〇圓 一七、〇八六、四二六圓 一五、〇八一、一三〇圓

市費

市費歲入ハ之ヲ地價割、家屋及戶數別割、營業割、所得稅附加等ニ賦課シテ徵收シ其他ノ收入ヲ以テ經費トシ其支出費目ハ會議費、市區役所費、土木費、教育費、同補助費、衛生費、救助費、災害豫防及警備費、勸業費及其他ノ諸費トシ明治二十二年年度ニ於ケル三十四市ノ歲入合計ハ百四十三萬二千六百六十六圓ニシテ人口一、二、付負擔額ハ二十六錢ナリ又一市ノ平均歲入額ハ四萬二千二百二十二圓ニシテ最モ大ナルハ東京市六十一

萬三千圓ニシテ次ヲ大阪十七萬八千圓、神戸五萬二千圓等ニシテ最モ小ナルハ松山市四百五十六圓、岐阜市二千九百八十五圓等ナリトス一人ノ負擔額最モ多キハ山形市六十六錢及富山市五十二錢、福井市四十錢等ニシテ最モ少キハ名古屋市五錢次テ岐阜市九錢、德島市十二錢等ナリ

町村費

町村費ハ其歲入ヲ地價割、反別割、家屋及戶數別割、營業割、所得稅附加其他ノ賦課ニ分チテ徵收シ其支出ハ會議費、役場費、土木費、教育費、同補助費、衛生費、救助費、災害豫防及警備費、勸業費其他ノ諸費トシ明治二十二年年度ニ於ケル一廳二府三十八縣(京師長崎、靜岡、神戶、大阪、京都、奈良、和歌山、高松、廣島、岡山、香川、愛媛、高知、福岡、佐賀、長門、山口、熊本、鹿兒島、那霸)ノ收入總額ハ一千五百五十四萬二千八百四十九圓ナリ故ニ一府縣ノ平均額ハ三十七萬九千〇九十三圓ニシテ人口一、二、付平均負擔額ハ三十六錢ナリ收入額ノ最モ多キハ福岡ニシテ百十六萬餘圓ニシテ次ヲ兵庫ノ七十一萬圓、新潟六十五萬圓、福島六十四萬餘圓、宮城六十二萬圓等トシテ最モ少キハ東京九萬餘圓次ニ香川十五萬餘圓等トシ一人負擔額ハ最モ多キハ宮城ニシテ一人人口ニ付六十四錢次ニ福岡五十四錢、福島五十三錢、山形五十二錢ニシテ最モ少キハ千葉十七錢次ニ香川二十錢、大分二十一錢等ナリトス

各税ノ府縣ニ對スル納額ノ多寡  
 各府縣ニ就キ國稅納額ハ多寡ヲ觀ルニ一縣ニレテ納稅ノ最モ多キハ兵庫ニレテ四  
 百三十八萬餘圓ニ上レリ是レ釀酒稅ノ多額ナルニヨル次ニ愛知大阪新潟岡山及福  
 岡等ナリトシ最モ小ナルハ(沖繩北海道ハ特別免稅宮崎ニレテ六十萬餘圓次ハ鳥取  
 山梨青森及長崎等ナリトス又人口ニ對スル納稅額ノ最モ多キモ兵庫ニレテ二圓  
 八十四錢次ニ滋賀三重及岡山ハ二圓以上ナリ最モ少キハ鹿兒島ノ一圓〇二錢ニシ  
 テ次ニ長崎東京及岩手等ナリ而シテ全國民ノ平均負擔額ハ一圓六十三錢ナリトス  
 地方稅收入ノ最モ多額ナルハ東京ニレテ百三萬餘圓ニ上リ次ヲ新潟大阪愛知トシ  
 最モ少ナルハ宮崎ニシテ二十萬餘圓ナリ次ヲ鳥取奈良福井香川ノ各縣トシ一人ノ  
 賦課額ノ多キハ山梨ニシテ五十三錢鳥取東京佐賀富山等トシ最モ少キハ長崎廣島  
 高知神奈川ノ各縣ニシテ共ニ二十六錢次ニ熊本香川千葉岩手岐阜ノ各縣ナリトシ  
 而シテ全國平均ノ分頭ハ三十四錢ナリ  
 國稅地方稅市費及町村費ヲ合計スレバ全國一年ノ收入額ハ(明治二十)一億三千七十  
 四萬九千四百二十圓ニシテ人口ニ對スル負擔額ハ三圓二十六錢ナリ  
 今獨國統計學士かうふきん(Kauffman)氏ガ普澳(匈牙)利(佛)英(露)ノ六箇國ニ就キ國家

ノ目的ヲ濟充スルガ爲メニ要スル國民ノ負擔額ヲ調査セル結果ト我邦ノ租稅自治  
 費及負擔トヲ比較スレバ左ノ如シ(但シ千八百八十八年ヨリニシテ原ト獨貨馬ナリ  
 割ヲ以テ改算シタルモノナリ)  
 各國經費及國民負擔額

國名	經費總額	負擔額	人口(二付)
日本	一三〇、七四九、四二〇	三二六	人口一三付
佛蘭西	八五三、〇七三、三四四	二二、四二二	
英吉利	七五八、一五三、三三三	二、五九九	
露西亞	七七九、七五八、八四八	八、三七	
普魯西	七二一、三四五、五二六	二五、一〇	人口一三付
埃地利	三七六、五五七、二四〇	一七、二〇	
伊太利	四八五、三五二、一四五	一六、二〇	

かうふきん氏ハ右表ニ付附言シテ曰ク一人ニ付キテノ經費ノ多寡ハ必シモ國民負  
 擔ノ輕重ヲ表スルモノニアラズ蓋シ今日ノ如ク一人ノ經濟ヲ根本トスル所ノ社  
 會組織法ニ於テハ政府モ亦是レ財產ヲ所有スル一人ノ個人即チ法人タルニ外ナラズ  
 テ官有地、森林、貸家、製造場、鐵道及種々ノ專賣權等ヲ有シ之ヲ以テ一人ト同シク自  
 家ノ經濟ヲ計リ其收入(我日本ノ國稅第)ヲ以テ政費ノ幾分ヲ支辨シ而シ尙ホ足ラザ



ル所ノモノハ租税等ノ名義(我國稅第一種)ヲ以テ之ヲ國民ヨリ徵收ス是レ即チ國民ノ負擔ナリ故ニ官有財産愈々大ナレバ租税ヲ以テ政費ヲ支辨スルノ割合ハ益々少ナラザルヲ得ズ云々ト

又國稅ト地方稅(市町村費)トノ租稅全額ニ於ケル各國ノ比例ヲ示セバ左ノ如シ

國稅	地方稅	國稅	地方稅
日本	五〇	普魯西	六九
佛蘭西	七二	埃地利	七二
英吉利	六六	伊太利	七三
露西亞	八六		二七

右ニヨリテ之ヲ觀レバ地方稅ハ最も多キハ我國ナリ恰モ國稅ト切半ニシテ租稅ノ五割ニ當リ其次ハ英國ニシテ地方稅三割四分普魯西ハ三割一分ナリ最も少キハ露國ニシテ地方稅厘ニ一割四分ニ當レリカ氏ハ又之ニ附言シテ此比例數ハ即チ國家ハ政務ト自治トハ關係ヲ示スモノナルヲ以テ殊ニ注目スベキ價值アルモノトス然レモ徒ニ自治制ニ心醉スル者自治制ヲ以テ強チ國家ノ負擔ヲ輕減スルモノト爲スナカレ國家ノ負擔必シモ自治制ノ爲メニ輕減スルニ至ラザルヲ露國ヲ以テ證スベシ

(露國セハ自治制未ダ)云々ト言ヘリ(我邦ニ於テモ自治制施行前町村費ハ一人口ニ發達セザレバ制未ダ)云々ト言ヘリ(我邦ニ於テモ自治制施行後ハ三十一人口ニ

次ニ國家ノ經營ニ就キ其重モナル經費ヲ人口ノ分頭及經費總額ニ對スル百分比トシテ歐洲ノ重モナル諸國ト我國トノ比較ヲ示ス以下數表ノ如シ

國債費

國	人口ニ付	經費總額ニ對スル割合	國	人口ニ付	經費總額ニ對スル割合
日本	〇四一四四	一一二七一	普魯西	一九九	七八八
佛蘭西	五〇六二	二五三一	埃地利	三一九	一八七七
英吉利	三三二	一七二八	伊太利	四三一	二六六二
露西亞	二七七	二九五四			

國防費

國	人口ニ付	經費總額ニ對スル割合	國	人口ニ付	經費總額ニ對スル割合
日本	〇七三二	二二四六	普魯西	二〇八五	一六八二

右表ハ國家防禦ニ關スル費用ノ多寡ヲ示スモノニシテ國防費ノ割合最モ大ナルハ英國ニシテ次ヲ露國トシ最モ小ナルハ普國ニシテ我國ハ普國及埃國ノ上ニアリ  
教育及學術技藝費

佛蘭西	一、三三二	二五、〇七	埃地利	一、八八〇	一七、三六
英吉利	二、八七八	三四、四二	伊太利	一、七七八	二二、二五
露西亞	〇、七二二	二九、一三			
日本	人口一ニ付	經費總額ニ對スル割合	普魯西	人口一ニ付	經費總額ニ對スル割合
佛蘭西	〇、三三四	六、八二	埃地利	一、四二	一、六五
英吉利	一、五八	八、八三	伊太利	一、七六	五、二五
露西亞	一、三〇五	六、〇七			
	〇、三二七	三、七九			

右表ハ各國ノ國民教育及學術技藝ノ獎勵ニ費ス金額ニシテ佛國ハ割合ニ最モ多ク之ヲ費シ次ハ我國ニシテ英國之ニ次ギ伊國ハ最モ小ナリトス  
交通費郵便電信及鐵道ヲ除ク

日本	人口一ニ付	經費總額ニ對スル割合	普魯西	人口一ニ付	經費總額ニ對スル割合
佛蘭西	〇、三二四	九、六〇	埃地利	〇、九二〇	三、六六
英吉利	二、一九五	二二、二九	伊太利	一、二四〇	三、五六
露西亞	一、八〇〇	五、〇七			
	〇、一七三	一、九三			

右表ハ交通ニ費ス各國ノ比較ニシテ郵便電信及鐵道ハ支出ノ收入ヨリ甚シク超過スルヲナキヲ以テ除去セラレタリ故ニ此ノ費目ハ專ラ通路及航海ノ經費ニ係ルモノニシテ我國ニアリテハ航海ノ爲メニ費ス公費ハ至テ少ク之ニ代フルニ道路ノ改築修繕ハ頗ル多額ノ費用ヲ要シ特ニ地方費ニ於ケル交通費ハ專ラ道路ナリト知ルヘン今各國ノ比較ヲ觀ルニ最モ多キハ佛國ニシテ次ヲ伊國及我國トス最モ寡キハ露國ナリトス  
産業獎勵費

日本	人口一ニ付	經費總額ニ對スル割合	普魯西	人口一ニ付	經費總額ニ對スル割合
佛蘭西	〇、〇六三	一、八五	埃地利	〇、三二五	一、二三
英吉利	〇、二四	一、三四	伊太利	〇、五八七	二、四五
	〇、三三三	一、〇四			

右表ハ各國ノ農工商等ニ關スル事業ヲ獎勵スル爲メニ要スル公費ナルヲ以テ前表ニ示セル交通費ノ如キモ亦此中ニ算入セラレシモノモアリ今此費目ニ對シ最モ多キハ埃國ニシテ次ヲ我國トシ伊國最モ寡少ナリトス  
 以上ハ各邦ノ國家經營ニ要スル重モナル經費ヲ以テ我國ト比較シタルモノナリ而シテ以上ノ諸經費中各國共概シテ最モ多額ヲ占ムルモノハ何ナルヤヲ探究スレバ頗ル奇異ノ觀アルベシ即チ國防費及國債費是ナリ此ノ二目ノ經費ヲ合算スレバ國家經費ハ總額過半ヲ占ムル國アリ(露英)其他ノ邦ト雖此兩經費ハ殆ト半ニアリ之ニ就キカ氏ハ附言シテ曰ク今若シ哲理的志想ヲ離レ統計家トシテ歐洲六大國ニ着目スルモノアラバ必ズ現今國家ノ大目的ハ國債ト國防トニアルガ如キノ成跡アルヲ察知スベシ殊ニ露英佛ノ如キ其國債費及國防費ノ經費總額ノ過半ニ達スル邦國ニアリテハ一目シテ此感覺ヲ惹起スベシ其他ノ諸國ト雖亦必ズ此目的ニ外ナラザルベシ云々ト以テ現今世界各國ノ傾向如何ヲ察スベシ

第二十二章

國債及貨幣

國債トハ國家ノ負債ニシテ國民ノ負擔スベキ公債ナリ。國債ニ外國債、內國債ノ別アリ、外國債ハ國用多端等ノ爲メ資ヲ外國ヨリ借入シタル負債ニシテ內國債ハ資ヲ內國ニ募リタルモノナリ凡ソ時運ノ變遷、戰亂、騷擾及天變地異等ハ財政ニ影響ヲ及ボシ國債ノ起因トナルヲ各國皆然リ特ニ我邦ノ如キハ維新ノ大變革ヲ經過シタルハ之ニ從テ制度ノ改正、財政ノ整理、政務ノ擴張、擾亂ノ鎮撫等ニヨリ多額ノ公債ヲ募集スルニ至リ維新以來、內外ノ公債ヲ起センモノ前後十四回、變亂ニ付臨時借入シタルモノ一回ナリ今其ノ種類、募集、高發行期、償還期等ヲ舉グレバ左ノ如シ

種類	證書發行及借入金高	條例發布及約定年月	元金償還末年
外國舊公債	四、八〇〇、〇〇〇	明治三年四月	明治十五年八月皆済
外國新公債	一、七二二、〇〇〇	全 六年一月	全 三十年
舊公債	一〇、九七三、七二五	全 六年三月	全 五十四年迄(五十箇年)
新公債	一三、四一八、一七五	全 六年三月	全 二十九年
金札引換公債	六、六六九、二五〇	全 六年三月	全 三十年

秩 祿 公 債	一六五五八〇〇	全 七 年 三 月	全 十 七 年 皆 濟
金 祿 公 債	一七三、八六一、五七五	全 九 年 八 月	全 三 十 九 年
舊神官配當祿公債	三三四、〇五〇	全 十 年 三 月	全 十 九 年 皆 濟
征討費借入金	一五〇、〇〇〇	全 十 年 五 月	全 三 十 年
起 業 公 債	一、三五〇、〇〇〇	全 十 一 年 五 月	全 三 十 五 年
金札引換無記名公債	七九二、九〇〇	全 十 六 年 十 二 月	全 五 十 三 年
中山道鐵道公債	二〇〇、〇〇〇	全 十 六 年 十 二 月	全 四 十 七 年
海 軍 公 債	一、三〇〇、〇〇〇	全 十 九 年 六 月	全 五 十 五 年
整 理 公 債	六六、九七一、三五〇	全 十 九 年 十 月	全 七 十 六 年
鐵道費補充公債	二〇〇、〇〇〇	全 二 十 二 年 一 月	全 七 十 六 年
合 計	三、七四八、一四七、七二五		

上表ニ示スガ如ク我邦公債募集通計總額ハ三億七千四百八十一萬四千七百二十五圓ニシテ其内既ニ償還ヲ了リタルモノ一億二千六百三十四萬六千七百六十四圓未償還高ハ二億四千八百四十六萬七千九百六十圓ナリ(明治二十年五月十左ニ各公債ニ就テ其發行ノ目的及沿革ヲ略叙スベシ)

外國舊公債ハ内國運送ノ便ヲ開キ物産ヲ興シ一般經濟ノ發達ヲ計ルノ目的ヲ以テ英國倫敦ニ於テ募集シタルモノナリ是レ外國ニ於テ公債募集ノ嚆矢トス此ノ募集金ヲ以テ東京橫濱ノ鐵道ヲ敷設シ新紙幣製造ノ資トシ又新銀貨鑄造ノ地金等ヲ購求シタリ

外國新公債ハ華士族中秩祿ヲ奉還スルモノニ就業ノ資金ヲ給シ併セテ諸般ノ有益事業ノ資途ニ供スルノ目的ヲ以テ募集シタルモノニシテ英國倫敦ニ於テ募集シタル以上二個ヲ外債トス

内國新及舊公債ハ維新前舊藩々ニ於テ財政ノ制區々ニシテ一定ナラズ用度ニ不足ヲ訴ルトキハ概テ藩債ヲ起シ之ヲ治下富豪ノ農商ニ徵シ又ハ他管ノ人民ヨリ借入セリ而シテ米穀及金錢ノ借アリ或ハ藩札ヲ發行スル等其名義區々ナリシモ皆是レ負債タルニ外ナラズ既ニシテ明治二年各藩版籍ヲ奉還シ封建ノ制度全ク廢セラレ土地人民盡ク王政ノ下ニ服スルニ至リ舊藩債ハ悉ク改メテ政府ノ公債トシ弘化元年ヨリ慶應三年マデノ藩債ヲ舊公債トシ明治元年ヨリ全四年(明治四年)マデノ藩債ヲ新公債トセリ

金札引換公債募集ノ目的ハ明治元年發行セシ所ノ官省札及維新後ニ發行セシ所ノ

新圓札ハ當時人民未ダ紙幣ノ使用ニ慣レズ都鄙共ニ動モスレバ正金ト紙幣トノ間ニ差違ヲ生シ金札ノ通用圓滑ヲ欠グヲ以テ從來發行ノ金札ヲ引換ヘンガ爲メニ發布セラレタルモノナリ

秩○祿○公○債○ハ華士族卒ニ農工商營業ノ自由ヲ許可シ彼等ヲシテ力食ノ途ニ就カレムル爲ニ其資金ヲ供給スルノ目的ニテ募集シタルモノナリ從來世祿ニ食ミタル輩ヲシテ俄ニ力食ノ途ヲ開カシメントハ誠ニ難事ニシテ假令力食セントスルモ資本裕ナラズ興産ノ業ニ充ツベキ財ナレ是ニ於テ其家祿ヲ奉還シ資ヲ得ントスル者ニハ永世祿ハ六箇年終身祿ハ四箇年分ヲ合計シ其高ノ半ハ公債證書半ハ現金トシ交付セシ所ノモノナリ

金○祿○公○債○ハ從來華士族及平民ニ給與セン家祿賞典祿ノ支給高ヲ公債證書ニ換ヘ一時ニ下附シタルモノナルヲ以テ我國公債中最モ巨額ノモノニシテ實ニ一億七千萬圓以上ニ達シタリ

舊○神○官○配○當○祿○公○債○ハ維新後神職ヲ離レ無給無告ノ民トナリタル舊神官ニ下賜セラレタルモノナリ

征○討○費○借○入○金○ハ明治十年西南播擧ノ費用ニ充ンガ爲メ借入シタルモノナリ此役也

事○願○ル○重○大○ニ○シ○テ○從○軍○ノ○兵○數○六○萬○六○千○餘○戰○線○數○十○里○ノ○遠○キ○ニ○亘○リ○日○子○ヲ○費○ス○ト○二○百○餘○日○ナ○リ○加○フ○ル○ニ○戰○時○徵○發○ノ○專○未○ダ○全○カ○ラズ○戰○地○道○路○ノ○險○惡○ナ○ル○等○ハ○非○常○ノ○費○用○ヲ○要○シ○當○初○ノ○豫○算○四○千○二○百○萬○圓○ニ○達○セ○リ○此○ノ○巨○額○如○何○ト○モ○ス○ル○ナ○キ○所○ヨ○リ○第○十○五○國○立○銀○行○ノ○創○立○ニ○際○シ○タ○ル○ヲ○以○テ○千○五○百○萬○圓○ヲ○同○銀○行○ヨ○リ○借○入○シ○タ○ル○モ○ノ○ナ○リ

起○業○公○債○ハ○內○國○運○輸○ノ○便○ヲ○開○キ○實○業○ノ○發○達○ヲ○促○シ○併○シ○テ○當○時○創○設○ニ○係○ル○國○立○銀○行○ノ○事○業○ヲ○發○揚○ス○ル○ガ○爲○メ○ニ○內○國○人○民○ヨ○リ○募○集○シ○タ○ル○モ○ノ○ナ○リ

金○札○引○換○無○記○名○公○債○ハ○政○府○發○行○ノ○紙○幣○ヲ○減○シ○其○價○格○ヲ○回○復○ス○ル○ノ○目○的○ヲ○以○テ○募○集○シ○タ○ル○モ○ノ○ナ○リ

中○山○道○鐵○道○公○債○ハ○其○名○ノ○示○ス○ガ○如○ク○中○山○道○中○上○野○高○崎○ヨ○リ○美○濃○大○垣○ニ○達○ス○ル○マ○デ○鐵○道○ヲ○敷○設○シ○近○江○長○濱○ヨ○リ○大○垣○ニ○至○ル○マ○デ○ノ○線○路○ニ○聯○絡○シ○以○テ○東○西○兩○京○ヲ○貫○通○ス○ル○費○ニ○充○ツ○ル○ガ○爲○メ○ニ○募○集○セ○ラ○レ○タ○リ○然○ル○ニ○中○途○目○的○ニ○變○更○ア○リ○テ○此○募○集○金○ノ○中○ヨ○リ○敦○賀○大○垣○間○鐵○道○補○足○ニ○支○出○シ○又○越○後○直○江○津○ニ○達○ス○ル○支○線○敷○設○ニ○支○出○シ○次○デ○中○山○道○碓○氷○以○西○ノ○工○事○困○難○ナ○ル○ヨ○リ○之○ヲ○東○海○道○ニ○移○ス○ト○決○シ○殘○額○一○千○萬○圓○ハ○東○海○道○線○ニ○支○出○シ○タ○リ○又○戶○塚○橫○須○賀○線○及○大○津○長○濱○線○モ○此○募○集○金○ヨ○リ○流○用○シ○タ○リ

海○軍○公○債○ハ○海○軍○擴○張○ノ○忽○ニ○ス○ベ○カ○ラザルヲ以テ其財源ハ國債ニ依ルトシ募集セ

ラレタルモノナリ  
 整理公債募集ノ目的ハ從來發行ノ公債證書ハ數多ノ相異ナル事情及條例ニヨリタルモノニシテ頗ル錯綜ヲ極メ且ツ金利ノ低落ナルヲ以テ從前發行ノ六分以上利附公債ヲ償還整理スルノ目的ヲ以テ大藏大臣財政ノ便宜ヲ計リ漸次之ヲ募集セルモノナリ  
 鐵道費補充公債ハ神奈川縣戶塚橫須賀間東海道鐵道ノ支線ヲ敷設シ又滋賀縣大津長濱間ニ一線ヲ敷設スルノ資金ヲ補充スルノ目的ヲ以テ募集シタルモノナリ  
 貨幣

我國維新前ハ各藩ニ於テ財政ヲ異ニシタルヲ以テ通貨ノ制モ亦甚々區々ナリシ而シテ德川政府發行ノ硬貨ハ凡ソ三類アリシ(一金貨即チ判金)(二銀貨)(三銅真鍮鐵ノ諸錢)是ナリ・金銀貨ハ舊政府ニ於テ安政年間ヨリ廢應ニ至ルマテ鑄造セシモノニシテ銅錢以下ハ寛永年間ヨリ廢應ニ至ルマテ鑄造セシモノナリ又硬貨ノ外ニ楮幣アリシ楮幣ハ各藩々及旗下ニ於テ其各領内通用ノ爲ニ製造發行セシ者ニシテ金札銀札錢札米札等ノ名ヲ附シ全國各藩ニ於テ發行シタルヲ以テ其種類甚々多ク凡ク六百餘種ニ下ラザリント云フ

以上ノ舊通貨ノ流通額ハ凡幾何ナリシヤ今詳ニシ難シト雖モ大藏省ノ調査ニ據レバ金銀貨合シテ凡一億四千萬圓(新貨幣ニ換算)舊銅真鍮鐵錢等凡六百餘萬圓ニシテ又各藩及旗下發行ニ係ル通用札ハ其總額凡三千萬兩内外ナリト云フ故ニ貨幣流通高ハ凡一億七千五百萬圓内外ナリシナルベシ  
 從來我國通貨ノ制斯ノ如トク區々ナリシト德川幕府用度漸ク多端ナルニ際シ金銀貨ノ品位粗惡ナルモノヲ鑄造シタルトニヨリテ世界各國對峙通商ノ時運ニ及ビテハ到底舊來ノ貨幣制度ノ不便不良ナルヲ以テ廢應四年新政府ハ貨幣改正ノ必要ヲ感シ舊制ヲ改革シテ更ニ各國ノ良制ト我國ノ慣例トヲ折衷シテ新貨鑄造ノ旨ニ決シ造幣局ヲ設ケテ新鑄ニ着手セリ新貨ノ形狀價名等ニ關シテハ種々ノ說アリシモ大隈八太郎久世治作ノ議ヲ納レテ貨幣ハ舊貨ノ方形ナリシヲ改メテ圓形トナシ其價名ハ十進一位法ヲ採用シタリ而シテ新貨ノ種類ハ金貨銀貨銅貨ノ三種トシ初メ銀貨壹圓(金目我七匁二分二厘五九ニシテ)以テ本位(他本位トハ貨幣ノ主本ニシテ)ト定メラレタレモ幾クモナク金貨ヲ以テ本位ト定メ壹圓金ヲ以テ原貨ト改メラレタリ則チ各種貨幣ノ名稱品量左ノ如シ

種類	品質	量目	種類	品質	量目
金貨	拾圓	金 一 銀 一 二四八	銀貨	壹圓	銀 銅 一 四一六
	五圓	二四		五拾錢	二〇八
銅貨	壹錢	六二	貳拾錢	八三二	
	半錢	一四	拾錢	四一六	
			五錢	二〇八	

然ルニ其後金貨ハ貳拾圓貳圓壹圓ノ三種ヲ加ヘテ貳圓五拾錢ヲ廢シ銀貨ハ貿易銀ノ一種ヲ加ヘ銅貨ハ貳錢一厘ノ五種及五錢ノ白銅貨ヲ加ヘテ各種貨幣ハ鑄造高ハ明治三年創業ヨリ二十三年ニ至ルマテ總計一億七千二百四十七萬九千七百三十五圓ニシテ其内譯ハ左ノ如シ

金貨 六、五六四、四〇三  
銀貨 九六、三九六、三二四  
白銅貨 二、一〇〇、九六一  
銅貨 一、三、四一八、〇五七  
紙幣ハ政府ヨリ發行セシモノハ百圓五拾圓拾圓五圓貳圓壹圓半圓五拾錢貳拾錢拾錢ノ拾種ニシテ其後國立銀行ノ創立アリテ銀行紙幣ヲ發行シタリ而シテ國用多端ノ

爲メ頻リニ紙幣ヲ増發シタルヲ以テ年々紙幣ノ流通高ハ其額ヲ增シ明治十二年ノ如キハ一億四千六百五十萬圓ノ巨額ニ達シ物價騰貴シ硬貨ト紙幣ト著シク差ヲ生ズルニ至レリ其後漸次紙幣ヲ消印シ明治十七年日本銀行ノ設立アリテ兌換銀行券ヲ發行シ他ノ紙幣ハ益々消印シタルヲ以テ明治二十四年ニハ紙幣銀行紙幣兌換銀行券ノ流通ハ一億二千八百七十八萬四千五百五十六圓トナリ其内譯左ノ如シ

紙幣 三、三七〇、七二二  
銀行紙幣 二、五、四六一、七二三  
兌換銀行券 七、九四八、六七一  
合計 一、二八、七八〇、四五六  
故ニ我國現今ハ貨幣流通高ハ總計凡ソ三億〇、一、二、二、六、〇、〇、〇圓ナリ之ヲ全國人口數ニ配當スレバ分頭凡ソ七圓五拾錢ナリトス

### 第二十三章

#### 富ノ配布

全國中富ノ配布ハ如何・何レハ地方ヲ以テ最モ多ハトシ又最モ少ハトスルヤノ問題ハ頗ル重要ニシテ一事ヲ明ニスレバ他ニ數多ノ緊要ナル事實ヲ發見スベシト雖此問題ヲ解釋スルハ最モ難キヲタリ然レモ近來所得稅ノ徵收アリテ凡人民ノ

資産又ハ營業其他ヨリ生ル所得一ケ年三百圓以上ノ收入アルモノハ納税ノ義務アリ此納税額ハ富ノ配布ヲ觀ルニ頗ル觸強ノ材料ナリ但レ所得税モ精細ノ觀察ヲ下サレバ富ノ配布ヲ知ルコト難シトス何トナレバ所得納税者ノ數多キヲ以テ富有ノ地ト看做スベカラズ納税者多クトモ税額ハ平均ニ少額ナルヤモ知ルベカラズ又納税額多シトモ是又富有ノ地ト稱スベカラズ少數ハ多額納税者ヲ以テ税額ヲ多カラシムルモ知ルベカラザレバナリ依テ今所得高ニ付富ノ配布ニ觀察スベシ第一ハ富豪家ノ多少第二ハ住民一般ニ平均シタル税額ノ多少是ナリ富豪家ノ多少 愛ニ富豪ト稱スルハ一家ニシテ一年間ハ所得高一萬圓以上ハ者ヲ謂フ此富豪ノ數ハ明治三年全國ニ三百三十九家アリ内一萬圓乃至二萬圓ノ者二百二十六萬圓乃至三萬圓ノ者四十四萬圓以上ノ者六十三アリ其總所得高ハ八千九百四十八萬餘圓ナリ而シテ東京ハ輦轂ノ下ニ在リテ經濟社會ノ中心ナレバ富豪ノ多キ固ヨリ其所ニシテ現ニ百八十一家アリ即チ全國富豪總數過半ニ居リ其所得高ハ五千六百五十一萬餘圓ニシテ全國ハ六割三分ヲ占メタリ故ニ天下ノ富豪ハ東京ニ集マレリト謂ベシ次ニ富豪多キハ大阪ニシテ二十九家而シテ其所得高ハ七十六萬五千餘圓ニシテ殆ト全國ノ千分ハ八ニ當リ東京ハ七十四分ハ一ニ過ギテ次ハ神奈川

ニシテ十九家其所得五十六萬五千餘圓ナリ次ニ新潟十六家ニシテ所得二十五萬五千圓及兵庫ノ十八家所得二十三萬圓ナリ其他ノ各地ハ富豪十家以下所得額二十萬圓以下ノミナリ即チ三重七家十五萬圓滋賀八家十四萬七千圓ナリ之ニ次グハ愛知八家九萬七千餘圓ナリ次ニ以下各地富豪ノ數ヲ舉グレバ左ノ如シ

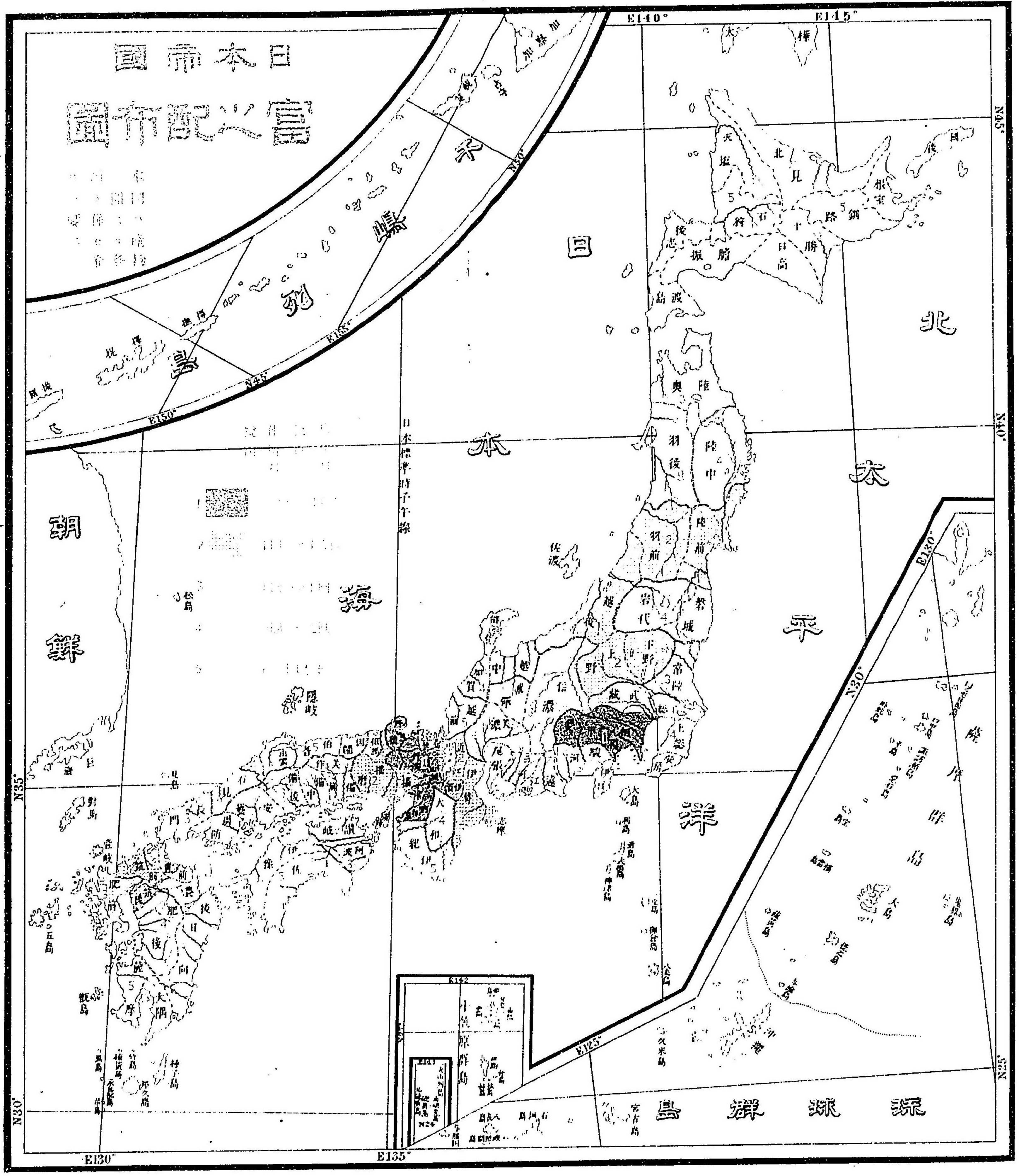
- 五家 福岡 四家 千葉
- 三家 岡山 德島 佐賀 鹿兒島
- 二家 埼玉 群馬 山梨 秋田

一家 茨城 靜岡 福井 石川 富山 福島 宮城 山形 青森 奈良 島根 長崎 熊本 宮崎

皆無 栃木 長野 岐阜 岩手 和歌山 廣島 山口 鳥取 香川 愛媛 高知 大分 沖繩 北海道

富ノ一般分布 以上ハ全國中富豪者ノ多少ヲ舉ゲタルモノニシテ之ヲ以テ直ニ富ノ配布ト觀ルベカラザルヲ勿論ニシテ富豪ハ多數人民中ノ少數ナレバ言ハシ不平均ノ富ナリ故ニ愛ニ一般人民ニ對スル所得税額ノ多少ニ就テ觀察ヲ下スベシ即チ現住戶數百ニ付税額ノ平均數ヲ以テ之ヲ示スベシ是レ最モ自然ニ近キ富ノ配布ナリ但所得税ハ之ヲ五等ニ分チ一等ハ所得金三萬圓以上ハ百分ノ三、二等ハ二萬圓以上ニシテ百分ノ二、三等ハ壹萬圓以上ニシテ百分ノ二、四等ハ千圓以上ニシテ百分





ノ一半、五等、三百圓以上ニシテ百分ノ一ノ稅率ナリ故ニ平均所得金ノ百分ノ一半ト  
 看做シテ大差ナカルベシ因テ愛ニ現住戶數百ニ付拾五圓ノ納稅地方アリトスレバ  
 所得稅ニ對スル收入額ハ千圓ニシテ一戶ノ平均收入ハ一ヶ年十圓ト看テ可ナラン  
 全國ノ平均シテ所得稅ノ納額ハ戶數百戶ニ付十三圓四十七錢ナルヲ記憶スベシ而  
 ノ地方ノ大區畫ニ就テ之ヲ觀レバ第一ニ多額ナルハ本洲中區ニシテ二十圓二十三  
 錢ヲ以テ區中ノ平均額トス中ニモ東京ハ九十七圓五十一錢ニ達シ面ヨリ全國第一  
 位ナリ神奈川二十五圓十錢ニシテ之ニ次ギ最モ少ナルハ福井ノ四圓七十四錢ナリ  
 第二ニ本洲西區ニシテ平均十一圓六十五錢トス内大阪ハ二十七圓七十六錢ニシテ  
 全國第二位ナリ次ニ京都十五圓九十七錢及兵庫十三圓九十五錢ナリ最モ少ナルハ  
 鳥取三圓八十一錢ナリ第三ニ本洲北區ニシテ平均九圓七十五錢内最多ハ宮城十四  
 錢十三ニシテ最少ハ秋田十五圓九錢ナリ第四ニ九州區ニシテ平均六圓八十三錢ニシテ最  
 多ハ福岡十三圓八錢最少ハ鹿島十四圓六錢ナリ第五ニ四國區トシテ平均五圓八十錢ニシテ最  
 多ハ徳島十四圓七錢最少ハ高知十三圓四錢ナリ第六ニ北海道ニシテ平均三圓六十七錢ナリ第  
 七ニ沖繩トシテ平均三圓十六錢ニ過ギズ故ニ全國富ノ配布ハ頗ル不平均ニシテ全國ノ  
 平均數ニ超ルハ獨リ本洲中區ノミ特ニ東京ノ一小部ヲ以テ全國ノ富ハ過半ヲ占領

スルハ事實アリ、其他ノ各區ハ總シテ平均以下ニ居リ著シク少數ナリ、各地ニ於ケル富ノ配布ヲ觀ルニ富之配布圖參看全國中富之著シク多キ地ニケ所アリ一ハ江戸灣南岸ニシテ一ハ大坂灣頭ノ一部ナリ前者ハ東京ヲ中心トシ甲州ノ多産地ニ廣ガリ後者ハ京坂ヲ中心トシ其左右ニハ東江州ノ蕨商地及勢州ノ多産地ヲ控ヘ西ニ兵庫メ酒釀地ヲ控ヘタリ之ニ次グノ富地又ニ所アリ一ハ松島灣及新潟海岸ニ濱スル一部ナリ是ヨリ相連絡シテ内部ノ機業旺盛ナル兩毛地方ニ及ベリ一ハ博多灣ニ濱スル一部ニシテ九州中ノ富有地ナリ、各地方富ノ分布セル形状ニ就テ之ヲ觀ルニ富ノ最モ平均ニ能ク播布セル地ハ栃木トス、即チ富豪ト稱スベキ不平均ノ專有者ハ皆無ニシテ一般ノ納稅者ハ頗ル多ク全國第二位ニアリ總シテ貧困者ノ數少シ之ニ隣スル長野山梨岐阜ノ各地モ富ノ播布ハ比較的ニ平均セリ是レ産業ノ二般ニ隆盛ニシテ人々業ヲ勉メ不生産者少キ證トス之ニ次テ中國ノ廣島山口モ亦富ノ平均ニ分布セン地ナリ之ニ反シテ富ノ播布ハ不平均ナルハ第一千葉ニシテ富豪四家アレモ一般ノ程度ハ甚ダ卑ク第四位ニアリ次ニ愛知モ不平均ニシテ富豪八家ヲ有スレモ一般ノ程度ハ富豪皆無ノ長野岐阜等ノ各地ニ均シ之ニ次テ鹿島岡山ノ如キモ概シテ富ノ分布不平均ノ地ナリトス

日本ヲ中央ヨリ切半シテ其東北部(東ニト西南部(西ニト)ヲ以テ富ノ程度ヲ比較スレハ頗ル重要ノ現象ヲ認ムヘシ西南部ノ古來他ノ事業ハ發達セルニ係ラズ獨リ富ハ度ハ東北未發達ノ新野ニ及バザルト是ナリ其原因種々アルベト雖近因タルモノハ東北部ノ概シテ産業ノ進歩セルニアリ夫レ西南部ハ農産區ナリ東北ハ蠶業區ナリ(俗モ佛國ノTulle如シト)是レ一ノ原因ナラン然レモ特ニ注目スベキハ世界氣運ノ北漸スルニ從ヒ我國勢ノ東北漸スル一斑タルニアラザルナカラシ歟(第三章ノ附錄參)

### 第二十四章

#### 地方自治制

我邦自治制度ノ公然法律トシテ發布セラレシハ明治二十一年四月市制及町村制ノ公布ヲ以テ初トス詎テ勅詔ヲ案ズルニ市制及町村制ハ地方共同ノ利益ヲ發達セシメ人民ノ幸福ヲ増進シ隣保團結ノ舊慣ヲ存重シ且ツ益之ヲ擴張シ都市町村ノ權義ヲ保護スルガ爲メニ制定セラレシモノナリ凡自治制度ノ旨趣ハ自治及分權ノ二原則ヲ實施セントスルニアルモノニハテ之ヲ

實施センニハ第一先ツ地方自治區ナルモノヲ造成セザルベカラズ

抑政府ハ治政ノ大綱ヲ握リ方針ヲ授ケ國家統御ノ實ヲ舉グベキハ其任ナリト雖民間社會事務ノ煩煩富饒ナル決之ヲ同一ニ網羅包括スルヲ能ハザルベシ故ニ政府ガ其責ヲ果スニ便ナランメンニハ必ズ各其機關ナカルベカラズ自治區トハ即チ行政權ノ機關ナリ此ノ自治區ナル機關ハ各個人ノ私利ヨリ成立チタルモノニシテ國家ハ即チ此ノ私利各體ノ合同一致シタル一大團結ナリ然リ而シテ國家ナル大團結ハ其區域ノ甚ダ廣大ナルガ爲メ或部ノ私利ヲ達センメントスレバ或部ニハ不利ヲ來ストトナリ自ラ畫一ノ行政ヲ施ス能ハザルトアリ是ニ於テ法律ノ許ス範圍内ニ於テ特別ノ私利ヲシテ其所ヲ得センメ且ツ之ヲ管理スルノ行法體裁ヲ名ケテ自治ト稱シ而シテ自治區ガ公法上ノ權利ヲ執行シ義務ヲ踐行スル區域ヲ指シテ自治區ト稱ス

地方自治區ノ組織ハ特立ノモノニシテ公法民法ノ二者ニ於テ共ニ一個人民ト權利ヲ同クシ之カ理事者タルノ機關ヲ有スルモノナリ其機關ハ法制ノ定ムル所ニ依テ組織シ自治區ハ即チ之ニ依テ其意思ヲ發表シ之ヲ執行スルヲ得ルモノトス故ニ自治區ハ法人トシテ財産ヲ所有シ之ヲ授受賣買シ他人ト契約ヲ結ビ權利ヲ得義務ヲ

負ヒ、又其區域内ハ自ラ獨立シテ之ヲ統治スルモノナリ

我邦古來ノ習法タル萬般ノ政務ハ悉ク之ヲ中央ノ政府ニ集攬シ一ニ其指揮ヲ仰ガザルヲ得ズ、地方官ノ設ケアリテ各其職權アリト雖、其權限ハ狹隘ニシテ其實ハ全ク政府ノ委任者ノ位置ニアリテ、只政府ニ代リ事ヲ處スルニ過ギズ、テ地方ニ於ケル特權ハ殆ド之ヲ有セズ、政權ハ一ニ中央ニ集メテ、此積弊ヲ改釐シ以テ地方分權ノ實ヲ舉グルガ爲メニハ、人民ニ自治ノ責任ヲ分チ、自ラ地方ノ公益ヲ計リ、地方ノ公事ニ練熟シ、人民參政ノ思想ヲ發達セシメ、以テ國事ニ任ズルハ、實力ヲ養成シ、立憲政治ノ下ニ立ツテ、耻チザルハ、國民タルニ至ラザルベカラズ

我邦地方自治區ニハ、三階級アリ、(一)市、(二)町、(三)村、(四)郡、(五)縣、是ナリ、此三階級ニハ各土地及人民ナルニ原素ヲ有ス、若シ此二者ノ一ヲ欠クハ自治體ヲナスニ足ラザルナリ、市、町、村ナルニ、團體ハ共ニ自主自治ノ行ハル、疆土ニシテ完全ナル自治區ナリ、其區域ハ國土分畫ノ最下級ニシテ、即チ國ノ行政區畫タリ、郡及府縣ニ至リテハ未ダ完全ナル自治ノ體ヲ具備セズ、ト雖、モ、素ト國ノ行政區畫ニシテ、幾分か自治ノ制ヲ兼チ有スルモノナリ、故ニ自治區トシテ之ヲ視レバ、郡ハ數箇ノ町村ノ結合體ニシテ、町村ノ分任力ニ堪ヘザル者ハ郡ニ於テ之ヲ負擔シ、又府縣ハ數箇ノ郡ノ結合體ニシテ、郡ノ分任

力ニ堪ヘザルモノハ府縣ニ於テ之ヲ負擔スルモノナリ、以上三階級ニ行ハル、自治制度ヲ市、制、町、村、制、郡、制、及、府、縣、制、トス

### 第二十五章

#### 市及町村

市、疆、ト、ハ、市、街、地、ニ、シ、テ、郡、ノ、區、域、ニ、屬、セ、ズ、人、口、輻、湊、ノ、地、ニ、シ、テ、別、ニ、獨、立、シ、タル、自、治、體、ノ、疆、土、ナ、リ、其、區、域、ハ、國、土、分、畫、ノ、最、下、級、ニ、シ、テ、即、チ、國、ノ、行、政、區、畫、ナ、リ、之、ニ、施、行、ス、ル、自、治、制、ヲ、市、制、ト、云、ヒ、現、今、東、京、京、都、大、坂、ノ、三、市、ヲ、始、トシ、其、他、人、口、凡、二、萬、五、千、以、上、ノ、市、街、地、ニ、實、施、セ、ラ、ル、モノ、ナ、リ、市、ハ、法、律、上、一、個、人、ト、均、シ、ク、權、利、ヲ、有、シ、義、務、ヲ、負、擔、シ、凡、ソ、市、ノ、公、共、事、務、ハ、官、ノ、監、督、ヲ、受、ケ、テ、自、ラ、之、ヲ、處、理、ス、ル、モ、ト、ス、而、シ、其、市、内、ニ、住、居、ヲ、占、ム、ル、者、ハ、總、テ、其、市、住、民、ト、ス、市、住、民、ハ、市、制、ニ、從、ヒ、公、共、ノ、營、造、物、並、ニ、市、有、財、産、ヲ、共、有、ス、ル、ノ、權、利、ヲ、有、シ、及、市、ノ、負、擔、ヲ、分、任、ス、ル、義、務、ヲ、有、ス、市、公、民、ト、ハ、帝、國、ノ、臣、民、ニ、シ、テ、公、權、ヲ、有、ス、ル、獨、立、ノ、男、子、二、年、以、來、市、ノ、住、民、ト、ナ、リ、其、市、ノ、負、擔、ヲ、分、任、シ、及、ヒ、其、市、内、ニ、於、テ、地、租、ヲ、納、メ、若、ク、ハ、直、接、國、稅、年、額、二、圓、以、上、ヲ、納、ム、ル、者、ヲ、云、フ、市、公、民、ハ、市、ノ、撰、舉、ニ、參、與、シ、市、ノ、名、譽、職

ニ撰舉セラル、ノ權利アリ、又其名譽職ヲ擔任スルハ、市公民ノ義務トス  
 市ハ法律ノ許セル範圍内ニ於テ特ニ市條例ヲ設ケ、又其市ノ設置ニ係ル營造物ニ關  
 シ規則ヲ設クルヲ得  
 市ハ法人タルモノナレバ之ニ代テ思想ヲ發露スル爲メニ代議ノ機關アリ之ヲ市會  
 ト云フ市會議員ハ市内ノ撰舉人其被選舉權アル者ヨリ選舉シ其定員ハ人口五萬未  
 滿ノ市ニ於テハ三十人トシ人口五萬以上ノ市ニ於テハ三十六人トス又人口十萬以  
 上ノ市ニ於テハ人口五萬ヲ加フル毎ニ人口三十萬以上ノ市ニ於テハ人口十萬ヲ加  
 フル毎ニ議員三人ヲ増シ六十人ヲ定限トス市公民ハ總テ撰舉權ヲ有ス撰舉人ハ直  
 接市稅納額ノ多少ニヨリ分レテ一級二級三級ニ區別ス被選舉權ハ選舉權ヲ有スル  
 市公民ハ總テ之ヲ有ス  
 市會ハ其市ヲ代表シ市制ニ準據シテ市ニ關スル一切ノ事件并ニ從來ノ委任ニ依リ  
 又ハ將來法律勅令ニ依テ特ニ委任セラル、事件ヲ議決スルモノトス市會ハ其ノ職  
 權ニ關スル市吏員ノ選舉ヲナシ市ノ行務ヲ監督スルノ權利ヲ有シ市ノ公益ニ關シ  
 テハ官廳ノ諮問ニ對シテ意見ヲ陳述スルノ義務アリ又或場合ニ於テハ公法上ノ爭  
 論ニ付始審ノ裁決ヲ爲スノ權アリ

市ハ法人タルモノナレバ之ニ代テ業務ヲ行フ所ハ行政機關ヲ有ス之ヲ市參事會ト  
 ス而シテ其組織ハ集議制ニシ其吏員ハ(一)市長(二)助役(三)名譽參事會員ヲ以テ成リ市長  
 ハ市參事會員ノ一人ニシ其會ノ事務ヲ統理シ外部ニ對シテ市參事會ヲ代表スルノ權  
 ヲ有ス市長ノ選任ハ市會ニ於テ候補者三名ヲ推薦シ上奏裁可ヲ請ヒ助役及ヒ名譽  
 參事會員ハ市會之ヲ選舉ス市ニハ市參事會ノ推薦ニ係ル收入役一名アリ又市ノ區  
 域廣潤人口密稠ノ地ハ施政ノ便ヲ計ランガ爲メ之ヲ數區ニ分チ每區ニ區長及其代  
 理者一名ヲ置ク然レモ區ハ自治體ニアラズ法人タルノ權利ヲ有セズ市ニハ市會ノ  
 議決ニ據リ委員ヲ置キ市行政事務ノ一部ヲ分掌セシムル等ノコアリ  
 市參事會ハ其市ヲ統轄シ其行政事務ヲ擔任シ市長ノ職務ヲ補助ス市長ハ市政一切  
 ノ事務ヲ指揮監督シ處務ノ滯滞ナキヲ務ム又市參事會ヲ召集シ之ガ議長トナリ  
 其議決ヲ執行シ時ニ臨シテハ議決ノ執行ヲ停止シ急施ヲ要スル場合ニ限り議決ヲ  
 俟タズシテ專行スルコトヲ得ヘシ助役ハ市長ニ對シテ補助員ノ地位ニアリ市ノ收入  
 支拂會計事務ヲ掌ドルハ收入役トス  
 市ハ財產權ヲ有スルコト概テ一個人ト同一ニシテ自ラ其經濟ヲ管理スルノ專權ア  
 リ故ニ其不動產積立金穀等ヲ以テ市ノ基本財產ト爲シ之ヲ維持セザルベカラズ而

ノ市有財産ハ全市ノ爲メニ之ヲ管理シ及共用スルモノトス又市ハ其必要ナル支出及従前法律命令ニ依テ賦課セラレ、又ハ將來法律勅令ニ依テ賦課セラル、支出ヲ負擔スル義務ヲ負ヒ其支出及ビ市ノ費途ヲ支辨スルガ爲メニ其財産ヨリ生スル收入及市税其他ノ歳入アリ市ハ或ル場合ニハ一定ノ方法ニ據リ市債ヲ募集スルヲ得、市行政ハ第一次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ、第二次ニ於テ内務大臣ノ監督ヲ受ク、市ノ行政ニ關スル府縣知事若クハ府縣參事會ノ處分、裁決ニ不服アルモノハ内務大臣ニ訴願シ、若クハ行政裁判所ニ出訴スルヲ得、以上ノ制度ニ遵據シテ現今市ナル自治體ヲナス所ノ名稱及ビ人口ハ左之如シ、明治二十三年末現在

東京府	東京市	一、四一、九九一
京都府	京都市	二八八、八六七
大阪府	大阪市	四七〇、三〇九
神奈川縣	横浜市	四五五、二〇〇
兵庫縣	神戸市	一、二八、一九五
兵庫縣	姫路市	一三六、二二三
兵庫縣	長崎市	二五七、六八
長崎縣	長崎市	五七、六一二

新潟縣	新潟市	四六、四七五
茨城縣	水戸市	二五、九一五
三重縣	津市	二六、一六八
愛知縣	名古屋市	一六五、三四三
静岡縣	静岡市	三八、三二七
山梨縣	甲府市	三一、六七一
岐阜縣	岐阜市	二八、五九〇
宮城縣	仙台市	六〇、九八四
巖手縣	盛岡市	三一、九二五
青森縣	弘前市	三〇、三八七
山形縣	山形市	二八、六七五
秋田縣	秋田市	二八、九一四
福井縣	福井市	二八、七〇三
石川縣	金澤市	三九、九四八
富山縣	富山市	九三、五一七
富山縣	高岡市	五八、二五三
富山縣	高岡市	二九、六一四

市及町村

鳥取縣	鳥取市	二八,一〇一
島根縣	松江市	三五,三二四
岡山縣	岡山市	四五,一七九
廣島縣	廣島市	八六,〇二四
山口縣	赤間關市	三〇,四三二
和歌山縣	和歌山市	五五,五一一
德島縣	德島市	六〇,二二四
香川縣	高松市	三三,七二四
愛媛縣	松山市	三三,一九二
高知縣	高知市	三一,一五七
福岡縣	福岡市	五一,八六四
佐賀縣	久留米市	二五,二二四
熊本縣	佐賀市	二六,四一一
熊本縣	熊本市	四九,六三三
鹿兒島縣	鹿兒島市	五七,〇〇一

以上四十市トス其内甲府岐阜鳥取佐賀ノ四市ヲ除クノ外ハ明治二十二年二月市制

施行地ト指定セラレ甲府岐阜鳥取佐賀ノ四市ハ其後相次テ市制地トナル又高松市ハ一旦郡部ニ入り後再ビ市制地トナレリ

東京京都大阪ノ三市ハ市制中特例ヲ設ケ三市ニ限り市長及助役ヲ置カズ市長ノ職務ハ府知事之ヲ行ヒ助役ノ職務ハ書記官ヲシテ之ヲ行ハシム而シテ其市參事會ハ府知事書記官及名譽參事會員ヲ以テ組織シ又三市ニハ從來ノ區ヲ存シ每區ニハ市參事會員ノ選任ニ係ル區長一名及書記ヲ置キ區長ヲシテ區内ニ關スル國ノ行政及府ノ行政并ニ收入役ノ事務ヲ補助執行セシメ每區ヲ以テ市會議員撰舉區トス

三市ニ於ケル區ノ名稱及其人口別ヲ舉グレハ左ノ如シ(明治二十三年末現在)

麴町區	五四,七五三
神田區	一一七,〇四一
日本橋區	一一二,〇九四
京橋區	九八,〇二四
芝區	一一五,一一〇
麻布區	四六,三二〇
赤坂區	二八,九三八

		東京市			
	四谷區	三、四六四			
	牛込區	四、四八七〇			
	小石川區	四、四四一三			
	本郷區	六、一七七二			
	下谷區	八、五二二六			
	淺草區	一、二、八九八			
	本所區	九、五九〇八			
	深川區	七、一五〇			
京都市	上京區	一、三六、〇八六			
	下京區	一、五二、七八一			
	西區	一、三二、〇〇六			
	南區	一、三八、〇三五			
	東區	一、一五、九七七			
	北區	八、五、二九一			
大阪市					
町村					

町及村の市と同級の自治体ニシテ其區域ハ國土分畫ノ最下級タリ市ト云  
 七町村ト云モ都鄙ノ別ニヨリテ只其名ヲ異ニスルニ過ギズンテ其原質ニ於テハ彼  
 是相異ナラザン故ニ其制度ニ於テモ市制ト大異アルヲナシ又宿驛ト稱シ町ト稱ス  
 ルニ施政大跡ニ於テハ村落ト差異アルヲナシ故ニ自治制度ニ於テハ町宿驛及ヒ  
 村落ハ全ク同一施政ノ下ニ立テリ  
 町制ト市制ヲ施行スル地ヲ除キ總テ町村ニ施行スル制度ヲ云フ町村ハ法律上  
 個人ト均ク權利ヲ有シ義務ヲ負擔シ凡町村公共ノ事務ハ官ノ監督ヲ受ケテ自ラ  
 之ヲ處理スルモノトス  
 凡町村内ニ住居ヲ占ムル者ハ總テ其町村住民トシ町村住民ハ町村制ニ從ヒ公共ノ  
 營造物并ニ町村有財産ヲ共有スルノ權利ヲ有シ及町村ノ負擔ヲ分任スルノ義務ア  
 リ又帝國臣民ニシテ公權ヲ有スル獨立男子二年以來町村ノ住民トナリ其町村内ニ  
 於テ地租ヲ納メ若クハ直接國稅年額二圓以上ヲ納ムルモノハ其町村公民ト稱ス町  
 村公民ハ町村ノ選舉ニ參與シ町村ノ名譽職ニ選舉セラル、ノ權利アリ又其名譽職  
 ヲ擔任スルハ町村公民ノ義務ナリトス  
 町村ハ法律ヲ許セル範圍内ニ於テ特ニ町村條例ヲ設ケ又ハ其町村ノ設置ニ係ル營



造物ニ關シ規則ヲ設クルヲ得  
 町村ハ法人タルモノナレハ之ニ代テ思想ヲ發露スル爲メニ代議機關アリ之ヲ町村會トス町村會議員ハ其町村ノ選舉人其被選舉權アル者ヨリ之ヲ選舉ス其定員ハ其町村ノ人口ニ準シテ下ノ割合ヲ以テ之ヲ定ム人口千五百未滿ノ町村ニ於テハ議員八人人口千五百以上五千未滿ノ町村ニ於テハ議員十二人人口五千以上一萬未滿ノ町村ニ於テハ議員八人人口一萬以上二萬未滿ノ町村ニ於テハ議員二十四人人口二萬以上ノ町村ニ於テハ議員三十人町村公民ハ總テ選舉權ヲ有ス選舉人ハ直接町村稅ノ納額多少ニヨリ分ツテ一級二級ニ區別ス被選舉權ハ選舉權ヲ有スル町村公民ハ總テ之ヲ有ス  
 町村會ハ其町村ヲ代表シ町村制ニ準據シテ町村一切ノ事件從前特ニ委任セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ委任セラレ、事件ヲ議決スルモノトス又其職權ニ屬スル町村吏員ノ選舉ヲ行ヒ町村ノ行務ヲ監督スルノ權利ヲ有シ町村ノ公益ニ關シテハ監督官廳ニ意見書ヲ差出スヲ得又官廳ノ諮問ニ對シテハ意見ヲ陳述スルノ義務アリ或ル場合ニ於テハ町村會ハ公法上ノ爭論ニ付始審ノ裁決ヲナスノ權アリ  
 町村ハ法人タルモノナレハ之ニ代テ業務ヲ行ハ所ハ機關ヲ有ス而シテ其組織市ハ集

議制ナレモ町村ノ行政組織ハ特任制ニシテ專ラ町村長之ニ任シ補助員即チ助役一名若クハ數名ヲ置キ之ヲ補助セシム町村長助役ハ共ニ名譽職ニシテ町村長ノ職務權限ハ其町村ヲ統轄シ町村ノ名ヲ以テ委任ノ強制權ヲ執行シ町村ノ事務ヲ管理ス是ヲ以テ町村長ハ一方ニ在テハ町村ニ對シテ其執行ノ責任ヲ有シ一方ニ在テハ法律ノ範圍内并ニ官廳ヨリ其權限内ニテ發シタル命令ノ範圍内ニ於テ百般ノ事項ニ涉リ町村ノ幸福ヲ増進シ安寧ヲ保護スルヲ務トス而シテ町村長及ビ助役ノ選任ハ町村會ニ於テ其町村公民中選舉權ヲ有スルモノヨリ之ヲ選舉ス町村ニハ町村長ノ推選ニ係ル有給收入役一名アリテ收入支拂會計事務ヲ掌ル  
 町村ハ財産權ヲ有スルト概一個人ト同一ニシテ自ラ其經濟ヲ管理スルハ專權アリ故ニ其不動産積立金穀等ヲ以テ町村ノ基本財産ト爲シ之ヲ維持セザルベカラズ而シテ町村有財産ハ全町村ノ爲メニ之ヲ管理シ及ビ共用スル者トス又町村ハ其必要ナル支出及從前法律命令ニ依テ賦課セラレ又ハ將來法律勅令ニ依テ賦課セラル、支出ヲ負擔スル義務ヲ有ス其支出及ビ町村ノ費途ヲ支辨スル爲メニ其財産ヨリ生ズル收入及町村稅其他ノ歲入アリ或場合ニ於テハ町村ハ一定ノ方法ニ據リ公債ヲ募集スルヲ得

町村行政ノ監督ハ第一次ニ於テ郡長之ヲ監督シ第二次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ  
 第三次ニ於テ内務大臣之ヲ監督スルニ依リテ自治ノ進歩ヲ促スルニ在リ  
 以上ノ制度ニ遵據シテ町及村ナル自治躰ヲナス所ヲ府縣別ニヨリ舉グレバ其數左  
 ノ如シ(但モシ驛ト云フハ宿ナシト云フ)

東京府	町	九	京都府	町	一五
大阪府	村	七六	京都府	村	二六四
兵庫縣	町	二六	神奈川縣	宿驛	二二
兵庫縣	村	四〇二	神奈川縣	村	二九一
新潟縣	町	四八	長崎縣	町	一八〇
新潟縣	村	七六九	長崎縣	村	一八〇
千葉縣	町	四八	埼玉縣	町	四〇
千葉縣	村	三〇	埼玉縣	村	三六九
群馬縣	町	三六	茨城縣	町	四〇
群馬縣	村	一七〇	茨城縣	村	三三六
群馬縣	宿驛	一	栃木縣	町	二六
群馬縣	村	一七〇	栃木縣	村	一四六

奈良縣	町	一四六	三重縣	町	一八
奈良縣	村	二七	三重縣	村	三三七
愛知縣	町	六三〇	静岡縣	町	三〇五
愛知縣	村	二四	静岡縣	村	三〇五
山梨縣	村	二四五	滋賀縣	町	一八九
山梨縣	村	二九	滋賀縣	村	一八九
岐阜縣	町	九三三	長野縣	町	一六
岐阜縣	村	二〇	長野縣	村	三七六
宮城縣	町	一七八	福島縣	町	三九二
宮城縣	村	二二	福島縣	村	三九二
巖手縣	町	二二	山形縣	町	二二〇
巖手縣	村	一四	山形縣	村	二二〇
秋田縣	町	二二三	福井縣	町	一六八
秋田縣	村	一五	福井縣	村	一六八
石川縣	町	二二四	富山縣	町	三三八
石川縣	村	二四	富山縣	村	三三八
鳥取縣	町	二二三	島根縣	町	二六八
鳥取縣	村	四	島根縣	村	二六八

岡山縣	町	三	廣島縣	町	一四
山口縣	村	四五二	和歌山縣	村	四五〇
山口縣	町	四	和歌山縣	町	二
山口縣	村	三四	和歌山縣	村	二九
香川縣	町	五	愛媛縣	町	一二
香川縣	村	一七六	愛媛縣	村	二八三
高知縣	町	二	福岡縣	町	二〇
高知縣	村	一九四	福岡縣	村	三六五
大分縣	町	一四	佐賀縣	町	五
大分縣	村	二六七	佐賀縣	村	一三〇
熊本縣	町	二六	宮崎縣	町	五
熊本縣	村	三五三	宮崎縣	村	九五
鹿兒島縣	村	一一五	計	町	七〇〇
			計	村	一一、四八三

第二十六章 郡及府縣

郡トハ自治ノ疆土ナル數町村ノ結合體ナリ若ハ郡ヲ以テ自治體トシテ之ヲ謂ハバ我邦自治區ノ第二階級ナリ然レモ現今ノ所謂郡ハ其區域ノ廣大或ハ狭小ナルガ爲メ直ニ郡ヲ以テ行政區畫トナスニ適セズ故ニ茲ニ郡ト稱スルハ行政區畫ノ郡ヲ指スモノナリ

郡ハ其思想ヲ發露スル爲メニ代議機關ナル郡會アリ其組織ハ郡内町村ニ於テ撰舉シタル議員及大地主(郡内ニ於テ地價一萬ニ於テ撰舉シタル議員ヲ以テ組織ス其員數ハ每町村一名トシ二十名ヲ制限トス)大地主ハ町村ニ於テ撰舉スベキ議員定數ノ三分ノ一ヲ互撰ス若シ大地主ニシテ其員數町村ニ於テ撰舉スベキ議員定數ノ三分ノ一以下ナルハ大地主ハ撰舉ニヨラズシテ郡會議員タルモノトス郡會議員ハ被撰權ハ郡内町村公民ニシテ町村會ノ撰舉ニ參與スルヲ得ベキ者及大地主中自ら撰舉ニ加ハルヲ得ベキ者ハ總テ之ヲ有ス郡會議員被撰權ノ有無及撰舉ノ効力ハ郡參事會之ヲ裁決ス郡會ハ郡長ヲ以テ議長トシ其議決スベキ事件ハ左ノ諸項トス

(一) 郡ノ歲入出豫算ヲ定ムル事 (二) 決算報告ヲ認定スル事 (三) 郡有不動産ノ賣買交換讓渡讓受並ニ質入書入ノ事 (四) 歲入出豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除ク外新ニ義務ノ負擔ヲナシ及權利ノ棄却ヲナス事 (五) 郡有財産ノ管理及營造物ノ維持方法ヲ定ムル事 其

他法律命令ニ依リ郡會ノ權限ニ屬スル事項ヲ議決ス郡會ハ官廳ノ諮問ニ對シ意見ヲ述ベ郡ノ全部又ハ一部ノ公益ニ關スル事件ニ付郡長又ハ府縣知事へ建議スルヲ得

郡長若クハ特ニ郡長ノ委任ヲ受ケタル郡吏員ハ郡會ノ議事ニ參與スルヲ得但議決ニ加ハルヲ得ズ

郡ハ行政機關ニハ郡參事會アリ其組織ハ郡會ニ於テ議員中ヨリ互撰シタルモノ三名府縣知事ニ於テ郡會議員若クハ郡内町村ノ公民中ヨリ撰任シタルモノ一名ヲ以テ成ル而シテ其議長ヲ郡長トシ職務權限ハ(一)郡會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ臨時急施ヲ要シ郡長ニ於テ郡會ヲ召集スルノ暇ナシト認ルトキ郡會ニ代テ議決ヲナス事(三)郡會ノ定メタル方法ノ範圍内ニ於テ郡有財産ノ管理又ハ營造物ノ維持ニ關シ必要ナル事件ニ付議決ヲ爲ス事(四)郡ノ費用ヲ以テ支辨スル工事ノ次第順序其他必要ナル事件ニ付議決ヲ爲ス事(五)郡長其他官廳ノ諮問ニ對シ意見ヲ述フル事(六)郡長ヨリ發スル郡會議案ニ付郡長ニ意見ヲ述ベ及會議ニ報告スル事(七)臨時必要ナル郡ノ出納ヲ檢査スルヲ其他法律命令ニ依リ郡參事會ノ權限ニ屬スル事務ヲ處理ス郡長ハ郡會及郡會參事會ノ議決ヲ施行シ及郡有ノ財産及營造物ヲ管理シ并ニ郡ノ

費用ヲ以テ支辨スル工事ヲ執行ス郡ニ於テ他人ニ對シ義務ヲ負擔スベキ證書及委任狀ニハ郡長ノ外名譽職參事會員二名以上之ニ署名捺印スベシ郡ニハ府縣稅ヲ以テ支辨スル吏員ノ外必要ナル郡吏員及委員ヲ置クヲ得

郡有財産及營造物管理ノ費用郡會郡參事會及委員ノ費用其他特ニ郡ノ負擔ト定ムル事件ノ費用ハ其郡ノ支辨トス又郡ノ支出ニ充ツル費用ハ郡有財産ヨリ生ズル收入其他雜收入ヲ以テ充ツルモノ、外ハ郡内各町村ニ分賦シ町村稅トシテ徵收シ郡金庫ニ納ム。郡ハ或ル場合ニ於テハ一定ノ方法ニヨリ郡債ヲ起スヲ得

郡ノ行政監督ハ第一次ニ於テ府縣知事之ヲ監督シ第二次ニ於テ内務大臣之ヲ監督ス

### 府縣

府及縣ハ我邦行政區畫ノ最大ナルモノニシテ郡及市ノ結合體ナリ

府縣ハ思想ヲ發露スル機關ヲ府縣會トシ其議員ハ選舉ハ市ニ在テハ市會及市參事會郡ニ在テハ郡會及郡參事會同シ府縣内市町村ノ公民中選舉權ヲ有シ其府縣ニ於テ一年以來直接國稅十圓以上ヲ納ムル者ノ中ヨリ撰舉ス其任期ハ四年ニシテ名譽職トス而シテ府縣會ノ議決スベキ事件諸項ハ左ノ如シ

(一) 府縣ノ歲入出豫算ヲ定ムルヲ(二) 決算報告ヲ認定スルヲ(三) 府縣稅ノ賦課徵收方法ヲ定ムルヲ(四) 府縣有不動産ノ賣買交換讓渡讓受并ニ質入書入ノヲ(五) 歲入豫算ヲ以テ定ムルモノヲ除ク外新ニ義務ノ負擔ヲ爲シ及權利ノ棄却ヲ爲スヲ(六) 府縣有財産ノ管理及營造物ノ維持方法ヲ定ムルヲ其他法律命令ニ依リ府縣會ノ權限ニ屬スル事項ヲ議決ス

府縣會ハ官廳ノ諮問ニ對シ意見ヲ述ベ及其府縣内ノ全部又ハ一部ノ公益ニ關スル事件ニ付府縣知事又ハ内務大臣ニ建議スルヲ得府縣會ノ開議ハ每年秋期一回三十日以内ニシテ臨時會ハ七日以内トス三府ノ府會ハ特ニ市部會郡部會ニ分別セラレタリ

府縣ニハ行政機關トシテ府縣參事會アリ其組織ハ府ニ在テハ名譽參事會員八名トシ内郡部議員中ヨリ四名市部議員中ヨリ四名ヲ互選シ縣ニ在テハ縣會ニ於テ其議員中ヨリ互撰シタルモノ四名トシ及府縣知事府縣廳ニ奉職シ高等官中内務大臣ノ任命ニ係ルモノ二名ヲ以テ成ル其名譽參事會員ノ任期ハ議員ノ任期ニ同シ而シテ府縣參事會員ハ職務權限左ノ如シ

(一) 府縣會ノ權限ニ屬スル事件ニシテ其委任ヲ受ケタルモノヲ議決スルヲ(二) 府縣會

ノ權限ニ屬スル事件ニシテ臨時急施ヲ要シ府縣知事ニ於テ府縣會ヲ招集スルノ暇  
ナシト認ムルトキ府縣會ニ代テ議決ヲ爲ス(三)府縣會ノ定メタル方法ノ範圍内ニ  
於テ府縣有財産ノ管理又ハ營造物ノ維持ニ關シ必要ナル事件ニ付議決ヲナス(四)  
府縣ノ費用ヲ以テ支辨スル工事ノ次第須序其他必要ナル事件ニ付議決ヲ爲ス事(五)  
府縣知事及其他官廳ノ諮問ニ對シ意見ヲ述フル事(六)府縣知事ヨリ發スル府縣會議  
案ニ付府縣知事ニ意見ヲ述べ及會議ニ報告スル(七)臨時必要ナルトキ府縣ノ出納  
ヲ檢査スル事其他法律命令ニヨリ府縣參事會ノ權限ニ屬スル事務ヲ處理ス  
府縣知事ハ府縣會及府縣參事會ノ議決ヲ執行シ及府縣有財産及營造物ヲ管理シ並  
ニ府縣ノ費用ヲ以テ支辨スル工事ヲ執行ス府縣ニ於テ他人ニ對シ義務ヲ負擔スベ  
キ證書及委任狀ニハ知事ノ外名譽職參事會員二名以上之ニ署名捺印スベシ府縣知  
事ハ急速ノ場合ニ臨ミテハ府縣參事會ノ權限ニ屬スル事件ヲ專決處分スルヲ得  
又府縣會ノ議決ヲ經テ有給ノ府縣吏員及名譽職委員ヲ置クヲ得  
府縣有財産及營造物管理ノ費用府縣會府縣參事會及委員ノ費用府縣吏員ノ給料退  
隱料其他諸給與及從來法律命令若ハ慣例ニ依リ並ニ將來法律勅令ニ依リ府縣ノ負  
擔ト定ムル事件ノ費用ハ府縣ニ於テ之ヲ支辨セザルベカラズ此ノ支出ニ充ツルニ

ハ府縣稅其他府縣收入アリ又或場合ニ於テハ府縣知事ハ家屋稅ヲ課スルヲ得府縣  
ハ或場合ニ於テハ勅令ノ定ムル所ニ依リ府縣會ノ議決ヲ以テ府縣債ヲ起スルヲ得  
府縣ノ行政ハ內務大臣之ヲ監督ス府縣ノ行政ニ關スル事件ハ內務大臣ニ訴願スル  
ヲ得又府縣知事ノ處分又ハ府縣參事會ノ裁決ニ不服アルキハ行政裁判所ニ出訴ス  
ルヲ得

### 第五編

### 交通運輸

### 第二十七章

### 交通及其來歴

凡ク國家ハ發達ヲ促進スルニハ交通運輸ノ便ヲ得ルヨリ先ナルハナシ交通運輸ニ  
シテ不便ナランカ假令其開國古シト雖モ文化ニ赴クモノ鮮シ蓋交通ヲ希フハ人  
類自然ノ情性ナルガ故人類ハ常ニ交通運輸ノ便ヲ覓メテ止マズ必ズ之ニ依テ其  
便ヲ達シ企望ヲ充サント務メザルハナシ抑モ交通ヲ拓キ運輸ヲ便ニスルトハ可成  
的天然ノ障害ヲ除去シテ距離ヲ短縮スルハ謂ニシテ山岳森林叢莽等皆ナ是レ天然  
ノ障害ナリ而シテ人智ハ此障害ヲ容易ニ除去センコトニ向テ運用セラレタリ故ニ智  
慮ニ乏シキ時代ニアリテハ斯ノ如キ天然ノ抵抗ニ打勝ツコト能ハズ却テ之ヲ避ケテ  
必ズ先ヅ河道ノ便ニヨルベキハ世界ノ文明ガ經過シタル同一ノ順路ナリトス  
上古開化シタル有名ナル四箇所ニ就テ其文明ノ起端ハ如何ナル場所ニ於テセハヤ

ヲ察スレバ前理ハ争フヘカヲザルヲ知ルベシ、黄河楊子江ノ巨流ニヨリテ支那ノ開明ヲ見ルベクいんだすがんじすノ兩河ニハ印度ノ開化アリたいぐりすゆふれちす兩流ニ沿フテかるぢや及ぶつじろをびろにやノ開化アリ又ないる河ニヨルモノハ即埃及ノ開化ナリニアラズヤ何トナレバ河道ノ四近ハ地肥沃ニシテ天然ノ障害最モ少ナク自然ハ常ニ此一血路ヲ開キ交通ヲシテ之ニ依ルベキヲ示セリ是ヲ以テ交通運輸ト開明文化トハ常ニ伴隨シテ須臾ヲ離ルベカラズ未ダ交通不便ニシテ其國ノ開明ニ赴キシモノハ見ズ未ダ其國開明ニシテ交通ノ不便ナルモノハ聞カズ必ズヤ國ノ文野ハ交通ノ便否ニヨリテトセラルベキモノナリ故ニ道路ノ整頓延長鐵道哩數電信線ノ架敷電話ノ延長郵便線路及海上交通ヲ資クベキ便利等ハ皆是レ其國開明ヲ促進スルノ一原因トシテ數フベキモノナリ然レモ今ハ既ニ開明ノ上流ニ位シ鐵路千里數時ニシテ至ルベク電線萬里瞬間ニシテ消息ヲ通スルコトヲ得ルガ如キ國ニアリテモ其開國ノ初ニ當テハ一度ハ甚シキ交通困難ハ時代ヲ經過シタルコトヲ回想セザルベカラズ荆棘足ヲ容ルベカラザル森林泥濘既ヲ没スルノ沼澤ハ是レ天然ノ常態ニシテ今尙山岳溪谷ノ間ニ散見スル往古ヨリ人馬ノ踏分ケ踏堅メタル足跡ハ是道路ノ濫觴ニシテ泥濘深キ所ニ礫ヲ混シ草ヲ

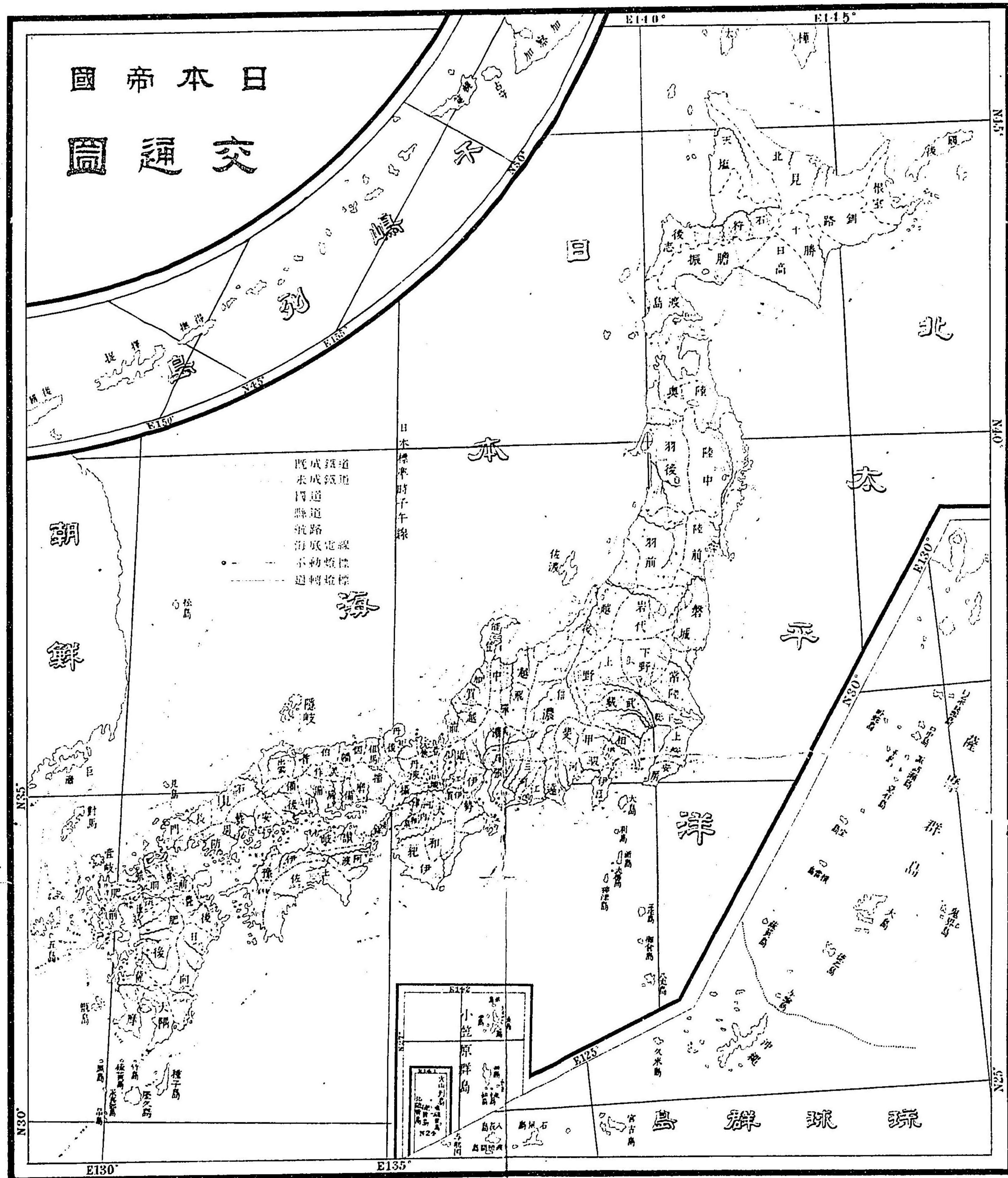
敷キ以テ人馬ノ其中ニ埋没スルヲ防ケリ此外ニハ絶テ築道アルヲナカリシ英國ニ於テモ現ニくろんうねるノ兵士ガ敵ノ泥中ニ埋メラレタル軍馬八百ヲ生擒セリト傳ヘリ

斯ノ如キ不完全ナル道路ハ何地モ經歷シタル事ニテ英國ニテ第十八世紀以前ニアリテハ古世界ニ於テ築道ニ名高キ羅馬人來テ面目ヲ一新セシノミニテ其後ハ道路築造ノ業再タヒ衰ヘテ壞崩ニ委シタリ第十八世紀ノ中頃マカドモ氏 John Macadam 出ルニ及ビテ其技巧ノ資ヲ以テ初テ花崗石石灰石ノ如キ硬性石ノ碎片ヲ道路ニ敷テ行人通馬ヲシテ之ヲ踏ミ堅メ自然ニ固結平滑ナラシムベキヲ創意シ世ニ所謂 Macadam Road 築造法起リ初テ堅牢砥ノ如キ道路ニヨリテ通行スルノ澤ヲ蒙ムルヲ得ルニ至レリ

### 日本交通來歴

日本ニ於テ道路ニマカドモ築造法ヲ採用セシハ僅々十數年以前ニシテ今ハ車輪音靜ニ堅牢ニシテ砥ノ如キ國道ト雖モ其以前ニハ泥濘既ヲ埋メ濼水道ヲ遮ルヲ往々ニシテ之レアリシコトハ世人ノ今尙ホ記憶ニ存スル所ナラン尙遡テ其古ヲ探クレバ其不便知ルベキノミ。爰ニ日本現今交通ノ發達ヲ叙スルニ先チ聊カ古昔交通ノ





状態ヲ記シテ其一班ヲ示サントス  
 今日本ヲシテ道路全ク無キモノト想像セハ其情况如何必ズ世界ガ其初遭遇シタル  
 ト同一ノ困難ヲ嘗メザルベカラズ即我國政治區畫ノ發達スルニ當リ大帝ガ荆棘ヲ  
 披キ軍兵ヲ通過セシメラレシ困難ハ略ホ之ヲ叙セルガ如シ然ルニ今現ニ開國ノ當  
 初ヲ觀ルベキモノハ北海道ニアリ其殖民地撰定報文ヲ讀ムニ云ヘルコトアリ曰北海  
 道内部原野ハ樹木叢生荆棘繁茂又ハ沼泥地低濕地等ニ行クニ路ナク宿スルニ家  
 ナシ此間ヲ調査センニハ先ヅ糧食ヲ負ヒ刀鋸ヲ携ヘ舊土人ヲ嚮導トシ荆棘ヲ披テ蹊  
 ヲ通シ天幕ヲ張テ雨露ヲ凌ギ或ハ刳木舟ヲ造テ河川ニ迦ル等其困難名狀スベカラ  
 ズ殊ニ草木叢生シテ人頭ヲ没シ咫尺ヲ辨ズルコト能ハザルハ喬木ニ攀チ峻巖ニ  
 上リ漸ク原野ノ大勢ヲ一瞥シテ之レガ方向ヲ定ムル等危險ヲ冒ス亦少シトセス而  
 シテ測量ニ着手スルニ方テハ先ヅ巨木ヲ倒シ榛莽ヲ刈リ初テ測器ヲ使用シ土地ノ遠  
 近高低ヲ測ラザルベカラズ是ヲ以テ多クノ時日ヲ要シ尙ホ精細ノ調査ヲ遂グル能  
 ハズ石狩國上川郡原野ノ調査ノ如キハ殆ンド半ケ年ヲ費セリ蓋シ當時荆棘地ニ滿  
 チ道路未ダ通ゼズ其札幌ヲ發スルヤ刳木舟ニ頼テ石狩川ヲ遡リ神居古潭ヨリ舟ヲ  
 捨テ徒行シ九日ヲ經テ漸ク上川ニ達スルヲ得タリ云々

余輩ハ右ノ報文ヲ讀ミ未拓地交通ノ不便ヲ感セズンバアラズ報文ニ云フ九日ヲ費  
シテ漸クニ達シタル札幌上川間道路開通シタル今日ニアリテハ僅ニ一日ニシテ達  
スル難キニアラザルナリ而シテ上川原野ノ調査半年ヲ費シテ尙ホ其精ヲ盡スコ  
ト能ハズト土地開ケタル今日ヨリ之ヲ見レバ人ヲシテ怪マレムト雖モ未開地調査  
ノ至難ナル斯クアルベキコトハ余ノ信シテ疑ハザル所ナリ  
我邦太古交通ノ状態ハ道ナキ荆棘ヲ披テ通ゼンコト北海道ニ異ナラザリシ其後ト  
雖トモ行通ノ艱難ハ甚シク彼ノ本邦第一ノ街道タル東○海○道○ス○ラ○モ往來ノ難甚シカ  
リシト想像スルニ堪ヘタリ東海道ヲ通行スルモノハ山岳ヲ攀テ沼水ヲ涉リ日暮レ  
ハ山野ニ露宿シ稍方アルモノハ到ル處草廬ヲ結テ臥シ病發スレバ其廬中ニ休養シ  
數多ノ月日ヲ費シ漸ク京ヨリ關東ニ出ルコトヲ得タリ菅原常陸介ガ京ニ上ル時治  
安元年九月三日任地ヲ發シ東海道ヲ經テ山野ニ露宿シ十二月二日ヲ以テ着京セリ  
ト降テ源政府ニ至リ覇府ヲ鎌倉ニ開クニ及ビ日本ノ中心ハ忽チ鎌倉ニ移リ交通モ  
亦一變シ京都ト鎌倉トノ間ハ交通繁キヲ以テ道路モ大ニ整頓シ他ノ諸國トノ間モ  
道路稍開ケタリ是ニ於テ公報通信ニハ初テ飛脚ヲ用井又新ニ宿驛等ヲモ設ケタリ  
其後戰亂相踵ギ世ハ武備一邊ニ傾キ亦交通等ニ意ヲ留ムル者アラザリシヲ以テ道

路崩壞荒蕪シ白晝モ盜賊横行シテ旅客ヲ劫スヲ以テ行人絶テ路上人影ヲ見ル稀ナルニ至レリ・殊ニ應仁ノ兵亂後ハ自ラ十數日ノ糧食ヲ用意セザレバ東海道ヲモ旅行スルヲ能ハザリント云フ建武中興ノ後諸國往還ノ行程ヲ制シ近國ハ十日中國二十日遠國ハ五十日ト定メラレタリ織田氏政權ヲ掌握スルニ至リ主トシテ交通ノ便益ヲ計リ使者ヲ四方ニ遣ハレテ荒蕪セル道路ヲ開キ或ハ之ヲ廣メ埃ヲ三十六町毎ニ築カンメ又舟楫ヲ作ラシメテ河川ヲ濟ス等大ニ交通ノ便ヲ與ヘタリ

徳川氏政府ヲ江戸ニ置クニ及ビ日本ノ人民政權財力其他萬般ノ事物ヲ愛ニ集メタルヲ以テ江戸ハ其中心トナリ從テ諸侯ノ關西地方ヨリ參勤交代スルモノ多クハ東海道ヲ取リシヲ以テ東海道ハ其要路ニ當リ交通頻繁ヲ極メ道路モ大ニ面目ヲ改メタリ又大坂定番諸士東海道各驛長ト相謀リ毎月三回ヲ期シ日數八日ヲ限リテ東海道ニ定期往復ヲ始メタリ慶安ノ頃ニ至リ始テ三都ノ商人連合シテ三都往復信書ヲ送達スル飛脚屋ヲ創メタリ續テ大坂江戸間ノ金錢遞送ノヲモ始メタリ然レモ兩京ノ間尙ホ七日前後ヲ費セリ又江戸ニ勤番スル諸藩士ノ通信ニハ各藩ニ飛脚番ナルモノヲ置キ凡ソ毎月二回之ニ托シテ信書及物品ヲ送達スルヲナリシ然レモ九州地方ノ如キハ信書ノ江戸ヨリ達スルハ概テ二十五日乃至三十日ヲ要スルヲ以テ一事

ノ贈答ニ凡ソ七十日間ヲ費シタリ又諸侯ノ公用ニ關シ事ノ急速ヲ要スル時ハ今ノ電報ニ代用スルニハ大早飛脚ト稱スルモノアリテ晝夜兼行ノ駕籠ニテ走ルヲナリシ然レモ九州ニ達スルニハ十七日乃至二十日ヲ費セシヲ以テ此便ニヨルモ往復尙ホ四十日前後ヲ要セリ以上ハ本邦第一ノ街道タル東海道交通ノ狀況ニシテ其他九州街道東山道ノ如キハ尙數層ノ不便ナリシ殊ニ險路ノ名アル木曾街道吉蘇或ハ岐蘇ニ作ルノ如キハ行通ノ困難ナル最モ甚シカリント云フ

抑岐蘇山道ノ始メテ開通セシハ文武帝大寶二年十二月ノコトニシテ始テ諏訪ヨリ美濃ニ出ルコトヲ得ルニ至レリ然レモ固ヨリ木曾河道ニ沿フテ只踏ミ分ケタルマテニテ大同年間僧最澄(傳教)衆生化道ト稱シテ東國ニ下リシ道ヲ信濃ニ取リ此山道ヲ通行セシ時マデハ旅店稀ニシテ行人ノ宿泊スベキ所ナキヲ以テ僧之ヲ歎シ廣濟及廣極ト稱スルニ院ヲ建テ、行人ノ休泊所ニ供セリト延喜年間始テ驛制ヲ定メラル、ニ至リ多少ノ宿驛ヲ見ルヲナリシ源義仲此地ヨリ勃興シテ都ニ出ルニ及ビテ道路モ幾分カ修理セリ其後通行ノ繁昌ハ殆ンド南部ノ濱海地ニ限り岐蘇ハ中仙道ニ當リテ本邦ノ官道ナレモ棧道峽路白雲深フシテおそろしや木曾のかけ路の丸木橋ふみ見る度に落ぬべき哉杯ト謂フガ如ク一大險路ニシテ今日ニ至ルマデ尙ホ

然ルヲ見ル  
 明治維新ノ後交通運輸ノ便ハ國家發達ノ一要素ナルコトヲ認メ彼ノ封建時代各諸侯ガ各一方ニ割據シテ故ラニ交通ヲ梗塞シ要害ト負ミ天險ト稱シテ策ノ得タルモノトナシタル所ノ宿弊ヲ除キ各府縣競フテ道路ノ改良ニ從事シ殊ニまかだむ築造法ニテ硬石ノ碎片ヲ敷キ重大ノ石軌ヲ輾用シタルバ忽チニ堅牢ノ道路ト化シ亦昔日ノ觀ヲ留メザルニ至レリ  
 交通改良ノ進步ハ駭々トシテ駐マラズ僅々十數年ノ今日ニ及ビテハ悉ク歐米ノ事物ヲ利用シ道路モ國道縣道ニ別チ主要ノ部ニハ既ニ鐵道ヲ敷設シ其幹線ハ將ニ本邦ヲ貫通セントシ支線モ亦各地ニ延長セリ水運ニハ汽船帆船少カラズ信書送達ニハ郵便ノ制ヲ設ケ音信速達ニハ電信線アリテ各所ニ延長シ電話サヘ所々ニ架設セラレタリ又物品送達ニハ通運會社及陸運海運ノ法アリ其他早達便物品配達傳便取扱馬車送達等ハ各地ニ行ハレ殆ンド交通運輸ノ便ヲ極メントスルニ至レリ以下章ヲ逐フテ其各種ニ現今ノ發達ヲ記スベシ

### 第二十八章

### 道路及車

道路ハ交通ノ必ズ由ルベキ線路ニシテ苟モ交通アレバ必ズ道路ナカルベカラズ故ニ道路ハ甲所ト乙所トハ距離ヲ聯絡スル線ニシテ交通上距離ノ遠近ハ道路ノ長短ヲ以テ測ルハ之ヲ里法ト云フ其測法ハ尺度ノ制ニヨレリ我邦古來尺度ノ制ニ屢變更アリシト雖モ維新前マデハ曲尺六尺三寸ヲ以テ一間トシ六十間ヲ一町トシ三十六町ヲ一里トスルモノヲ普通トシ間々五十町或ハ七十町ヲ以テ一里ト定メ所アリシ維新ノ後即明治六年ヲ以テ里法ヲ改メ曲尺六尺ヲ以テ一間トシ六十間ヲ一町トシ三十六町ヲ一里ト定メラレタリ故ニ一里ハ英里ノ二哩四四ニ當リ佛里ノ三哩九三六ニ當ル而シテ其起算ハ東京日本橋ヲ以テ本邦各街道一般ノ里程起點トシ各府縣ニハ各其廳下ニ元標ヲ定メ之ヲ以テ起點トセリ  
 現今道路ノ制ハ大別シテ國道縣道及里道ノ三階級トス國道トハ本邦道路ノ大幹線ニシテ東京ヨリ各開港場ニ達スルモノ及東京ヨリ道府縣廳并ニ伊勢太廟ニ達スルモノ或ハ各府縣各師團ヲ均聯スルモノヲ云フ縣道ハ各府縣ヲ接續シ各師團ヨリ各旅團ニ達スルモノ及各府縣本廳ヨリ其支廳タル官署ニ達スルモノ又著名ノ區ヨリ

都府ニ達シ或ハ其ノ區ニ往還スベキ便宜ノ開港場ニ達スルヲ云フ里道ハ彼是ノ數區ヲ貫通シ或ハ甲區ヨリ乙區ニ達スルモノ及用水堤防牧畜鑛山製造等ノ爲メ該區人民ノ協議ニ依リ特ニ設ケタルモノ又ハ神社佛閣及田畑耕耘ノ爲メニ設クルモノヲ云フ

車

車ハ道路トハ親密ノ關係ヲ有スルモノニシテ道路ヲ利用スベキ順序上第一ニ列スルモノナリ而モ其製簡易ニシテ交通運輸ヲ補助スルニハ實ニ強ノ利器タルナリ故ニ世界ノ各部ニ於テ車ハ最早ク發明セラレ其駕乘ニ於テ其運送ニ於テ其軍用ニ於テ今日ノ文化ヲ補ヒシモノ尠カラズ支那埃及亞西利亞希臘羅馬人等ガ用ヒシ軍用車荷車乗用車等ノアリシヲ以テ其古代ニ發明セラレシヲ知ルベシ日本ニテモ古ヨリ車ノ用アリシ車ハ其初地車(地車トハ大木ノ幹ヲ横斷シテ起リ其後種々ノ製法起リシモ中古ノ頃ヨリ公侯貴紳ノ乗用ニハ牛車アリ運搬ニハ大八大七車アリ)徳川氏ニ至リ凡ソ軍ハ京都江戸駿府ニ限リ其餘ハ軍用ノ外ハ悉ク之ヲ用ルヲ禁シタルヲ以テ大ニ交通運輸ノ上ニ影響ヲ與ヘタリ明治維新ノ後悉ク此禁ヲ解キタルヲ以テ其勢ハ例ヘバ春草ノ春雨ニ逢フテ生ヒ茂ルガ如ク馬車牛車人力車自轉車

荷車等一時ニ競ヒ起リ交通運輸ヲ助ケシモノ尠カラズ特ニ人力車ハ本邦ノ特製ニシテ明治三年東京人高山幸助和泉要助等ノ發明ニ係リ其輕便ナルガ爲メニ所用忽チ廣マリ明治初年ヨリ凡二十年間ハ腕車交通時代ニ稱スベキ有様ニテ都鄙ノ別ナク凡ソ車ノ通ズベキ道路アレバ之ヲ見ザル地ナキニ至レリ蓋シ本邦ノ文化ヲシテ急速ノ進歩ヲナセシモノハ其原因固ヨリ一ニシテ足ラズト雖モ亦及人力車ハ力與テ多シト謂ハザルベカラズ

今日日本ノ諸車ノ發達ヲ見ルニ明治八年度ニ於テ全國ニ有スル諸車ノ總數ハ二十三萬千六百七十二輛(自轉車ヲ除キ以下同)ナリシガ其後十三年ヲ經タル明治二十一年度ニハ全國ノ諸車總數ハ既ニ八十四萬千四百二十一輛ノ多ニ登レリ即チ三倍以上ニ増加セリ故ニ毎年四萬六千九百輛ヲ増加シタルノ割合ナリ尙ホ明治八年ニハ日本ノ人口百四十七人毎ニ壹輛ノ車ヲ有スル割合ナリシガ同二十二年ニハ人口四十七人毎ニ壹輛ノ車ヲ有スルニ至レリ

各種ノ車ニ就テ之ヲ見レバ明治八年ニ於テハ乗用馬車數ハ全國ニ百二十九輛ナリシガ明治二十一年ニ至テハ二千六百六十一輛ニ達セリ即チ十六倍ノ増加ナリト是レ全ク馬車ヲ通スベキ道路ノ開達セルニヨル人力車ハ八年ニハ十一萬三千九百二

十一輛ナリシガ二十一年ニハ十七萬千五百八十九輛ニ増加セリ荷、積諸車モ増加ノ  
 速ナルモノニシテ八年ニハ二十三萬千六百七十二輛ナリシガ二十一年ニハ六十六  
 萬七千六百七十一輛ニ達シ即チ二倍八分ノ増加ナリ  
 今各府縣ニ於ケル諸車ノ配賦ヲ觀レバ交通上有益ナル事實ヲ發見スベシ即チ諸車  
 ハ數多キ處ハ交通開ケ且ツ他ノ事物モ發達セル處ニシテ其少キ處ハ概シテ之ニ反  
 スル所ナルベシ全國ノ中車數ノ最多キハ東京ニシテ厘ニ人口ノ十人、五毎ニ一輛ヲ  
 有シ次ニ大坂ハ十五人毎ニ一輛ニシテ愛知モ二十七人毎ニ一輛ヲ有スル割合ナリ  
 其他人口ニ比シテ車數ノ多キ處ハ概シテ發達ノ地ナリ之ニ反シテ其地偏僻ニシテ平  
 原ニアラザル地ハ車數ハ皆乏シ即チ鹿島ハ五百七人毎ニ一輛ニシテ巖手ハ殆ド四  
 百人ニ一輛宮崎ハ三百六十六人ニ一輛高知ハ三百十二人ニ一輛島根モ二百八十人  
 ニ一輛ノ割合ナリ其他北陸諸國及東北地方ハ冬期雪深フシテ概シテ一年ノ三分一  
 ハ諸車ヲ通ズル能ハズ故ニ車ハ概シテ少シ山陰諸國ハ山陵多キヲ以テ車數多カラズ  
 車ハ平原地ニ行ハルハ器械ナルヲ以テ平原ハ即チ車ノ輻湊スル地ナリ關東平原畿  
 内平原濃尾平原ノ如キ車ノ輻湊夥シキヲ知ルベシ九州四國ノ如キハ概シテ車數ノ  
 少キ處ナルモ讃岐ノ平原ニハ四十八人ニ一輛ノ平均ヲ以テ集リ筑紫平原ニハ五十人

ニ二輛ノ平均ヲ以テ集マレリ

### 第二十九章

#### 鐵道

鐵道ハ陸上交通ニ於テ主要ハ物ニシテ人間社會ノ動脈トモ稱スベク其本務ハ人民ヲ密接シ其交際ヲ頻繁ナラシメ航海電信郵便等ノ事業ト相併行シ以テ人民相互ハ結合ヲ補助スルモノナリ抑世界ノ交通ハ世運ノ進歩ト共ニ進化スルモノニシテ最初ハ陸地ノ小部分ニ行ハル駱駝或ハ牛馬行程ノ範圍内ニ止マリ陸上交通ニ次ニ内海及陸地ノ交通ト移リ漸ク進シテ海洋交通トナリ尙ホ進テ現ニ其端ヲ開キツ、アルガ如ク再々陸上蒸氣交通トナルベシ鐵道ハ即チ陸上蒸氣交通ノ利器ニシテ其濶篤ハ英國北部ノ石炭坑ニ車運ノ爲メニ用ヒレニ起リ千八百一十年始テ九哩間公道ニ軌條ヲ敷ケリ然レモ電車ヲ實用ニ供スルニ至リハ千八百二十五年ノ秋まんとすたーヨリりばーぶーニ至ルマテ三十哩九五ノ運轉ヲ始トス千八百六十五年ノ頃ヨリ西歐羅巴諸國ハ大ニ鐵道ノ便ヲ利用シタルヲ以テ其發達迅速ニシテ社會經濟的狀態殆ト愛ニ一變セントセリ

鐵道ハ交通運輸ノ上ニ於テ船舶ニ比スレバ運搬ノ迅速ナルト運賃ノ比較上低廉ナルヲ以テ幾ト距離ヲ消滅シ去ルニ至レリ例ヘバ國中某地ニ於テ一貨物ニ餘裕アレバ鐵道ハ忽チ之ヲ遠地ニ送致スベク之ニ反シテ或ル貨物ノ欠乏シテ需用ノ供給ニ超過スルコトアレバ遠路ノ商品ハ直ニ來リテ其市場ニ充滿スルニ至ルベシ我邦ノ如キ幅狹キ地形ノ國ニ於テスラ往昔濱海ノ地ニハ魚鱈餘アリテ需用ノ之ト伴ハズサレトモ他ノ地方ニ運搬スルニハ至難ノ障害ヲ越ヘ時日ヲ費ヤサルヲ得ザルヲ以テ空シク棄賣ニシタルコトアリシ之ニ反シテ他ノ内地ニ於テハ終年鮮ナル魚類ハ供給ナク偶之アルモ高價ニシテ購フニ堪ヘザルコトアリ又某品ノ特産地ハ之ヲ收穫スルモ殆ンド勞ヲ償フニ足ラザル程ノ至廉ナレトモ他ノ地方ニハ運搬ノ不便ナルカ爲メ往々之ヲ欠グコトアリシ愛ニ鐵道ハ神速敏捷ノ作用ヲ以テ活動シ各地ニ向テ絶ヘズ需用ト供給トノ平衡ヲ採リ經濟的大主謀力アルヲ以テ鐵道開設ノ後ハ總テ物價ハ生産者ト消費者トノ間ニ平均スルニ至ルベシ然レトモ以上ノ事ヨリモ重要ナルハ鐵道ノ進歩ニヨリテ實行シ得タル大成績ハ主トシテ凶歉饑饉ノ不幸ヲ免レ得シコト是ナリ即チ歐洲大陸ノ如キ鐵道ノ進歩セル所ニアリテハ絶テ饑饉ノ災ヲ見ザルニ至レリ日本ニテモ出羽ノ饑饉ニ九州ハ之ヲ知ラザルガ如キコトハ絶



ヘテ之レナカルベシ其他鐵道ハ當時ニアリテハ平和ノ利器トナルコト斯ノ如シト雖且一事アルニ際スルハ軍隊及兵器ヲ運搬シ又少數ノ兵ヲ活潑縱橫ニ運用シ機ニ應ジ變ニ投スルハ鐵道ノ功ニアリ故ニ鐵道ハ人智ノ發明シ得タル最モ有力ナル文明機械ニシテ國民ノ經濟的生活ニ於テ他日鐵道ヲ用井テ生ズル結果ハ測ルベラスト云フ

是ヲ以テ苟モ文明ヲ以テ稱セラル、各國ハ競テ此利器ヲ採用シ其發端未ダ久シカラズト雖且其進步ハ特ニ著シク今日ニアリテハ其國勢ノ盛衰及國民ノ繁榮資力ノ消長ハ鐵道ノ長短ヲ以テトスルニ至レリ今先ヅ世界鐵道進步ノ狀ヲ叙スレバ千八百三十年ニアリテハ其延長僅ニ三百二十二佛里(九町十間)ニ過ギザリシガ其後各國競フテ之ヲ敷設シタルヲ以テ僅ニ十年後ノ千八百四十年ニ及テハ八千五百九十一佛里ニ達シ尙益延長シ千八百五十年ニハ三萬八千二十二佛里トナリ越テ千八百六十年ニ及テハ十萬六千八百八十六佛里トナリ千八百七十年ニ於テハ二十二萬九百八十佛里トナリ千八百八十年ニ於テハ三十五萬七千三十五佛里トナリ既ニ千八百九十年ニ至テハ世界鐵道ノ延長ハ五十六萬佛里ニ達セリ實ニ赤道環ノ十四倍ニ餘リ地球ト月球トノ平均距離ヨリ長キコト十七萬八千八十五佛里ナリトス而シ

テ之レガ爲メニ費シタル費用モ亦莫大ニシテ其金額ハ凡ソ我三百二十六億五千萬圓ノ巨額ニ達セリト云フ

日本ニテハ明治三年東京横濱ノ間十七哩餘ノ敷設ニ着手シ全五年瀛車ノ運轉ヲ濫觴トシ其後政府ハ特ニ鐵道局ヲ置キ續々新敷設及延長ニ着手シ又民間ニモ私設鐵道會社起リテ敷設ニ從事シ重要ノ所ハ殆ンド之ヲ餘ササルニ至レリ現今鐵道會社ハ官有鐵道局一・私設鐵道會社二十箇所アリ其線路ハ官設ニ屬スルモノ七私設ニ屬スルモノ三十八・總テ四十五線路ニシテ既成線路ノ延長ハ一千四百五十哩（明治七年ニ及ブ）

官設鐵道線路ハ七線ニシテ第一線路ハ東京神戶間三百七十六哩三九ニシテ明治廿二年工事落成シテ其七月開業セリ之ヲ東海道鐵道ト稱シ本邦ノ幹線ナリ第二線路ハ大府武豊（共ニ尾張）間十二哩六八ニシテ明治十九年三月開業セリ第三線路ハ米原（近江）金ヶ崎（越前）間三十一哩〇一ニシテ明治十五年三月開業セリ第四線路ハ大津馬場（近江）間一哩二九ニシテ明治十三年七月開業セリ第五線路ハ大船橋須賀（相模）間十哩〇四ニシテ明治廿二年六月開業セリ第六線路ハ高崎横川（共ニ上野）間十八哩ニシテ明治十八年十月開業セリ第七線路ハ輕井澤（信濃）直江津（越後）間九十二哩一二ハ明治廿一年十二月ニ開業セリ

セリ然レモ横川（上野）輕井澤（信濃）間十五哩ハ所謂確氷嶺ノ難所ニシテ未ダ測定濟線タリ以上官設ノ既成鐵道總テ五百四十一哩五三アリ

日本鐵道會社ハ資本金二千萬圓ヲ以テ第一線路ハ東京青森間五百三十哩所謂東北鐵道ニシテ本邦ノ幹線ナリ第二線路ハ大宮前橋間五十二哩三六鎖第三線路ハ宇都宮日光間二十五哩第四線路ハ品川赤羽間十二哩七十六鎖第五線路ハ岩切鹽竈間四哩二十三鎖敷設ノ目的ヲ以テ明治十四年起リ第一線路ハ明治廿四年九月開業シ第三線路ハ明治廿三年夏開業セリ其他モ續々開通セリ

阪堺鐵道會社ハ大坂灘波ヨリ和泉塚マテ六哩一六間ヲ敷設ノ目的ニテ資本金三十萬圓ヲ以テ明治十七年起リ明治廿一年ニ開業セリ

山陽鐵道會社ハ資本金一千三百萬圓ヲ以テ第一線路ハ神戸ヨリ赤間關マテ三百〇二哩二五間ヲ敷設スルモノニシテ之ヲ山陽鐵道ト稱シ本邦ノ幹線タリ第二線路ハ兵庫和田岬間一哩七八ヲ敷設スル目的ニシテ第一線路ハ明治廿四年九月ニ於テ神戸倉敷（中備）間九十九哩三鎖開業セリ第二線路ハ工事中ナリトス

兩毛鐵道會社ハ明治二十年資本金百二十萬圓ヲ以テ起リ小山（下野）前橋（上野）間五十哩七十四鎖五十七輪ヲ敷設シ既ニ明治廿一年ニ於テ開業セリ

水戸鐵道會社ハ資本金百二十萬圓ヲ以テ明治二十年ニ起リ水戸ヨリ小山マデ四十哩五六間ヲ敷設シ既ニ明治二十二年竣工開業セリ

伊豫鐵道會社ハ松山三津間四哩二三ヲ敷設スルノ目的ヲ以テ資本金四萬圓ヲ以テ明治十九年ニ起リ同廿一年竣工開業セリ

讃岐鐵道會社ハ丸龜琴平間十哩一九ヲ敷設スルノ目的ニテ明治二十一年資本金二十五萬圓ヲ以テ起リ全廿二年竣工開業セリ

大坂鐵道會社ハ第一線路ハ大坂梅田ヨリ大和櫻井マデ第二線路ハ大和北今市ヨリ奈良マデ二線路合シテ三十七哩間敷設ノ目的ヲ以テ明治廿一年資本金百八十萬圓ヲ以テ起リ其半ハ竣工シ半ハ工事中ニ係ル

關西鐵道會社ハ第一線路ハ四日市ヨリ神津(近江)マデ第二線路ハ河原田ヨリ津マデ第三線路ハ四日市ヨリ桑名マデ合シテ七十六哩間ヲ敷設スルノ目的ニテ明治二十一年資本金三百萬圓ヲ以テ起リ第一線路ハ既ニ竣工シ其他ハ工事中及測定濟線ナリ

甲武鐵道會社ハ第一線路ハ東京新宿ヨリ八王子マデ二十二哩九六及ヒ第二線路ハ新宿ヨリ三崎町マデ三哩七五ヲ敷設スルモノニシテ資本金第一線路ハ九十萬圓第二線路ハ三十四萬圓ヲ以テ明治二十一年ニ起リ第一線路ハ既ニ明治廿二年ニ竣工

開業セリ

九州鐵道會社ハ資本金一千一百萬圓ヲ以テ明治二十一年ニ起リ第一線路ハ門司(前)ヨリ三角(後肥)マデ即チ本邦ノ幹線タルベキモノ及第二線路ハ田代(肥前)ヨリ長崎マデ第三線路ハ有田ヨリ佐世保(共肥)マデ第四線路ハ宇土ヨリ八代(共肥)マデ第五線路ハ小倉ヨリ行事(共肥)マデ合シテ二百七十一哩二三間ヲ敷設スルノ目的ニシテ第一線路ハ門司ヨリ熊本マデ百二十一哩三十一鎖間ハ明治二十四年七月竣工開業シ第二線路ハ鳥栖佐賀間十五哩三十鎖間ハ同年八月ニ竣工開業シ其他ハ工事中又ハ線路測定濟トナレリ

北海道炭鐵鐵道會社ハ資本金六百五十萬圓ヲ以テ起リ第一線路ハ手宮(後)幌內(石狩)第二線路ハ幌內太ヨリ幾春別マデ共ニ六十一哩一四ノ内第一線路五十六哩六五ハ明治十五年竣工開業シ第三線路室蘭(空知)空知太間及第四線路空知ヨリ夕張(共石狩)マデ合シテ百三十四哩間ハ測定濟線ナリトス

其他未ダ工事假免狀ヲ有シテ工事を着手セザル私設鐵道諸會社及ヒ其線路ハ甲信鐵道會社ハ資本金四百五十萬圓ヲ以テ御殿場(駿河)海道(海)線路(東)ヨリ甲府ヲ經テ信州松本ニ達スル百三十六哩ヲ敷設セントスルモノナリ山形鐵道會社ハ資本金二百萬

圓ヲ以テ酒田港ヨリ山形ヲ經テ米澤ニ達スル九十七哩ヲ敷設セントスルモノナリ  
 總武鐵道會社トハ資本金百二十萬圓ヲ以テ東京ヨリ小岩ヲ經テ八街(總下)マテ三十九  
 哩間ヲ敷設セントスルモノナリ筑豐鐵道會社トハ資本金一百萬圓ヲ以テ第一線路  
 ハ飯塚(前)ヨリ若松港マデ及ヒ直方(前)ヨリ赤池村マテ二十九哩及第二線路ハ田川  
 郡神田村ヨリ添田村(共前)マテ六哩間ヲ敷設セントノ目的ナリ奈良鐵道會社ハ資本  
 金百五十萬圓ヲ以テ京都奈良間ヲ敷設セントノ豐州鐵道會社ハ資本金百五十萬圓  
 ヲ以テ福岡縣行橋町ヨリ四日市間行橋町ヨリ田川郡今任マテ今任ヨリ香春及添田  
 マテ四十七哩ヲ敷設スルモノトス參宮鐵道會社トハ資本金六十五萬圓ヲ以テ津ヨ  
 リ小俣村(伊勢)マテ二十一哩一〇間ニ伊勢大廟參宮者ヲ目的トシテ敷設スルモノナ  
 リ北陸鐵道會社トハ資本金四百萬圓ヲ以テ富山ヨリ敦賀ノ官設鐵道線ニ連絡スル  
 モノト守山(近江)ノ官設線ヨリ伏木(中)ニ至ルマデトノ二線路合シテ百四十四哩ヲ敷設  
 スル目的ヲ以テ起レルモノナリ  
 此等ノ鐵道ヲシテ盡ク竣工セシムルノ曉ニ至レバ日本鐵道ノ線路ハ總テ四十五線  
 路ニシテ其延長哩數ハ無慮二千六百六十五哩八八ノ鐵道ヲ有スルニ至ルベク之ニ  
 費スベキ資本金ハ一億一千萬圓ナリ而シテ本邦ノ幹線タルベキ鐵道ハ東ハ青森ニ

起リ東北東海山陽ノ諸鐵道ヲ通シテ早柄峽ヲ渡リ門司ヨリ八代(肥後)ニ至ルマデ凡ソ  
 一千三百哩間ハ鐵道ニ依リ通シテ旅行スルコトヲ得ベシ而シテ日本ヲ橫ニ通ズル  
 ニハ南海岸ノ橫須賀ヨリ北海岸ノ直江津ニ達スルモノト武豐敦賀間ヲ通ズル二線  
 路アリ

我邦ノ鐵道ハ斯ノ如ク進步シテアルモノニシテ其創業ハ明治五年ニアリテ歷ニ  
 既往二十年間ノ事業ナリ殊ニ私設諸會社ノ勃興センハ明治二十年後ノナレバ過  
 去五年間ニ於テ非常ニ進步シタリ現今日ハ鐵道ニ送ラレテ交通スル旅客及瀛車ニ  
 登載セラレテ此ノ產地ヨリ彼ノ市場ニ供給スル商品貨物ハ實ニ其數少カラズ明治  
 二十一年度ニ於テスラ(同年度ニ於テ既ニ營業シタルハ照ニ官設諸鐵道及日本鐵道  
 外知ル)乘客ノ總數ハ無慮一千三百九十六萬八千二百七十五人ニシテ同年度ニ於ケ  
 ル全國人口ノ四分ノ一以上ニ當レリ又鐵道ニヨリテ送リタル貨物ノ數量ハ十五億  
 六千三百五十四萬八千四百四十三斤ノ多ニ及ビ乘客及貨物ヨリ收メタル賃金ハ四  
 百四十七萬八千七百七十四圓ニ上レリ試ニ之ヲ一日ニ平均スルハ一日ニ三萬八千  
 二百七十人ハ鐵道ニヨリテ旅行シ毎日四百二十八萬三千六百九十四斤ノ貨物ハ瀛  
 車ニヨリテ彼ヨリ此ニ送ラレ又一日ニ一萬千七百二十一圓宛ハ收入アリ以テ鐵道

事業が我國交通運輸上ニ影響セルノ宏大ナルヲ知ルベシ然ルニ十ヶ年前ヲ顧ミレバ明治十一年度ニ於テハ乘客ハ三百四十二萬二千九百十一人ニシテ平均一日ニ歴ニ九千三百七十七人ニシテ十ヶ年後ノ四分ノ一ニモ及バザリ又乘客及貨物ノ賃金モ殆一百萬圓ニシテ是レ又四分ノ一弱ナリ然レバ我國ノ鐵道事業ハ明治十一年ヨリ同廿一年マデ十ヶ年間ニ三倍ノ進歩セルモノナリト知ルベシ然レモ是レ我國ニ於ケル創設事業ノ進歩トシテ視ルベク未ダ以テ鐵道諸國ニ比較スルニ足ラズ即チ左ノ一表ハ千八百八十三年ニ於ケル重ナル鐵道諸國ノ人口一人ニ對スル乘客及貨物ノ平均數ナリ日本モ明治廿一年度ニ於ケル同比例數ヲ次ニ列スベシ

國別	乘客	貨物
佛蘭西	五・七	二・五
露西亞	〇・五	〇・五
澳地利	一・三	一・二五
伊太利	一・三	〇・三
西班牙	一・五	〇・五
瑞西	八・〇	二・〇
加拿陀	三・〇	二・五
日本	〇・三六	〇・二四
獨逸	五・三	四・三
合衆國	六・〇	七・六
白耳義	一一・〇	六・五
英吉利	一九・〇	七・五
濠洲	一八・〇	三・〇

右ノ表ニ據レバ各國交通ノ狀勢ヲ知ルベシ即チ乘客ノ出入ニ關シテハ英國其第一位ヲ占メ貨物ニ於テハ合衆國ヲ冠トス又乘客ノ最モ寡少ナルハ露國ニシテ貨物ノ最モ寡キハ伊太利ナリトス而シテ日本ハ乘客貨物共ニ寡少ナルハ勿論ナリト雖モ中ニモ貨物ノ寡少ナルハ最モ甚ク乘客ノ數ニ比シテ數層ヲ劣レリ以テ各國ニ比シテ商品ノ運轉融通ノ未ダ發達セザルヲ知ルベシ(我國ニシテ貨物運搬ノ少キ一因ハ島世界ノ鐵道國ニ對スルハ我邦ハ後ニ下ルト雖モ亞細亞諸國ニ對シテハ上位ニアルヲ見ルベシ左表ハ千八百八十五年ヨリ千八百八十七年及千八百八十九年ニ至ル

亞細亞諸國鐵道延長哩數ニシテ各年ニ於ケル進歩ヲ示シタルモノナリ

千八百八十五年	千八百八十七年	千八百八十九年
英領印度 一九九七	一四〇八三	一五八三七
錫蘭 一八〇	一八〇	一八〇
小亞細亞 二三一	三七二	四四七
西比利亞 三一	七九四	八九〇
波斯 〇	〇	一一
和蘭印度 七二五	七二一	七九八
日本 三四八	五八一	九〇七
馬來諸國 八	二七	三一
支那 七	二八	一三四
交趾支那 五二	五二	五二
合計 一三八四九	一六八三八	一九二七七

右表ニヨレバ英領印度ヲ第一トシテ日本ハ第二位ニアリ特ニ其進歩ノ度ノ速ナルハ日本ヲ第一トシテ五年間ニ二倍六ノ増加ナリ千八百八十七年ニ於テハ和蘭印度

ヨリ百四十哩少カリシガ千八百八十九年ニ及ビテハ却テ百〇九哩ヲ超過スルコトナレリ

### 第三十章 郵便

往來運輸ニ次テ通信ニ移ルハ思考上ノ順序ナリ通信ナルモノハ相隔リタル人ノ思想ヲ連絡スルニ必須ノ方法ニシテ凡ソ事ノ過半ハ通信ニヨリテ之ヲ辨ゼリ往昔ニ於ケルガ如ク通信ノ方法之レナキモノトスレバ如何・人生經營ノ範圍ノ狹隘ナルコト、社會創設ノ時ニ、徴シテ知ルベシ、但通信ノ方法之レアリトスルモ其設計ノ巧拙如何ニヨリテハ利用上大ニ差異アリ今世紀ノ創設ニ係ル郵便法ノ如キハ通信ノ便ニ於テ實ニ近世ノ大發明ト稱セザルベカラズ抑郵便切手ノ發明ハ世人ノ知ル如ク千八百四十年英國ノ書肆セーむすかるめる氏ノ發明ニシテ同國ニ於テ該切手ヲ用ヒ初テ郵便業ヲ開キタルハ同年五月六日ノ事ニシテ僅ニ五十餘年ニ過ズト雖モ其進歩ノ顯著ナルハ現ニ吾人ノ實檢スル處ノ如シ其至便ナルニモ拘ラズ其至廉ナルハ一ハ厘ニ二錢切手ヲ書狀ニ貼用シテ郵便函ニ投ズレバ内國何レノ地ニモ達セザ

ルコトナク又一定ノ切手ヲ貼用スレバ聯合郵便ノ行ヘル、同盟諸國中、何地ニモ達スルノ仕組ニシテ獨リ書狀ノミナラス新聞雜誌書籍其他ノ物品モ制限ノ容積重量ニ越ヘザレバ何レニモ送達スルコトヲ得ベシ郵便法ノ社會文明ヲ補助スル亦々大ナリト謂フヘシ

我邦郵便事業ハ創始ハ實ニ明治四年ニアリテ其事業ハ政府ノ管理スル所ニシテ遞信省内ニ驛遞局ヲ置キ專ラ郵便事務ヲ司掌セシム郵便法ノ規程ハ之ヲ郵便條例ト稱シ現今實施スル所ノ郵便條例ハ明治十五年十二月ヲ以テ布告セルモノヲ基礎トシ是ニ多少ノ改正ヲ施シタルモノナリ

現ニ施行セル郵便條例ニ據レバ凡ソ郵便物ハ別テ四種トナシ、第一種ハ書狀第二種ハ郵便葉書第三種ハ毎月一回以上發行スル定期印刷物及其附録第四種ハ書籍帳簿各種ノ印刷物、寫真、畫、繪、紙、營業品ノ見本及雛形トス郵便物ノ重量ハ第三種、第四種郵便物(營業品ノ見本及雛形ヲ除ク)ハ一個ニ付三百目ヲ限トシ營業品ノ見本及雛形ハ一個ノ重量百匁ヲ限リトス又郵便物ノ大サハ曲尺ニテ長一尺二寸幅八寸厚五寸ニ超過スベカラズトノ制ナリ

郵便稅ハ郵便切手ヲ郵便物ニ貼付シタルヲ以テ納稅ノ證トシ葉書封皮帶紙等ハ切

手ヲ貼付シタルニ同シク其稅額ハ第一種郵便物ハ重量二匁毎ニ(亦同シ)二錢第二種ハ一葉一錢トシ第三種ハ一號一個重量拾六匁毎ニ(亦同シ)五厘二號又ハ二個以上一束重量十六匁毎ニ一錢第四種ハ重量三十匁毎ニ二錢ノ制ナリ

郵便物ノ確實安全ヲ期スルガ爲メニ又一種書留郵便ト稱スルモノナリ此書留郵便物ハ郵便局ノ帳簿ニ登記シ遞送配達ノ受授ヲ證トシ書留ノ手数料トシテ郵便物ノ何種ニ拘ラズ六錢ヲ納稅スルモノトス

其他免稅郵便貨幣封入郵便及小包郵便等アリ郵便物遞送配達ニモ通常配達ノ外別配達・郵便ニ留置郵便等アリ

郵便線路 郵便線路トハ交通圖中虛線ヲ以テ示スモノニ郵便物ヲ遞送スル線路ヲ云フ陸路、川上湖上海道ヲ論ゼズ郵便ヲ遞送スルニ最モ便益ナル線路ヲ連絡スルモノナリ郵便線路ニハ大線路、中線路及小線路ノ別アリ大線路ハ郵便幹線ニシテ中及小線路ハ其支線ナリ

郵便線路延長里程ノ増加ハ即チ通信及交通運輸ノ發達進歩ヲ徵スベキモノニシテ我邦郵便事業ノ創始ナル明治四年ニ於テハ其延長里程ハ厯カニ二十六萬八千八百里(郵便線路ハ普通鐵道以下同)ナリシカ二十年後ノ明治二十三年ニアリテハ一千三百〇

七萬七千九百三十八里ニ及ヘリ又郵便電信局及郵便局ノ數モ明治四年ニ於テハ匯ニ百七十九箇所ナリシガ明治二十三年ニハ三千六百三十箇所ニ増加セリ今郵便創始ヨリ明治二十三年ニ至ル二十年間ノ郵便線路延里程及郵便局ノ數ヲ擧グレバ左ノ如シ

年次	郵便線路延里程	郵便局
四年	二六八、八〇〇	一七九
五年	一、一六八、六二〇	一、一五九
六年	二、一八七、一四七	一、五〇〇
七年	四、五七六、四一四	三、二四四
八年	四、六〇三、五六五	三、五〇二
九年	五、四九三、九八九	三、七三八
十年	五、九九六、〇五八	三、七四二
十一年	八、〇八三、三六〇	三、八〇四
十二年	八、四二四、〇七〇	三、九九五
十三年	九、三八四、九四〇	四、六六四

十四年	一〇、三三八、七六八	五、〇九三
十五年	一一、〇二五、五〇三	五、五二〇
十六年	一〇、九二九、八〇七	五、三三三
十七年	一一、五二二、九四四	四、八七八
十八年	一一、四〇三、一二七	四、一三七
十九年	一〇、九八七、八〇一	四、〇五四
二十年	一一、七〇六、三七三	三、九二一
二十一年	一二、三六九、六〇一	三、七一〇
二十二年	一二、六八九、一一三	三、六〇七
二十三年	一三、〇七七、九三八	三、六三〇

表中明治十七年頃ヨリ多少里程ノ減シ且ツ局數ノ減セシハ郵便事業ノ整理ニ從ヒ冗線ヲ廢シ又局數ノ多ニ過レバ却テ遞傳ノ遲緩ナルヲ以テ之ヲ閉鎖シタルニヨル

郵便線路ノ延長増加及局數ノ増加ハ固ヨリ郵便事業ノ進歩ヲ視ルベシト雖モ尙ホ是ヨリモ一層適切ニ此事業ノ發達ヲ明ニスベキモノハ郵便收入金額ノ遞加及郵便



物箇所ノ増加是ナリ顧ミレハ明治四年郵便事業創始ノ際ニ於テ我政府ガ郵便事業ヨリ收入セル金額ハ厘ニ一萬七千九百七十六圓ニ過ギズ又郵便物箇數ハ五十六萬五千九百三十四箇ニ平均一人ニ對スル發出ノ數ハ〇箇〇一七即チ千人ニ付十七個ノ少數ナリ然ニ明治二十三年ニ於テハ收入セル金額ハ三百〇三萬八千七百〇五圓ノ巨額ニ上リ即チ創始年度ノ殆ンド百七十倍ニ達シ郵便箇數ハ無慮二億一千六百六十四萬四千四百八十七個ニシテ平均一人ニ對スル數ハ五箇三四〇ハ多數ニ及ベリ今創始ヨリ明治二十三年ニ至ル各年ノ増加ヲ示セバ左ノ如シ

年次	郵便收入金額	郵便物箇數	平均一人ニ對スル數
四年	一七、九七六	五六五、九三四	〇〇一七
五年	六五、五七八	二、五一〇、六五六	〇〇七五
六年	二二五、七二三	一〇、五五〇、九〇二	〇、三二三
七年	三三七、五九九	一九、九三七、四二三	〇、五八六
八年	五六二、七二二	二五、九九八、一七一	〇、七五七
九年	六六七、五五二	三三、二二〇、二九八	〇、九三〇
十年	七九一、五七五	三八、〇六〇、二六七	一、〇九一

十一年	九二五、二四五	四五、五〇四、二七六	一、二七二
十二年	一、一四〇、〇六九	五六、〇四七、二二九	一、五六〇
十三年	一、三七三、三三九	六八、〇一三、二二五	一、八七一
十四年	一、五四五、四二六	八四、一七七、一六二	二、二九四
十五年	一、八一〇、六四一	九九、三二七、八一二	二、六八三
十六年	一、八九〇、六三一	一〇六、七五四、四九六	二、八五〇
十七年	二、〇八三、四六一	一一二、八六二、三〇八	二、九八〇
十八年	二、〇七六、二七九	一一五、〇七二、六六五	三、〇一六
十九年	二、一九二、二一八	一二二、二六五、四五六	三、一四九
二十年	二、三七〇、九九三	一三六、六五五、二七四	三、四九八
二十一年	二、六一九、六三〇	一五八、二六五、二〇九	三、九九六
二十二年	二、八四八、九八九	一八三、六〇〇、一〇五	四、五八二
二十三年	三、〇三八、七〇五	二一六、六四四、四八七	五、三四〇

以上ノ増加ハ實ニ長足ノ進歩ニシテ之ヲ二十年間ノ平均ヨリ觀レバ郵便收入金額ニ於テハ一年平均十五萬一千〇三十六圓ノ割合ヲ以テ増加シ郵便物箇數ニ於テハ

一年ニ一千〇八十萬三千九百二十七箇ノ割ヲ以テ増加シ人口ニ對スル箇數ハ千人ニ付毎年二百六十六箇ノ割ヲ以テ増加セリ

次ニ全世界ニ於ケル郵便物ノ統計ヲ見ルニ近頃紐育郵便局ヨリ公ニセル千八百八十六年ニ於ケル統計ヲ頗ル精確ナリトス該統計ニヨレバ同年中世界ノ郵便物數ハ總計百十六億三千九百八十萬箇ニシテ之ヲ世界ノ人口ニ配當スレバ一人ニ付書狀及葉書ノ數一ケ年平均凡ソ五箇ニ當ル但シ世界各部ニ於ケル平均數ハ甚ダ差アリテ之ヲ五大洲ニ分テハ左ノ如シ

書狀葉書	平均一人ニ對スル數	郵便物總計
歐羅巴	四、四九一、〇〇〇 <small>千箇</small>	一、四、〇〇〇 <small>千箇</small>
亞米利加	一、九九四、〇〇〇	三、八一九、〇〇〇
亞細亞	三、六六〇、〇〇〇	〇、〇〇四
阿非利加	一、八七〇、〇〇〇	〇、〇〇九
濠太刺利	九五六、〇〇〇	二、四〇〇
合計	六、九六五、三〇〇	五、〇〇〇

### 第三十一章

#### 電信及電話

交信上郵便ニ次テ重要ナルハ電信機ナリ即チ時間ト場所トヲ短縮シ人ノ思想ヲ聯絡スルノ奇機ナリ故ニ兵事上ノ通報命令及商業上市場ノ情況相場其他急須ノ通信等ニハ實ニ必要缺グベカザルモノナリ是ヲ以テ現今地球上電信事業ノ進歩ハ頗ル顯著ニシテ殆ンド電線ヲ以テ圍繞シ彼是互ニ相密接スルノ傾アリ

我帝國ハ電信事業ハ政府之ヲ司リ東京ニ電信中央局ヲ置キ各地ニ郵便電信局ヲ置キ其事務ヲ掌ラシム現行電信條例ハ明治十八年五月ノ布告ニ基ク現條例ニヨレバ凡ソ電報ヲ別テ官報局報私報ノ三種トシ此三種ヲ各分テ七類トス(一)通常電報(二)至急電報(三)追尾電報(四)同文電報(五)照校電報(六)受信電報(七)返信料前納電報是ナリ又電報ヲ記スルニハ賴信紙ニ和文ハ片假名及數字ヲ用非歐文ハ羅馬字及亞刺比亞數字ヲ用ニ

電報料ハ國內ヲ通シテ和文ハ片假名十字以内ヲ一音信トシテ金十五錢十字以内ヲ加フル毎ニ金十錢ヲ増シ歐文ハ一語毎ニ金十錢五語以内ハ總テ金五十錢トス又至

急官報へ通常電報料ノ二倍至急私報へ通常電報料ノ三倍トス其他電報ノ各類ニヨ  
 リテ電報料ニ科アリ凡テ電報料ハ日本政府ノ發行スル電信切手又ハ郵便切手ヲ用  
 井之ヲ賴信紙ニ貼用シテ納稅ノ證トス

千八百八十九年全世界ノ電信線路ノ延長ハ九十六萬六千九百佛里(九十里ハ我ニ及  
 九町十間)ニ及  
 ビ即チ此長サハ以テ赤道ヲ二十六周スベシ尙ホ電信線ノ總延長ハ無慮二百七十二  
 萬四千佛里ニシテ即チ赤道圍ノ八十倍ニ及ベリ此内歐洲ニ屬スベキ線路延長ハ五  
 十二萬八千五百佛里ニシテ亞米利加ニ二十八萬二千佛里ヲ有シ亞細亞ニ八萬千二  
 百五十佛里濠太刺亞ハ四萬二千佛里ニシテ阿非利加モ亦二萬九百四十佛里ヲ有ス  
 ルニ至レリ又世界海底電線ノ總延長ハ十一萬二千七百一海里ニシテ世界ニ有スル  
 電信器械總數ハ十六萬箇ニ上レリト云フ

我帝國電信ノ創業ハ明治四年四月ニアリテ日尙ホ淺シト雖モ其進步ハ著シク其創  
 業ノ年ニアリテハ電線路延長ハ僅ニ二十三里電信局四人口ニ對スル電報數ハ翌五  
 年度ニ於テ千人ニ付二箇ニ過ギザリシガ明治二十一年ニ及テハ電線ノ延長ハ七千  
 六百三十五里ニ達シ電信局ハ二百十七ニシテ國土廣袤ノ割合ヨリ謂ヘバ即十九方里  
 一ニ一電信局ヲ有セリ歐洲ニテ最モ許多ノ電信局ヲ有スルハ白耳義ニシテ十九方里

六七ニ對シ電信局一ヲ有シ獨乙ハ二十方哩五六ニ英國ハ二十六方哩八六ニ佛蘭西  
 ハ三十四方哩八一ニ一局ヲ有シ露西亞ハ三千七百方哩ニ一電信局ヲ有セリ電報數  
 ハ人口千人ニ付六十二個ノ多ニ及ベリ然レモ歐洲列國ノ電報發送數ハ遙ニ多クシ  
 テ英國人口百人ニ付百六十四件佛ハ八十八件獨逸ハ四十五件露西亞ハ最モ少キモ  
 尙ホ十件ニ當レリ

爰ニ我電信事業ノ創業以來ノ進步ヲ左表ニ據リ示スベシ

年次	電信局	線路長	線路延長	音信通數	人口千人ニ 付私報數
四年	四	二三	二三	一九四四八	一
五年	一八	四〇	八七	八〇、六三九	二
六年	二八	三九八	八〇七	一八六、四四八	六
七年	三四	七二〇	一、七五九	三五六、五三九	一一
八年	四七	七九〇	一、八八四	四八六、八五三	一四
九年	五一	九〇八	二、一五六	六四八、六一九	一九
十年	六八	一、一四二	二、八七六	八〇二、二三六	一
十一年	九七	一、六一七	三、五二二	九六七、三五八	一

十二年	一二	一七三三	三八四三	一五八一、九九七	四五
十三年	一五五	一七六九	四四八九	一九一〇、八三三	五四
十四年	一六九	一九二七	五〇七八	二四三四、〇四五	六七
十五年	一八五	二〇四九	五、五三四	二八一、六二九	七二
十六年	一九五	二、一四三	五、九一七	二、五三九、四二八	六三
十七年	二二二	二、三〇〇	六、一六九	二、五九六、六六六	六三
十八年	二二五	二、三六八	六、三三一	二、五三三、三三九	六一
十九年	二二七	二、四〇九	六、四〇三	二、四一〇、六二七	五五
二十年	二二一	二、五二七	六、八六九	二、四八九、一三六	五七
二十一年	二二七	二、七〇二	七、六三五	二、六八二、二一〇	六二

電話

電話機ハ最近ノ發明ニシテ凡ソ百五十哩以内ノ距離ニ於テ直接ニ人ノ思想ヲ通ズ  
 ベキ重要ノ機ナリ故ニ最モ進歩セル國及商業地方ニハ必用ナルモノナリ抑、電話機  
 ノ始テ專賣特許ヲ得タルハ千八百七十六年(明治九年)三月ニシテ其發明者ハ米國人  
 あれきさんだ、ぐらほむべる氏ニシテ其始テ實用ニ供セラレタルハ其翌年四月ナ

リ然レモ電話交換所ヲ開テ公衆ノ用ニ供スルニ至リシハ實ニ千八百七十八年二月  
 ノ事ナリシ

斯ノ如ク電話ノ起原ハ日未ダ淺シト雖モ各國競フテ此事業ヲ採用擴張シタリ就中  
 米國及獨逸ハ其最モ進歩セル所ニシテ其獨逸ハ千八百八十七年ノ初ニ當テ全國ニ  
 於テ電話線ノ設ケアル市府ハ百六十四所ニシテ其通信所ハ三萬千三百二十五所ニ  
 達シ電話線ノ延長ハ四萬五千九百九十八佛里アリ英國瑞典ノ如キ之ニ次グ

我國ニ於テ始テ民用電話線ヲ架設シタルハ明治十八年ノ事ニシテ明治二十一年ニ  
 於ケル電話線延長ハ四百七十三里ニ及ベリ又東京横濱兩市内及兩市間ニ電話交換  
 ノ業務ヲ開始セルハ同二十三年十二月ノ事ナリ今明治二十三年一月調ノ歐米各國  
 及日本ノ電話加入者ノ數ヲ舉テ彼我ノ比較ヲ示スベシ

國名	人數	國名	人數
米國	四七五、〇〇〇	獨逸	三一、三二五
英國	二〇、四二六	瑞典	一二、八六四
佛國	九、四八七	伊太利	九、一八三
諸威	八、三九〇	露國	七、五八五

瑞 西	六五七〇	白耳義	四六七四
奧地利	四二〇〇	和 蘭	二八七二
西班牙	二二二八	丁 林	一八三七
葡萄牙	八九〇	日 本	七八一

### 第三十二章

#### 通信ノ地方的配布

凡、通信ナル者ハ、事業發達セル地方ニ頻繁ニシテ、事業ノ幼稚ナル地方ニ稀ナルベキハ、掩フベカラサル事實ナリトス。然レモ元來事業ノ發達ハ亦地理的事情ニ關スルモノニシテ、若シ沖積層ノ平原ニシテ河道若クハ海灣ノ便ヲ占ムル地アラシニハ中央市場妥ニ撰定セラレ忽チ多數ノ人口ヲ招キ事業發達シテ通信ノ頻繁ヲ來スベシ、又某所ニシテ特種ノ產出地ナレバ資本家妥ニ集リ事業發達シテ通信ノ頻繁ヲ生スベキハ自然ノ順序ナリトス。

左レバ我國通信ノ地方的配布ニ於テモ全ク此事實ニヨリテ繁閑ノ別アルヲ見ルベシ、我國ノ五大區地方中通信ノ最モ頻繁ナルハ本州中區ナリトス、明治二十一年末ニ

於テ全國ノ平均ハ人口一ニ付郵便物數三九五ナルニ此本州中區ハ五三七ノ多數ヲ占ム、是レ本區ハ關東ノ沖積層大平原ヲ占メ加フルニ東京中央市場橫濱貿易港蠶糸特產地及ヒ濃尾ノ沖積層地ヲ領セル等ハ其源因ナリ、次ニ本州西區ハ一人人口ニ付四二二三トス、本區ハ畿内ノ沖積層平地ニシテ大坂大市場京都市場神戸貿易港等ヲ占メ、次ハ本州北區ハ二六一ニシテ平均以下ニアリ、九州區一九八及四國ノ一九三等皆通信ノ閑散ナル地ナリ、左ニ各區ニ付其詳説ヲ記スベシ。

本州中區 本區ハ前ニ論ズルガ如ク帝國中最モ主眼ノ要部ヲ占メ事業ノ發達セルト他ノ比ニアラズ故ニ通信ノ頻繁ナルベキハ固ヨリ其所ナリ、就中東京ハ全國事物ノ樞點ナレバ總テノ事概テ東京ト關係ヲ有セザルナン故ニ通信數ノ多キ亦々全國ノ第一ニシ、其郵便物ヲ其人口ニ割付スレバ二六七八ノ多數トス、次ニ神奈川ハ橫濱貿易場ヲ有シ商品ノ輸出入等皆通信ノ繁ヲ招ク原因ナリ、滋賀ハ所謂近江商人ノ本據ニシテ古來商業思想ノ發達セル地方ナレバ通信モ亦々從テ頻ナルベキノ理ナリ、長野群馬ハ蠶業ヨリ生ズル通信ニシテ名古屋ハ濃尾平原ノ中央市場タルベキ地ナレハ愛知ノ通信數多キハ之ニ原クベシ、其他ノ各地ハ著シク平均數ヲ減蝕スベキ地ニシテ事業ノ幼稚ナル知ルベシト雖モ他區ヲ將テ之レト對スレバ比較上多數ヲ占

ムルヲ見ルベシ尤モ福井石川富山ノ如キ北陸地方ハ風土上自ラ本區ノ各地ト同伍スベカラザルヲ以テ其少數ナルハ言フ待タザル所ナリ

本州北區 本區ハ所謂東北地方ニシテ歴史上ヨリ之ヲ謂ヘバ寧ロ新拓ノ地方ニシテ事業ノ幼稚ナルト其地質ノ火山性岩石多クシテ地味頗ル瘠薄・農産ノ豐ナラザルトハ此地方ノ缺點ナリ然レモ中ニ宮城野沖積原アリテ其仙臺ハ東北ノ中央市場タルベキ資格ヲ有スルヲ以テ通信數モ上位ヲ占メタリ又會津四近ハ有名ナル蠶業地ニシテ之ニ伴フ通信ハ福島ノ多數ナル源ナリ新潟ハ北西岸ノ互市場ナレバ其一部ハ通信繁ケレモ其縣管區ノ廣キガ爲其平均數ハ減セラレタリ其他ノ各地ハ通信甚ダ開ナリ中ニモ岩手ノ高原地ハ最モ開ナル地ナリ

本州西區 本區ハ中區ニ亞ギテ通信頻繁ナル地ナリ是レ主トシテ關西ハ中央大市場タル大坂及舊都ノ繁榮ヲ持續スル京都ヲ控ヘタルニヨルベシ加フルニ畿内ノ沖層原ハ農産饒ク神戸ノ貿易港ハ海運盛ナリ此等ノ原因ハ西區ノ通信ヲ盛ナラシムル原因ナリ次ニ山陽道ト山陰道トヲ比スルニ山陽道ハ一人口ニ對スル郵便物ハ二八九ニシテ山陰道ハ二二四ナリ即チ山陽ハ山陰ニ比スレバ一人口ニ付〇六五ノ多數ナリ是レ外ナラズ山陽道ハ山陰道ニ比スレバ概スルニ地理的形勢ニ長所多クシ

テ事物ノ發達常ニ一歩ヲ進ムルニヨルナリ

四國區 本區ハ四國島一圓ノ總稱ニシテ通信ノ少數閉散ナル本區ヲ以テ全國ノ最トス元來島國ハ其人心ニ稍割據ノ傾アリテ他ノ地方ノ人ノ如ク廣ク交際ヲ求メ遠ク音信ヲ通ズルガ如キノ念ハ島國人ノ稍薄シトスル所ナリ島國ニ人口ノ稠密ナルヲ常トスルガ如キモ其一證トシテ見ルベシ是レ固ヨリ内地ノ如キ陸路交通ノ便ナク偶遠ク通セントセバ必ズ船舶ニヨリ海ヲ航セザルベカラザル等ノ不便アリ此不便ハ今日ニアリテハ實ニ厪瑣ノ障害ニ過ギズト雖モ此不便コソ割據心ヲ馴養シタリ源ナリ以上ノ理ニヨリ本區ノ通信ハ甚ダ開ニシテ阿波ノ如キ特產地モ亦タ他地方ノ下ニアリ

九州區 本區モ亦九州ノ島國ニシテ通信ノ開散ナル亦四國區ニ彷彿タリ但長崎ハ西南ノ貿易港ナレバ通信モ比較上頻繁ニシテ通信上ノ進歩モ速ナリ福岡ハ九州北部ノ門港ニ博多ヲ有シ通信數稍多シ熊本ハ九州ノ中央市場タルベキ地ニシテ之ニ次ギ・其他ハ皆少數ニシテ鹿兒島ノ如キハ通信數ノ少キ全國ノ最タリ

愛ニ通信ノ配布上特筆スベキハ北海道ノ通信數全國ノ各區ニ超過ノ最多數ヲ占ムルト是ナリ其人口一ニ對スル郵便物々數ハ七七七ニシテ本州中區ノ上ニアリ又府

縣別ヨリ之ヲ云ヘバ大坂ノ下、京都ノ上ニ位スベキ多數ヲ占メタリ而シテ其土地ヲ云ヘバ最新ノ開拓地ニシテ事業未發達ノ地ト稱セザルベカラズ然ルニ此多數ヲ占ム是レ其理由ノ存セザルベカラズ抑北海道ハ新開ノ地ナリト雖田肥沃ニシテ森林ニ富ミ礦產水産亦豊ニシテ最モ事業發達ノ地ニ適合ス故ニ此地ニ趣クノ人ハ皆一事業ヲ企畫シ所謂眠食ノ徒少ナク北海道ノ住民ハ皆擧ゲテ活潑ニ運動シテ、アル重要ノ生産者ト謂フベクシテ内地ノ徒ニ古キ歴史ヲ有スル各地ガ却テ事業上著シキ見ルベキモノナク遊手消過ノ輩多キト大ニ其趣ヲ異ニセリ加フルニ其住民ハ多ク内地ヨリ移住ノ人ニシテ常ニ内地ト通信スベキ關係ヲ有セリ是レ新開地ニ似ズ通信ノ頻繁ナル源因ナリ故ニ北海道ハ事業ノ發達上將來大ニ多望ノ地ト稱セザルベカラズ

### 第三十三章

#### 海運

世界ハ交通運輸ノ發達ニハ各期限アリテ、一時其時代ニ專ラ行ハル例ヘバ世ノ草昧未開ノ際ニ行ハル、交通運輸ハ必ズ範圍ノ廣カラザル陸路ニ依テ通ゼラレ墮ニ人

脚若クハ家畜ノ行程ニ止マレリ其漸ク進歩スルニ從ヒテ内海即地中海交通專ラ行ハレ内海及沿岸近キ處ヲ白帆ヲ揚ゲテ航スルノ時期トナリ其寄泊スル港灣頻ニ繁昌スルニ至ル然レモ世運ノ進歩ハ尙此地中海交通ヲ進メテ大洋航通時期ニ至ラシメ安全ナル船艀及強力ナル機關ノ發明アリテ海運ノ業ヲ容易ナラシムルニ至ル而シテ當世紀ノ如ク遂ニ再ビ陸上ノ交通盛大トナリ盛ニ蒸氣ヲ利用シテ海陸兩路駢

立テ交通運輸ノ業益旺盛ヲ極ムルニ至ルナリ我帝國ノ交通運輸ニ於テモ以上ト同一ノ來歴ヲ履ミシコト疑フベカラズ其草昧ノ際ニアリテハ專ラ陸路ノ通行運搬行ハレ貨物ヲ此地ヨリ彼地ニ致スニハ人肩若クハ馬背ニヨリテ輸送シ其足ヲ息ヒ或ハ安眠ヲ買フベキ所人家自然ニ輻湊シテ所謂宿驛ト稱スルモノヲ生ズルニ至リ驛馬又ハ搬具ヲ備ヘ或ハ遊旅ヲ擔フル等ニヨリテ其地漸ク繁榮ヲ來ストナレリ

次ニ發達センハ内海及沿岸ノ通行ナリ然レモ我國ノ如キ四面環海ナル形勢ノ地ニアリテハ當初既ニ其必要ヲ感センハ之ヲ濟スベキ船舶ナリシナルハ況ンヤ其中間ニハ天然ノ地溝(瀬戸内海)横ハリテ自ラ其便ニヨルベキヲ示ス地形ナルニ於テオヤ左レバ我國有史以前ニアリテ既ニ船舶ノ通ゼンコトハ明ナリ太古彼ノ二柱ノ神

共議シテ蛭見ヲ天盤椽樟ノ船ニ載セ云々及素盞鳴尊ノ埴船ニ乘リテ出雲籬川上ニ至ル云々ト云フカ如キ既ニ舟筏ノ存セシコト疑ナシ然レモ内海及沿岸通航ノ盛行ハルハニ至リハ陸路交通ノ後ニアリシガ如シ即チ崇神帝十七年詔ニ曰ク船ハ天下ノ要用ナリ今海邊ノ民船ナキニヨリテ以テ甚ダ歩運ニ苦ム諸國ニ命ジテ船舶ヲ造ラシムベシト其十月大ニ船舶ヲ造ル是レ紀元五百七十六年ノ頃ナリ是ニ於テ我國海運ハ一大進歩ヲ來シ海路ノ通航漸ク多ク加ヘ貨物運搬モ其便ヲ益セシナルベシ而シテ其船ノ製ハ所謂ル船つくのふねナル大船ニシテ二三百石積ヨリ二千石積ノ間ナリシト云フ

内海通航期ハ是ヨリ其端ヲ開キ代々ノ天皇皆交通運輸ヲ獎勵セラレ應神帝ハ六百年代船舶獎勵ノ遺業ヲ繼ギテ再ビ諸國ニ勅シテ船ヲ造ラシム是ニ於テ諸國競フテ大船ヲ作り獻納ス即悉ク之ヲ攝津武庫ニ集メ又外匠ヲ招キテ兵船ヲ造ラシム。一千二百八十八年齊明帝ハ新羅ヲ討タントシテ駿河國ニ勅シテ兵船ヲ造ラシム。一千三百六十八年元明帝ハ越前越中越後佐渡ニ勅シテ船一百艘ヲ造ラシム兵備ニ充ツ。一千三百九十二年聖武帝ハ東海東山山陰西海ノ各道ニ詔シテ百石積以上ノ船ヲ造ラシム。一千四百十一年淳仁帝ハ三年ヲ期シ兵船五百艘ヲ各道ニ課シテ營造セシ

メ。二千二百五十二年秀吉征韓ノ目的ヲ以テ諸國ニ令シテ大船ヲ造ラシム高十萬石ニ付大船二艘トス秀吉亦一大船ヲ作り號シテ日本丸ト云フ。以上ハ史ニ現ハル處ニシテ多クハ兵備ノ目的ニ出タリト雖モ其船匠海員等ヲ獎勵シ一般ノ海運ヲ進メタルヤ知ルベシ。然レモ是レ多クハ内海若クハ沿岸ヲ航スルニ過ギズンテ大洋ノ航路ハ未ダ行ハレザリシガ如シ偶々大洋ヲ航シ又ハ遣唐使等ノ支那海ヲ航センモノナキニアラザリシモ其船舶ハ大洋ヲ航スルニ適セズ其航行甚ダ危險ニシテ寧ロ冒險ノ事業ト云ハザルベカラズ殊ニ延喜年間此遣唐使スラ廢セラレヨリ大洋ノ航路全ク絶チ巨船ノ必用モナク久シク大船ノ製廢絶セリ彼ノ史ニ稱スル源實朝唐ニ渡ラントシテ大船ヲ造ラシメ六月ヲ經テ成リ由比浦ニ於テ進水式ヲ行ハントセシモ船舩動カズ空シク砂頭ニ朽壞セリト云フカ如キハ全ク大洋ヲ航通スル程ノ大船ヲ製造スルノ術拙ナリシヲ知ルベシ

斯ノ如ク我國内海通航ノ業ハ頗ル盛ナリシヲ以テ之ニ供スル船舶ノ種類亦タ從テ増加シ其製造法モ大ニ進歩シ實用上ヨリ生ゼン改良モアレバ又全ク贅澤ヲ主トシ美麗ヲ競フノ製法モアリテ中古ノ頃ニ及ビテハ其種類ノ數多ナル以テ海運ノ隆盛ナリシヲ徵スルニ足レリ即天皇乘御ニハ龍頭船鷓首船等アリ將軍若クハ高貴ノ人



へ御召船御座船ノ稱アリ、畫船トテ船舳ヲ彫刻シ種々ノ彩色ヲ施シ又ハ船舳ヲ塗リ畫ケルモノアリ又一般人ノ渡用ニハ屋形船屋根船障子船引船漕船等アリ別ニ臺所船、厨船、納戸船、小荷駄船共ニ行李ヲ登積スル船ニシテ行李船トモ稱セリ又登積スル物ニヨリテ馬船、水船、石船、土船、砂船、木船、柴船、茶船等ノ名アリテ各其製ヲ異ニセリ

進行ノ速力ヲ要スル駛走用ノ船ニハ猪牙舟トテ今ノ短艇ト同様ナルモノアリ又打櫂船ハ楫數六挺乃至十六挺ヲ用井車船トハ車ヲ用井テ水ヲ掻キ小楳船トハ四十挺乃至八十挺ノ小楳ニテ駛走スルモノモアリキ

通航ノ場所ニヨリテモ又各船ノ種類ヲ異ニセリ即大坂ト伏見ノ間ヲ往來スルヲ伏見船ト云ヒ其生魚ヲ運搬スルヲ今井船又ハ手操船ト云ヒ上荷船過書船モ亦々此間ヲ往來スル荷物運送船ニシテ勢州桑名及濃州白石間ニハ鶺鴒船四ツ乗船アリ北國船トハ專ラ北國ト奥州間ヲ往來シ渡海船飛脚船并船ハ大坂ヨリ中國ヲ往來スル船ノ通稱ナリシ

又船ヲ用井テ種々ノ營業ヲナスモノアリ即賣賣船勸進船湯船等アリテ各船中ニテ商業ナスモノナリ斯ノ如ク數多ノ種類アリテ近世ニ及テハ川船ノ種類ニテモ六十

三種ノ多キニ至リ之ニ海船ヲ加フレバ其種類一百種以上ニ超ヘタリ

船舶及通航ノ發達ハ前述ノ如クナリシト雖也皆是内海通航ニ止マリ船首ヲ海外ニ轉ジテ他ト航權ヲ競フガ如キト少カリシ例へ大洋通航ノ發芽ヲ見ザルニアラザリシモ當時ノ政略ハ之ヲ以テ我國ノ不利トシ人力ヲ以テ強テ遠航ノ業ヲ禁ゼシナリ今左ニ海外通航ノ發芽及其之ヲ禁ジテ永ク大洋航通期ヲ杜塞セン來歴ヲ叙スベシ

紀元二千四十年(天授六年)足利義滿使ヲ明ニ遣ハスガ爲メ久シク廢シタル大船(大洋航海)製造業ヲ再興シ應永年間ニ至リ周防ノ守護大内左京多々良盛見ニ命ジテ巨船ヲ造ラシメ之ヲ勘合符船ト號ケ筑前博多泉州堺浦ヨリ出帆シテ支那ノ寧波港マデ到ラシメ又朝鮮釜山浦ニモ到ラシメタリ此業世々大内氏ノ掌ル所ニシテ泉州堺ノ商賈及九州ノ大名商人等モ亦大船ヲ造リテ海外諸國ニ航シテ通商シ其收益少ナカラザリシヲ以テ諸國トモ巨船ヲ造ルコト歳月ニ増加シ・爰ニ大洋通航ノ端ヲ開カントシハニ天文二十年大内家滅ビテ勘合符印モ亡シ支那渡海ノ業ハ各商賈等ノ漫リニスルコトナリシヲ以テ二千二百五十二年秀吉諸國ニ令シテ外國渡航ノ制ヲ定メ海外渡船ハ御朱印船ト號シテ免許ノ朱印ヲ受ケシメ此頃天竺渡航ト稱シテ今ノ交趾東京東浦塞暹羅等ノ地ニマデモ來往シタリキ

此御朱印免許即チ外國通商ノ特許ヲ蒙リシハ京都ニテハ角倉船茶船伏見屋船各一艘泉州堺ニテハ伊豫屋船一艘長崎ニテハ末次船二艘荒木船本船糸屋船各一艘即チ都合九艘ヲ以テ專ラ海外通商ヲ許シタリシ

然ルニ徳川政府ニ至リ其鎖港主義ヲ取ルヤ寛永十一年時ノ將軍家光ハ遂ニ此御朱印九艘ノ往來ヲ禁シ尙ホ密航ヲ恐レ五百石積以上ノ船ヲ造ルコトヲモ併セテ嚴禁セリ是ヲ以テ近古ニ至リテハ大船巨船製造ノ業大ニ退歩シテ海外通航ニ堪フベキハ船舶全ク跡ヲ絶チタルヲ以テ通商路斷ヘ外事内ニ聞ヘズ永ク日本ハ小天地ニ安ジテ亦海外萬里ノ事情ヲ知ラザルニ至レリ然ルニ二千五百十三年即嘉永六年ニ至テ米國軍艦入港セシヲ以テ幕府俄ニ狼狽シ又巨船ノ必要ヲ覺リ將軍徳川家定ハ諸大名ニ命ジテ大船ヲ造ラシメ以テ外寇ニ備ヘシメタリ而シテ其製皆泰西ニ倣ヒシカ故時人之ヲ異邦形船ト云フ是レ外國船舶ノ濫觴ナリトス

抑世界太平洋航海時代ノ緒ヲ開キシ瀛船ノ初テ海上ニ現ハレタルハ千八百十二年ニシテ蘇格蘭ノ Clyde 河畔ナル「くら」造船場ニテ製造サレシ「こめつと」號ヲ嚆矢トス同號ハ艦ニ長四十二呎幅十一尺ニシテ現今ノ大艦ニハ登載スルニ足ルベキ一小舟ニシテ其速力ハ六哩ニ過ギザリシ然ルニ歴カ十年後ノ千八百二十二年ニハ英國ニ

テハ通商瀛船六十艘ノ多キニ至リ其二十五年ニハ「ねんたーぶらいず」號ハ始テ喜望峯ヲ經テ印度ニ至レリ又米國ノ「さぐあん」號ハ千八百十九年ヨリ加拿陀ノ Quebec 及英國ノ間ヲ航行セリ瀛船會社ノ初テ定期航海ノタメニ設ケラレシハ今モ尙ホ存スル彼國會社ニシテ千八百三十七年ニ英國政府ト約シテ Lisbon 府并ニ Gibraltar 海峡ノ郵便事務ヲ託セラレ此航海ニ平均三週間ヲ要シタリ同會社ハ千八百四十年ニ印度政廳ト郵便物登載ヲ約シ爾來其事業ヲ擴張シテ遂ニ支那日本及濠洲ニ及ボセリ是ヨリ諸會社起リテ互ニ爭ヒテ航路ヲ開キ世界ノ交通ヲ迅速ナラシメタリ就中太平洋ノ航路ハ最モ盛大ヲ極メ現ニ愈々迅速トナリツ、アリ即千八百三十一年ニハ Quebec 及倫敦間ハ二十五日間ヲ費シテ航行シ千八百三十八年ニハ Liverpool 及紐育間ヲ七日若クハ十五日間ニ航行シタリ

爾來瀛船ノ功驗ハ益著シク且ツ堅固トナリ又各國ニハ瀛船會社起リ中ニモ米國ノ航海者ハ頻ニ英國ト競争シ勢速力ノ増進トナリ平均速力十二哩乃至十三哩ノ瀛船ヲ造出スルニ至レリ大船ニハ有名ナル鐵艦ペルシヤ號(三千六百馬力)ヲ製造シ愛蘭ノ Queenstown 港ヨリ紐育マテ十日半ニ航セシヲ以テ名アリ米國南北戰爭後ハ著ク大西洋航度ニ競争ヲ生シ大西洋ヲ八日間ニ航スルニ至レリ降テ千八百七十七年

ニハ七日ト十四時ニ渡航シ後更ニ減シテ七日ト十時間トナリ千八百七十九年ニハ七日ト八時六分間ニ渡航シ遂ニ益減シテ大西洋航海時日ハ四日間ニ至ルベシト云フ又彼阿會社ノ有スル瀛船ノミニテモ千八百八十六年度ニ於テ螺機船五十二艘ニシテ積量合計十八萬一千六百九十四噸ニ及ビ該會社ガ有スル總テノ船艦ノ長サヲ合スレバ凡四哩ニ達スベク使役スル人員一萬人以上ニシテ千八百八十五年度ノ航海里數ハ二十三萬四千哩ニシテ即チ地球ヲ百八回周廻スルニ同ジト云フ一私會社ニシテ尙ホ斯ノ如シ全世界海運業現今ノ進歩見ルベキナリ我帝國海運ノ眞ニ盛ヲナセシハ前ニ述ベシ如ク外國形船ノ輸入以來ニアリ當時ノ蒸氣船ハ總テ外國ヨリ購入シテ之ヲ用井タリ又其船員モ多ク外國人ニ依託セリ其後土佐人岩崎彌太郎外國ノ古船ヲ購ヒテ初メテ瀛船會社ヲ東京ニ創立シ之ヲ郵便瀛船三菱會社ト名ケ記號ニ三箇ノ菱形ヲ用井本邦沿岸ニ定期往復ヲ創メ殆ト本邦ノ航權ヲ專掌セリ之ヲ瀛船商會ノ初トス次テ東京ニ共同運輸會社ト稱スル合本瀛船會社起リ三菱會社ト競争ノ姿ナリシガ明治十八年十月ニ至リテ共同運輸會社及ビ郵便瀛船三菱會社ノ資産ヲ合シテ愛ニ郵船會社ナルモノヲ創立スルニ至レリ又專ラ瀬戸内海航通ノ目的ヲ以テ明治十七年五月大坂ニ大坂商船會社ヲ創立シ郵便

物割載ノ依託ヲ受ケ定期航海ノ業ヲ開ケリ是ニ於テ現今ハ瀛船定期航海會社ハ東京大坂ニ二大會社ヲ見ルニ至レリ此二大會社ハ實ニ我邦航海業ノ骨子ニシテ二會社業務ハ消長ハ即チ日本航海業ノ消長ヲ表シ東洋局面ニ於テ有スル日本覇權ノ消長トモ謂フベキモノナリ

日本郵船會社ハ資本金一千七十五萬圓ノ會社ニシテ東京ニ本店ヲ置キ内外各地ニ支店出張所及代理店ヲ置クト三十六箇ナリ其所有ノ瀛船ハ六十七艘ニシテ其噸數ハ六萬七千二百三十九噸七千三百六十四馬力アリ

日本郵船會社ハ政府保護ノ下ニアルヲ以テ其定期航海路及度數期日ハ遞信省ノ命令ニヨリテ定ムルトセリ今其命令ニヨリ定期航海諸港ト航運度數トヲ示セバ左ノ如シ

外國諸要港

(一) 神戸、赤馬關、長崎、五島對馬ヲ經テ釜山、元山、津浦、鹽斯德間 每月一回

但シ冬季天津結氷中ハ航路ヲ元山津ニ止メ五島對馬ノ寄港ヲ止ムルコトヲ得

(二) 神戸、赤馬關、長崎ヲ經テ釜山、仁川、芝罘、天津間 每月一回

但シ冬季天津結氷中ハ航路ヲ仁川ニ止メ往復五島對馬ニ寄港シ前項休暇中ノ補充ヲナ

スモノトス

内國諸港

- (一) 横濱、神戸間 毎月十回
  - (二) 横濱、荻ノ濱、箱館間 毎週二回
  - (三) 横濱、四日市間 毎月一回
  - (四) 神戸、高知間 毎週一回
  - (五) 函館、根室間 航海度數未定
  - (六) 函館、小樽間 全上
  - (七) 函館、青森間 毎日一回
  - (八) 青森、室蘭間 毎日一回
  - (九) 小樽、境、伯耆間 航海度數未定
  - (十) 小樽、増毛、福文利尻、宗谷間
 

自十一月	自十一月
至十一月	至十一月中
中旬	旬
每月三回	每月五回
- 但シ禮文利尻、宗谷ノ三郡并昔前郡ノ内燒尻ハ自四月至十月 毎月二回
- (二) 國後諸島、擇捉、北見地方 毎月凡四回 (但シ一回ノ内毎年五月九月一回ヲ得撫島へ航海ス)

以上ノ外外國港ニテハ牛莊、馬尼刺、西貢、布哇、瓜哇、濠洲及朝鮮諸港へ又内國港ニテハ伏木、直江津、新潟、酒田、本莊、能代、北海道諸港、伊豆諸島、小笠原島、琉球等へハ豫メ場所ヲ定メズ實地船客、貨物ノ多寡ヲ計リ其需用ニ應ジテ臨時ノ航海ヲナセリ

大坂商船會社ハ資本金百三十五萬圓ヲ以テ大坂ニ起リ純然タル私立ノ瀛船會社ニシテ關西沿岸ノ航海權ヲ專ニシ尙ホ進ンテ支那、朝鮮へ航路ヲ延バサントス、支店及代理店ヲ置ク一五十六、瀛船五十六艘、噸數一萬噸餘、馬力千八百三十七アリ

大阪商船會社ノ遞信省ト特約スル所ノ定期航海諸港ト航運度數トヲ舉グレバ左ノ如シ

- (一) 神戸、多度津ヲ經テ馬關ニ至ル 毎日發
- (二) 神戸、江並、高松、多度津、駒尾ノ道、竹原、瀬戶、吳、岩國、柳井、室津、徳山、三田尻ヲ經テ馬關ニ至ル兩地 毎日發
- (三) 神戸、高松、多度津、今治、三ヶ濱、長濱、別府、大分、佐賀關、八幡濱ヲ經テ宇和島ニ至ル 毎月八回
- (四) 赤間關、細島ヲ經テ油津ニ至ル 毎月五回
- (五) 赤間關、博多間 毎月二十四回

海運

(六) 長崎、三角ヲ經テ百貫石ニ至ル 毎月十四回  
 (七) 百貫石、若津間 毎月五回  
 (八) 博多、唐津、呼子ヲ經テ伊萬里ニ至ル 毎月六回  
 (九) 神戸、鹿兒島ヲ經テ沖繩ニ至ル 毎月一回  
 (一〇) 神戸、鹿兒島間 毎月五回  
 (一一) 神戸、多度津、今治、三ヶ濱、長濱、別府、大分、佐賀、關白、杵、佐伯、延岡ヲ經テ細島ニ至ル 毎月六回  
 (一二) 大坂、洲本間 兩地毎日發  
 (一三) 馬關、萩、濱田ヲ經テ境ニ至ル 毎月四回  
 (一四) 大坂、徳島間 兩地毎日發  
 (一五) 大坂、和歌山間 兩地毎日發  
 (一六) 大坂、兵庫、假屋ヲ經テ志築ニ至ル 毎月三十回  
 (一七) 大坂、兵庫、明石、高砂、飾磨、網干、室津ヲ經テ坂越ニ至ル 毎月三十回  
 以上ノ如ク現今我邦ノ航路ハ二大會社合シテ海外ヘノ定期航路二線内國線路二十八線路アリ之ニ使用スル汽船ハ百二十三艘噸數七萬七千三百四十八馬力九千二百

○一アリ其他小汽船會社ヲ加フルキハ日本全國ニ有スル汽船總數ハ六百艘(二十四年未)ニシテ噸數十萬噸ニ下ラズ現今海運事業ハ以上ノ如ク雖モ是レ唯々從來政治的威カヲ以テ歴シタルモノハ再ビ時運ヲ得テ發シタルマデニシテ海國タル世界ハ日本テウ資格ニ就テ見ルハ決シテ未ダ隆盛ナリト謂フヲ得ズ古來業已ニ我邦ノ形勢ハ海運ノ發達ヲ促シテ止マズ若シ之ヲ自然ノ發達ニ一任セシナバ恐クハ多ク他ニ讓ラザリシナラン今ニシテ我が海國タル點ヨリ觀察スレバ海運ハ頗ル幼稚タルヲ免レズ其對外ノ位置ヨリ謂ヘバ日本ハ亞細亞、亞米利加兩洲ノ中間ニ位シ東洋局面ノ要所ハ多ク日本ノ領地ニ屬シ(海)北ハ浦鹽斯德ノ通路ヨリ南朝鮮一帯ノ海岸ヲ擁シテ西南支那沿岸、香港ニ及ビ極南南洋諸島ノ航運ハ須ラク我が握掌スベキ所ノ航權ナリ然ルニ今日ノ所ニテハ僅ニ朝鮮近海及浦鹽斯德間ト支那北岸トノ航路ヲ有スルニ過ギズ其他ノ航權ハ總テ懸軍萬里ナル西歐諸國ノ握ル所ニシテ英、佛、阿會社、佛國郵船會社等太平洋ニ印度洋ニ跋扈陸梁スルニアラズヤ明治十六七年ノ頃ニハ彼ノ支那ノ招商局サヘモ我航權ヲ壓倒センコトヲ試ミ數艘ノ郵船ヲ送り來リテ神戸ニ定期航海ヲ始メ將ニ我内國ノ航權ヲモ蹂躪セントシタリ我海國人タルモ甘心セザルベカラザル所ナリ

## 第六編

### 支業物産

#### 第三十四章

##### 國土ト支業物産トノ關係

人。民。ノ。生。業。ハ。概。テ。地。勢。地。質。氣。候。等。ノ。地。理。的。事。情。ニ。ヨ。リ。テ。定。マ。ル。ト。多。シ。凡。ソ。人。生。ハ。衣。食。住。ヲ。需。ム。ル。ヨ。リ。急。ナ。ル。ハ。ナ。シ。而。シ。テ。其。需。用。ノ。原。料。ハ。皆。悉。ク。各。自。ヲ。圍。繞。ス。ル。天。産。物。ハ。豊。富。ナ。ル。物。料。ニ。仰。ガ。ザ。ル。ヲ。得。ズ。是。ニ。於。テ。職。業。ナ。ル。モ。ノ。自。ラ。定。マ。ル。ニ。至。ル。ベ。シ。例。ヘ。バ。其。地。森。林。多。ク。良。材。ニ。富。ム。所。ニ。アル。住。民。ノ。職。業。ハ。先。ヅ。林。業。ニ。傾。キ。傍。ヲ。狩。獵。ニ。従。事。ス。ル。獵。夫。多。キ。ガ。如。シ。

是。ヲ。以。テ。廣。漠。無。邊。ニ。シ。テ。一。望。際。ナ。キ。ガ。如。キ。曠。野。ニ。住。ス。ル。モ。ノ。ハ。衣。食。住。ニ。供。用。ス。ベ。キ。天。産。物。ノ。欠。乏。ス。ル。ガ。爲。メ。其。居。所。一。定。セ。ズ。泉。水。秫。草。ヲ。逐。テ。移。轉。ス。所。謂。遊。牧。人。民。ナ。リ。斯。ノ。如。キ。人。民。ハ。土。地。ト。營。作。ト。相。適。合。セ。ザ。ル。ヲ。以。テ。多。ク。一。地。ニ。駐。住。ス。ル。コ。ト。能。ハ。ズ。又。一。定。ノ。職。業。ヲ。モ。有。セ。ズ。其。生。活。甚。ダ。劣。等。ナ。リ。稀。ニ。泉。地。ニ。定。住。ス。ル。モ。ノ。ハ。土。地。ニ。就。テ。利。用。ス。ル。ノ。職。業。ヲ。見。ル。ト。ア。リ。

森林界ノ近傍氣候和順ニシテ土地肥沃ナル地方ニアリテハ人々食品ヲ地上ニ求メ土地ヲ耕シ植物ヲ播種スルノ業ヲ務メ愛ニ土着ノ人民生シ所謂農業初メテ起ルベシ抑農産物ハ最モ保存ニ便ナルガ故ニ餘裕ヲ貯藏スルノ法起リ貯蓄ノ念從テ生ズルニ至ル斯クシテ生計漸ク進ミ既ニ衣食住ヲ支フルニ至レバ更ニ他ノ便益ナル物品ノ需用ヲ生シ其需用ニ應ズルガ爲メ供給者即チ工業起リ又是レト同時ニ各自使用ノ餘分ヲ以テ他人ノ餘分ト交換スル交易商業起リ遂ニ大小ノ村落及ビ市街ヲナスニ至ルモノナリ

文明ト云ヒ開化ト稱スルモ元ト是レ天然ノ富ヲ利用シテ其緒ニ就キシモノナレバ文明開化ノ發達スベキ地ニ要スル地理的事情ハ氣候固ヨリ温和ニシテ其自然ノ地形ハ海灣ニ濱ル山脈平原森林河流湖沼及ビ地質等ハ可成種々ナル區域ニ分カレタル地勢ナラザルベカラズ然ルモ風土氣候モ亦自ラ區々ニシテ最モ其住民ノ種々ナル事業ヲ企テ又ハ種々ノ職業ヲ操ルニ適シ各地ニ生業産物ノ配布ヲ生ズベシ則チ礦物豊ナル地ニ住ムモノハ採礦ニ從事スル坑業者多ク濱海ノ民ハ海産ノ採集ニ從事シ沖積土ノ平地ニ住ム者ハ農耕ニ從事ス其他河系湖沼近傍ノ人ハ運輸漁業ニ從事スルガ如ク分業次第ニ行ハルノ際人智モ漸ク開發シ技藝モ漸ク進步


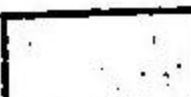

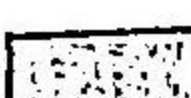

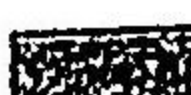

レ且ツ他ニ交易ヲ試ミル者等起リ世運駸々トシテ發達シ往々世界ノ權勢ヲ掌握スルニ至ルモノアリ

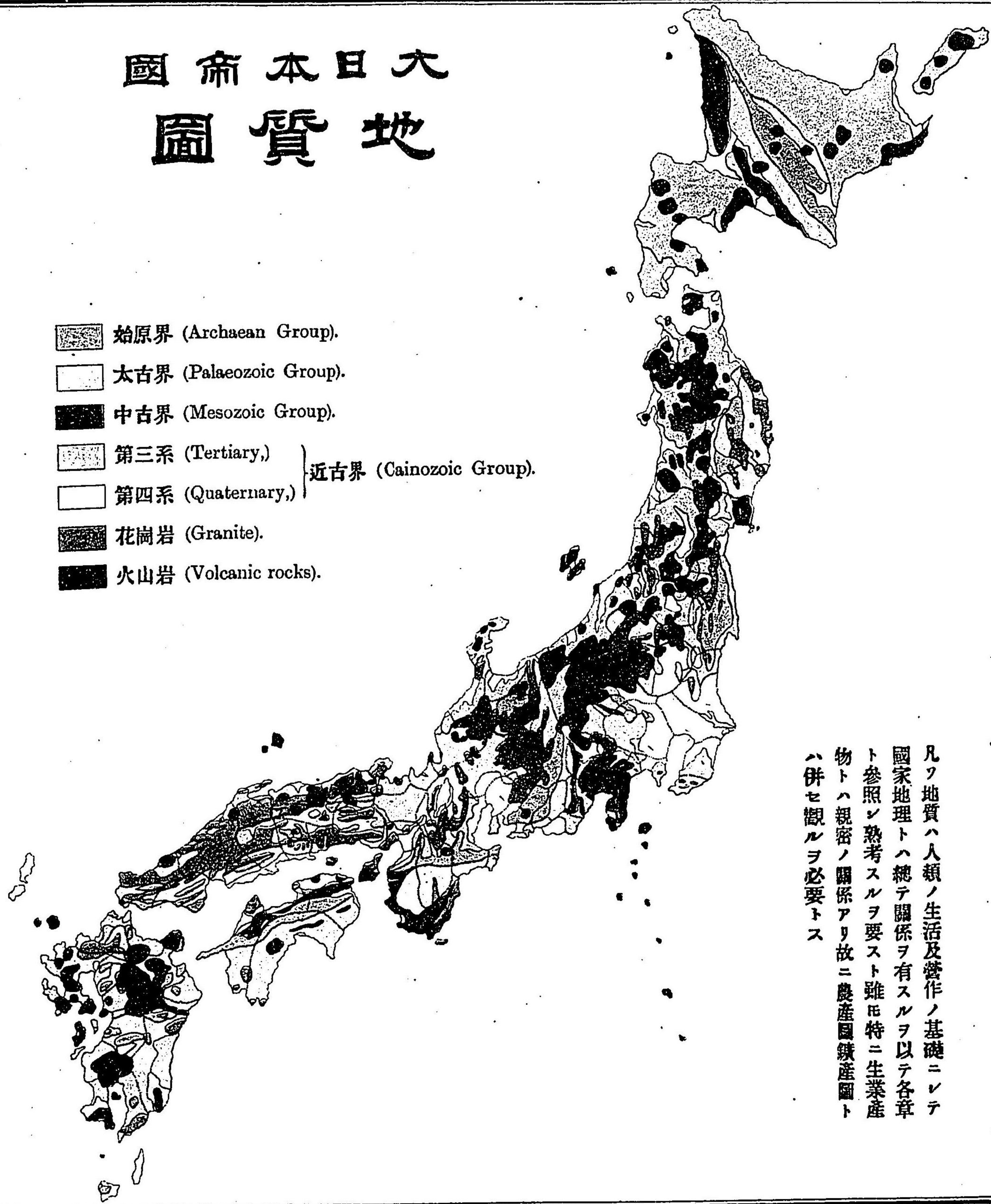
我邦ハ山岳多シト雖モ地味肥沃氣候モ亦穀禾ノ栽培ニ適スルヲ以テ古ヨリ農業ノ盛ヲ以テ誇ル國ナリ蓋シ蒙昧ノ世人智未ダ開ケザルニ當リテハ現今ノ北海道土人ノ如ク濱海ノ民ハ魚介ヲ採リ山野ノ民ハ野獸ヲ獵ルヲ以テ職業トセンナリ其後農耕漸ク發達シ孝德帝ノ朝ニハ田園ヲ男女ニ班チ禾穀ヲ作ラシムルノ事アリシト云フ又工業ハ漢唐ノ交通ニヨリテ頗ル發達シ加フルニ我邦到處ハ地形風光ハ天然ハ美ニシテ其景畫圖ハ如ク美術思想ハ發達ヲ促シタルヲ以テ東洋ハ美術國ハ稱サヘ受ケルニ至リ獨リ商業ハ我邦地形ノ通商貿易ノ發達進步ニ適スルニモ拘ラズ世々ノ政治家ハ其政略ノ爲メ交通ヲ塞絶シ外交ヲ嚴禁セントニヨリ國民ハ經濟思想ニ乏シク從テ商業ノ一點ハ甚ダ幼稚ナリ

以上ノ如ク人民ノ職業ハ國土ノ形勢氣候ノ如何ニヨリテ差別ヲ生ズルモノナレバ地文地形ノ如何ニ應ジテ人民生業ノ種類ハ甚ダ多シ今人類ノ生業ヲ分ツテ左ノ如

(一) 農業 トハ土地ヲ耕シ穀禾ヲ栽培シ或ハ家畜及家禽ヲ飼養シ又ハ蠶桑養魚

# 大日本帝國 地質圖

-  始原界 (Archaean Group).
-  太古界 (Palaeozoic Group).
-  中古界 (Mesozoic Group).
-  第三系 (Tertiary,)
-  第四系 (Quaternary,)
- } 近古界 (Cainozoic Group).
-  花崗岩 (Granite).
-  火山岩 (Volcanic rocks).



凡ク地質ハ人類ノ生活及營作ノ基礎ニシテ  
國家地理トハ總テ關係ヲ有スルヲ以テ各章  
ト參照シ熟考スルヲ要スト雖モ特ニ生業產  
物トハ親密ノ關係アリ故ニ農產圖鑛產圖ト  
ハ併セ觀ルヲ必要トス

等ヲ云フ

(二) 工業 トハ衣食住ニ要スル家屋及器具ヲ製造シ又ハ美術及裝飾ニ關スル物  
品ノ製作ヲ云フ

(三) 商業 トハ其一内國ノ需用者ト供給者トノ間ニ立テテ物品ノ買賣運轉ヲ司  
ドルモノト其一ハ外國貿易ニ從事シ或ハ銀行會社ノ業務ヲ操ルモノトアリ

(四) 漁業 トハ河海ノ魚介ヲ捕獲シ或ハ藻苔ノ採集製鹽ノ業ヲ云フ

(五) 鑛業 トハ金屬寶石ノ採掘石灰石材其他礦物採掘ノ業ヲ云フ

(六) 山林業 トハ木材ノ伐採樹木ノ栽培木炭製造ノ業ヲ云フ

(七) 獵業 トハ鳥獸捕獲ノ業ヲ云フ

(八) 運輸業 トハ貨物ノ運送河海ノ航行ニ從事スル業務ヲ云フ

(九) 雜業 トハ學術意匠政事教法等ニ從事スル業務ヲ云フ

前掲諸業ノ内我邦ニハ或ハ操業者稀ナルノ職業アリ或ハ運輸及雜業ノ如ク既ニ他  
ノ章ニ於テ特ニ記述セシモノアリ故ニ直接業務即チ農業工業商業漁業及鑛業等ニ  
就キ逐章記述スベシ

凡テ人類ノ業務及產物ハ其土地ヲ構造スル地質ニ關スルヲ抄カラズ特ニ農業鑛業



林業及其產出物ノ如キハ直接ニ地質ト關係ス故ニ爰ニ大日本地質圖ヲ附シタレバ  
以下ノ各章トハ併セテ觀ルベシ

### 第三十五章

#### 農業及農產物

- (一) 土地
- (二) 農業者
- (三) 地產物  
米 雜麥  
茶 雜產
- (四) 蠶業
- (五) 畜產

(一) 土地  
土地ハ國家ヲ組成スルニ大原ノ一ニシテ其廣狹瘠拓蕪等ハ直ニ國力ニ關ス・抑  
我邦封建ノ世ニアリテハ土地ハ諸侯ノ私有物ニシテ之ヲ耕作スル農民ハ悉ク借地  
小作人ノ姿ニシテ所有ノ權ナカリシ・何トナレバ農民ハ公然土地ヲ賣買スルヲ得

又諸侯ハ何時ニテモ之ヲ沒收スルノ權アリタルナリ然ルニ維新ノ後ハ地券ヲ頒ツテ人民ノ所有權ヲ證認シタルハ爰ニ始メテ眞ノ民有地ナルモノヲ生シ官有地ト別ツニ至レリ

官有地ハ分テ四種トス第一種ハ皇宮地及附屬地・御陵墓地・神社地第二種皇族賜邸地・官用地第三種山・川・林・野・堤・湖・道路・屋敷・田畑・鐵道線路・電信柱敷地・燈臺地・名區・公園・堂宇・墳墓地ノ民有ナラザル者第四種民有外ノ寺院・學校・病院等ニシテ明治廿三年末ニ於テ合計一千九百十四萬四千二百七十二町歩ナリ・民有地ハ分テ二種トス第一種田畑・宅地・鹽田・山林・原野・鑛泉・池沼等及私有又ハ共有ノ學校・病院・牧場・秣場・社寺等第二種ハ鄉村共有ノ社地・墳墓・池溝・道路・敷地・用水・惡水路・井水地等ノ官有ニアラザルモノヲ云ヒ此合計一千三百八十萬五千五百四十四町歩ナリトス

使用スル土地・即チ田地・畑地ノ耕地及宅地・山林・雜種地ヲ合スル町歩ハ左ノ如ク

- 明治十四年 一一,七五一,三三三町五
- 明治十五年 一一,七〇八,五四七町八

明治十六年	一一,三三三,三六三町〇
明治十七年	一一,六五八,六一八町一
明治十八年	一一,〇七八,〇五二町九
明治十九年	一一,一九七,二三四町二
明治二十年	一一,三三八四,七九七町二
明治二十一年	一一,八二〇,七三二町〇
明治二十二年	一一,七九四,五〇六町〇
明治二十三年	一一,三八一,五九三町八
特ニ明治二十三年ノ耕地内譯ヲ示セバ	
田	二,七五五,八六三町五
畑	二,二八七,八九六町〇
宅地	三,八一,二六町三
鹽田	六,五二九町八
山林	七,三〇六,六三九町三
原野	一,〇五八,九八三町〇
雜種地	一八,八九八町九

明治二十三年末ノ使用土地面積ヲ方里トスレバ八千八百八十三方里六分ニシテ全國面積ノ三割五分八厘ナリトス。然ルニ北海道ハ未開拓地甚ダ廣大ニシテ使用土

地ハ厩ニ全面積ノ一厘二毛六才ニ過ギズシテ平均ヲ浸蝕スルコト少カラズ故ニ北海道ヲ除ケバ即チ使用土地ハ實ニ四割七分ニ當リ不生産的・不毛地ハ全面積ノ過半(五割三分)ヲ占メタリ其内田地・畑地ノ耕作地ハ厩ニ五百四萬三千七百六十町歩ニシテ全面積(北道除ク)ノ一割七分ニ過ギズ・而シテ耕地ノ面積ハ年々増加スルヲ見レドモ其増加ノ比ハ多シト謂フベカラズ明治十四年ヨリ同二十三年ニ至ル十年間ニ二百六萬四千六百四町三反ヲ増センノミニシテ平均一年ノ増加ハ二十萬六千四百六十町トス今日ハ人口増殖ハ速カナルニ比スレハ稍隔靴ハ憾ナキ能ハズ・將々之ヲ以テ我邦ハ農ヲ以テ立國ノ基本トスル國トハ言ヒ難キ所アラシカ・今千八百八十七年ニ於ケル歐洲ノ重ナル國々ノ使用土地ノ統計ヲ擧グルンバ

國名	不生産地	森林	牧場及秣場	耕地	葡萄園
白耳義	一八六	一五一	一四四	五三九	—
獨乙	五三	二五七	二〇三	四三四	〇三
佛蘭西	一五七	一五八	一三九	五〇二	四四
英國	三五〇	三六	三三五	二三九	〇
伊太利	一三一	一五七	二五〇	三九九	六三

和蘭	三三五	六五	一三七	二七三	—
塊地利	六一	三二六	一三八	三六七	〇八
葡萄牙	四八二	八〇	一六七	二四九	二二
西班牙	二〇四	二〇八	一九七	三五四	三七
露西亞	二八三	三八〇	一一一	二二六	?
瑞典	五一八	三七八	四二	六二	—
那威	七一一	二四〇	二八	二一	—
瑞西	二八四	一八七	三五八	一六四	〇七

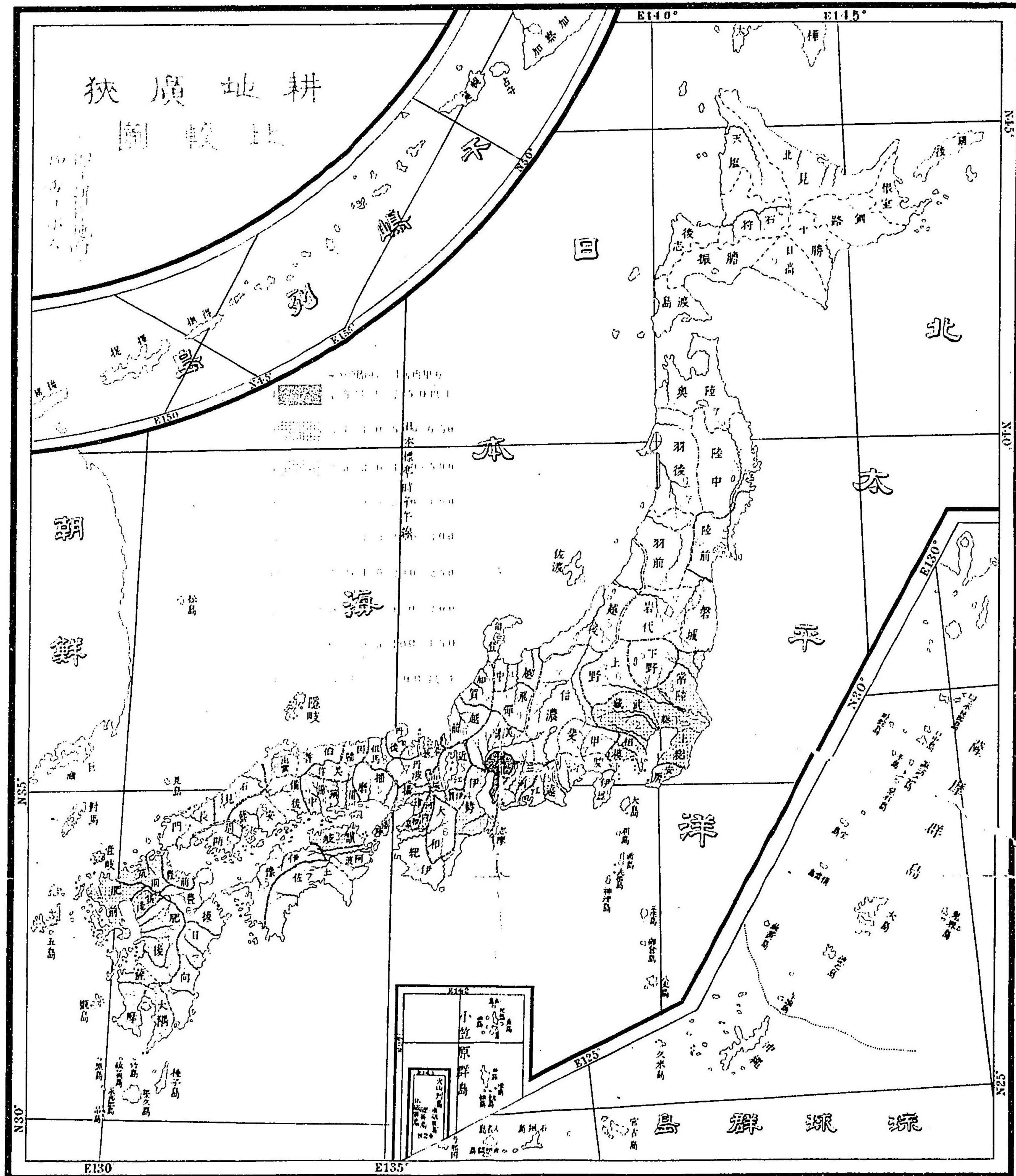
以上ノ内只瑞典那威ヲ除クノ外ハ使用ノ土地割合ニ廣シ日本ノ不生産地・五割三分ハ稍瑞典ニ比スベク其他農耕ノ進歩セル國ハ不毛地ノ三割以上ニ超ルモノ少ク殊ニ獨乙塊地利ノ如キハ不毛地最モ少ク何レモ一割以下ナリ又耕地ノ面積モ皆ナ廣大ニシテ日本ノ耕地・一割七分ニ過ルノ如キモノハ少シ・瑞典ノ如キ國中到處ニ山岳丘陵波濤ノ如キ處スラ尙ホ耕地ノ面積ハ我邦ト殆ト同度ナリ殊ニ白耳義佛蘭西ノ如キハ其耕地、全國面積ノ過半ヲ占メタリ之ヲ以テ我邦ハ世界ニ對シ農業隆盛ノ國トハ云フヲ得ザルナリ不生産地多キハ土地ノ生産力未ダ餘裕アルヲ示スモ

ハニシテ開拓新墾ヲ務メバ尙ホ農産物ノ收穫ヲ増加スルコトヲ得ン  
 水田ハ本邦人ノ常食トスル稻米ヲ生ズル地ナルヲ以テ最モ水田ヲ貴重セリ。而レ  
 テ明治十八年ニハ二百六十四萬九百八十六町二反歩ニシテ耕地全面積ノ五割八歩  
 五厘即チ全國面積ノ九歩ヲ占メタリ畑ハ同年ニ於テ百八十八萬五千九百八十八反  
 歩ニシテ耕地全面積ノ四割一步五厘ニシテ全國面積ノ六歩五厘ナリ。ふるさか氏  
 ノ説ニ日本人ハ水田ヲ貴重スレバ其純益ニ至テハ畑ヲ以テ却テ大ナリトス畑ニハ  
 單ニ一年ヲ以テ枯死スル作物ヲ種植スルノミニ非ズ數年繁殖スベキ樹木桑畑或ハ  
 菓樹等ヲ種植スルヲ得ベク茶桑ノ如キ利益多キ植物モ畑地ニシテ即チ桑畑ハ十一  
 萬百七十一萬百七十四町四反茶園モ四萬二千三十二町八反ニ達セリ且ツ水田トナ  
 スベキ灌溉便利ノ地ハ業已ニ開キ盡シテ向後増加ノ見込ナキノミナラズ經濟上不  
 利ナリ之ニ反シテ畑地ヲ開墾擴張スルハ尙ホ爲レ得ベキ所ニシテ農業上亦洵ニ希  
 望スベキモノナリト云ヘリ  
 耕地面積ノ廣狹如何ニ就テ之ヲ見レバ耕地田畑トモ最モ開ケタルハ尾張ニシテ殆  
 ド全面積ノ五割ニ當リ歐洲ノ最モ進歩セル農業國ニ比スベシ其最モ開ケザル所ハ  
 飛騨ニシテ厘ニ三分二厘ニ過ギズ又田地ノ最モ開ケタルハ河内ニシテ二割二分五

厘ヲ占メ最モ劣ルハ對馬ノ八厘トス而シテ畑地ハ武藏最モ廣クシテ二割四分五厘  
 ヲ有シ但馬ハ最モ狹クシテ一分七厘トス凡テ水田稻作ニ最モ廣ク供用セララル、各  
 地ハ孰レモ著名ノ各平原地ニシテ關東平原畿内平原濃尾平原北越及越中平原仙臺  
 平原筑紫平原等ハ水田稻作ノ區域最モ廣濶ナル所ナリトス

(二) 農業者

我國農業者ノ數ハ精細ニ之ヲ調査スルコト甚ダ難シ何トナレバ農業專務ノ者ト農  
 業ノ傍ラ他業ヲ兼ヌル者ト又他業ヲ操リテ農業ヲ兼ヌルモノ甚ダ錯雜スレバナリ。  
 然レモ明治十八年ニ於ケル調査ニテハ人口總數ハ三千七百八十六萬三千九百八十  
 七人ノ中農業者ハ一千九百四十一萬三千五百四十四人ナリト云フ此數ハ農事ヲ兼  
 業スルモノ二人ヲ以テ農專業者一人ト計算シタルモノニシテ最モ當ヲ得タル計算  
 トス此數ニヨレバ我國農業者ハ總人口ノ五割一步二厘五毛ヲ占ムルモノニシテ即  
 チ農業者ハ人口ノ過半數ヲ占メ其他萬般ノ業務ニ從事スルモノヲ合セテ農業者ノ  
 數ニ及バザルモノト知ルベシ又農家ノ數ハ右農業者ノ數ヲ我國ノ一家族ノ平均四  
 人三三ヲ以テ除シタル數四百四十八萬三千五百戶ハ農家ト看テ大差ナカラシ  
 今右ノ農業者數ヲ以テ同年ニ於ケル耕地反別總數ニ配當スルニ一人分頭耕地ハ二



反二畝、一歩四才ニシテ内田地一反三畝五歩四才畑地九畝六歩ノ平均トス之ヲ獨  
 乙農業者ノ分頭反別一町〇反一畝廿一歩八才ニ比スレバ殆ト五分ノ一ニ當レリト  
 云フ

農業者分頭反別數ノ多キハ重モニ人口寡クシテ土地廣漠ノ地方ナリトス全國中最  
 モ分頭反別平均ノ多キハ大隅ニシテ一農民ニシテ平均八反五畝餘ヲ有シ次ハ加賀  
 ニシテ六反六畝餘・東北地方ノ如キハ概シテ反別多クシテ三反五畝乃至六反五畝  
 ヲ有ス・其他ハ阿波ノ六反・能登五反二畝餘・日向ノ四反四畝餘及ヒ武藏・備前  
 ・對馬・筑前等ノ三反五畝乃至四反二畝ヲ多シトス又人口稠密ニシテ農耕周到ナ  
 ル地方ハ分頭反別概シテ狭小ニシテ尾張・越中・越後・河内・肥後・美濃・山城・安藝等ノ如キハ  
 一農民ニ對スル耕地ハ一反乃至一反九畝餘ニ過ギズ

民有地々價ハ明治二十三年末ニ於テ總計十五億三千三百十七萬七百七十圓ニシテ内  
 田地ノ地價總計ハ十一億〇七百八十一萬千七百八十八圓ニシテ平均一反ハ地價四  
 十四二十五錢四厘トス地價ノ貴キハ土地肥沃人口繁クシテ且ツ市場接近ノ土地ト  
 ス・即チ大阪府下ハ平均一反ニ付六十五圓十三錢五厘ニシテ特ニ河内ノ如キハ八  
 十三圓餘ヲ平均トス其他東京府・滋賀縣ハ五十四圓餘ニシテ關東平野ヨリ東海道畿

内平野山陽道等ハ地價著シク貴シ又土地僻遠ノ地ニアリテモ特種ノ殖産ニ適スル  
 群馬、福島、長野ノ比較上、地價ノ貴キハ其蠶業ニ適スル地ナルヲ以テナリ。之ニ反シ  
 テ土地瘠薄、人口寡ク僻在ノ地ニアリテハ地價皆ナ低廉ナリ即チ東北地方ノ田地一  
 反平均價ハ二十七圓五十八錢五厘ニシテ宮城二十二圓餘・秋田二十三圓餘・青森  
 二十三圓九十五錢等ハ中ニ最モ低シ。九州ノ田地平均價ハ三十八圓四錢六厘ニシ  
 テ殊ニ宮崎、鹿児島ハ二十八圓八十錢ナリトス  
 畑地ノ地價ハ田地トハ大ニ差違アリ我國ニテハ好テ田地ヲ耕作スルヲ以テ畑地ハ  
 著シク低廉ナリ民有畑地ノ全國總地價ハ二億五千三百二十七圓ニシテ其  
 平均地價ハ一反ニ付十一圓十一錢八厘ナリ。而シテ其價格ノ貴廉ハ等シク田地ト理  
 由ヲ同フス即チ畑地ノ貴キハ大坂府ニシテ一反三十五圓八十七錢ヲ平均トス次デ  
 滋賀ノ二十九圓四十二錢ニシテ平均二十圓以上ハ三重、奈良、和歌山、廣島、愛知ノ各縣  
 ナリトス。最モ低廉ナルハ高知ニシテ厘ニ三圓十五錢六厘山口ノ三圓六十一錢六  
 厘等トシ東北地方ハ平均八圓六十三錢四厘・四國ハ八圓五十錢九州ハ七圓八十錢  
 ナリ

(三) 農産物

農業及農産物

我邦農産物ノ重要ナル品類ヲ舉グレバ左ノ如シ

- 第一米
- 第二麥
- 第三繭
- 第四生糸
- 第五茶
- 第六藍
- 第七煙草
- 第八綿
- 第九麻

米

米ハ本邦人ノ常食トスル所ニシテ其豊凶ハ直ニ國民ノ飽饑ニ關スルハ勿論其一般經濟ニ關涉スルコト尠カラズ古來米穀ヲ以テ經濟ノ主謀物價ノ標準トセシニヨリテモ關係ノ大ナルヲ知ルベシ米ノ生産ハ世界各地ニ生ズルニアラズ其生産地ハ概シテ亞細亞諸國特ニ氣候風地ニ限レリ夫レ氣候風ハ恰モ五六月ノ苗代時期ニ流行スル多濕風ニシテ之ガ爲ニ乾田ヲ變シテ水田トナシ稻禾ヲ移植スルニ適シ爾來雨濕ヲ送り來テ枯死セザラシムル米産地方ノ風ナリ。是ヲ以テ氣候風各地即チ印度諸邦ハ世界第一ノ産地ニシテ外國米ト稱シテ我國ニ輸入スルモノ是ナリ而シテ日本ハ實ニ第二ノ産地ナリ故ニ米ハ自然的事情ニヨリテ定マル所ノ特産品ト稱スベキナリ

我ガ邦土最モ能ク米穀ニ適スルヲ以テ太古ノ當初ヨリ農耕既ニ開ケ瑞穂ノ國ト稱

シ世々ノ皇室農耕ヲ獎勵シ玉ヒタルヲ以テ國人ハ自然ニ田耕ヲ業トスルモノト定リ民ナラズヲたみト訓スルモ元上田部即チたぶトテ田耕者ノ團體ヲ稱セシヨリ轉シテ一般國人ヲ指ス語トナレリトゾ斯ノ如ク田耕ハ遠ク古代ニ發達シ米ハ人民ノ命脈ノ關スル所ナリシヲ以テ田地米作等ニ係ル調査ノ如キモ其時々ニ行ハレテ米作沿革ノ一斑ヲモ視ハル、ナリ。今農商務省農務統計書ニ依テ米作沿革ヲ示セバ左ノ如シ

調査年名	今ヲ距ル	田積	收穫高
延長	(一〇六九年)	一〇,三三,三五六	二,一三,四,五一七
寬正	(四三二年)	一,〇九,七二〇	二,三,一一七,四七七
天正	(三一九年)	一,三二,四四〇	一,八,四七〇,一七四
文祿	(三〇九年)	一,三二,二四八	一,八,三五七,四七七
慶安	(二四四年)	一,六〇,三,九三四	二,二,四五五,〇五九
元祿	(二〇四年)	一,八四,一,一九二	二,五,七八六,六九五
天明	(六二年)	二,一七,三,九四三	三,〇,四三五,二〇六
明治		二,七四七,七九七	四,三,〇三七,八〇九

右表ニ就テ之ヲ見レバ千餘年前ニ於テ既ニ田地ハ百萬餘町歩ニ達シ而レテ收穫モ亦二千萬餘石ヲ得タリ之ヲ明治ノ今日ニ比スレバ共ニ半數ニ及バズト雖也之ヲ其當時ハ人口凡ソ一千萬内外ハ割合ヨリ見レバ却テ進歩セリト稱シテ可ナラン乎又元祿年間ノ調査ニ係ル米五十萬石以上ヲ産スル國々ハ左ノ如クナリ

陸奥武藏出羽常陸近江越後越前下野美濃伊勢信濃越中筑前上野肥前播磨下總肥後尾張大和

以上ノ國々ナリ其中陸奥ハ古ノ所謂奥州ニシテ其區域甚ダ廣カリシヲ以テ百九十萬石ヲ産シ乃至大和ノ産額五十萬〇四百石ノ間ニアリ

明治年間ニ至テハ文明事物ノ進歩ト共ニ農耕殖産ノ事業モ漸次ニ進歩シテ田地ノ地積及ヒ收穫高ヲ増加シツ、アルハ左ノ累年田地作付反別、收穫高及一反歩ノ收穫高ヲ見テ知ルベシ

年次	作付反別	收穫石高	一反收穫高
明治十一年	二、四八九、七六五、二	二五、二八二、五四〇	一〇、二
明治十二年	二、五四一、六六一、三	三三、四一八、九二四	一、二八
明治十三年	二、五六二、四六〇、四	三一、二五九、三二六	一、三三

明治十四年	二、五六四、一二五、九	三九、九七一、三八三	一、一七
明治十五年	二、五八〇、二五五、四	三〇、六九二、三二七	一、一九
明治十六年	二、五七九、五四三、九	三〇、六七一、四九二	一、一九
明治十七年	二、六〇五、七二〇、八	二六、三四九、八八三	一、〇一
明治十八年	二、六一一、九八七、〇	三四、一五八、一六九	一、三一
明治十九年	二、六一八、〇一五、一	三七、一九一、四二四	一、四二
明治二十年	二、六三七、〇六九、三	三九、九九九、一九九	一、五二
明治二十一年	二、六八五、九八六、九	三八、六四五、五八三	一、四四
明治二十二年	二、七二六、五三八、九	三三、〇〇七、五六六	一、二一
明治二十三年	二、七四七、七九七、四	四三、〇三七、八〇九	一、五七
平均		三四、八九七、〇二七	一、二七

右表ニヨリ之ヲ見レバ明治十一年ヨリ全二十三年ニ至ルマテ田地耕作事業ハ漸次歩ヲ追フテ上進セルヲ見ル、即チ作付反別・明治十一年ニ於テ二百四十萬町臺ナリ、ノモノ十二年ニハ二百五十萬臺トナリ十七年ニハ二百六十萬臺ニ増加シ、二十二年ニハ二百七十萬臺ニ増加セリ、此十二年間ヲ通シテ二十五萬八千三十二町一反歩ヲ



増加セリ故ニ毎年平均二萬千五百二町六反ハ率ヲ以テ増加セリ之ヲ古來ノ進步則  
延長年間ヨリ明治ニ至ル凡ソ一千五十年間ニ百二十七萬町即チ一年平均千二百十  
町ノ率ヲ以テ増加セルニ比スレハ十七倍餘ノ進步ナリトス

收穫石高ノ増減ハ培養ノ良否ヨリモ寧ロ其歲氣候ノ順否ニヨリテ豊凶ヲ致スコト  
大ナルモノナレバ直ニ論斷スベカラズト雖モ要スルニ田積ノ増加ト伴フテ收穫高  
ハ増加セリ・殊ニ明治二十三年ハ豊稔ナリシヲ以テ明治十一年ニ比スレバ千七百  
七十五萬石ノ増加ナリ又培養法耕作法除害蟲ノ進步ニ伴ヒ一反歩ノ收穫高モ一石  
〇二升ヨリ一石五斗七升ニ増加セリ

明治二十三年ニ於テ一府縣下ニシテ最モ産額ノ多キハ新潟縣ニシテ二百七十四萬  
石ヲ産シ其百萬石以上ヲ産スル各縣ハ左ノ如シ

- 兵庫(百八十萬) 福岡(百七十萬) 千葉(百四十萬) 愛知(百三十五萬) 山口(百三十萬) 富山(山形
- 熊本(三重) 百二十萬 秋田 岡山 福島 滋賀(百十萬) 茨城 長野 大坂 靜岡 岐阜 石川 宮城 廣島
- 佐賀(百萬) 等ナリトス

各府縣下ニ於ケル産額ノ多少ノミニテハ未ダ以テ米産地ノ得失ヲ判スベカラズ何  
トナレバ府縣ノ區畫ハ大小ノ別アリ例ヘバ大縣ハ米稻ニ至適ノ地ニ非ズトモ區域

ノ廣キガ爲メ總産額ハ多量ナルガ如シ・抑米産ノ適否ハ土地ノ高低如何ニ關係ス  
ルコト密ナリ即チ低平ハ沖積層地ハ最モ米作ニ適ハ・高原ハ火成岩地ハ最モ不適  
當ナリ此故ニ一里方里内ニ對スル米産ノ多キハ濃尾沖積平原・畿内沖積平地・關  
東沖積平地・筑紫沖積平原・内海岸沖積平原等ニアリ特ニ濃尾平原ハ全國第一ハ  
米産地ニシテ一方里内ニ七千石以上ノ平均ヲ以テ産シ畿内平原ハ五千乃至六千石  
ノ平均ヲ以テ産シ關東筑紫内海岸ノ各平地ハ三千乃至五千石ノ平均ヲ以テ産出セ  
リ之ニ反シテ中央火山高原地・九州南部火山地・美濃飛驒高原等ハ産額著シク寡  
シ中央火山高原各地ハ厘ニ五百石乃至二千石ニシテ九州南部火山地ハ五百石乃至  
千石ニ過キズ美濃飛驒高原ノ如キハ三百乃至千石ヲ産スルニ過ギザルナリ

### 米作經濟

我國米ノ産額ハ明治十一年ヨリ同二十三年ニ至ル十三年間ニ於ケル平均一年ノ收  
獲高三千四百八十九萬〇二十七石ナリ之ヲ四千萬ノ人口ニ配當スレバ一人ニ付八  
斗六升ニ合強トス今之ヲ我米食人種ガ常食トシテ幾何量ヲ費スカヲ見ルニ凡ソ人  
口百分中米ヲ常食トスルモノヲ五十一分(神苑會ノ算定ニ據ル)餘トスレバ二千四十  
萬人ナリ此割合ニテ食料ニ充ツベキ米ノ數量ヲ男女老幼ニ平均シテ一人ニ付三合

食トスレバ、二千二百三十四萬石ヲ消費ス、之ニ酒類菓子其他ニ消費スル所ヲ除ケバ毎年一千二百萬石ハ餘裕ヲ生ズベシ此等ハ或ハ海外輸出量トナスベキモノナリ

開國日淺キ我邦ニアリテハ農工商業ノ規模歐米ニ及バザルハ是非モナキ次第ナレト獨リ米産ハ以上ノ如ク地理的好位置ヲ占ムルヲ以テ世界ノ推ス所ナリ從來米ノ海外販路ハ廣カラズ彼レハ肉食國ナレバ米穀ノ必要ヲ感ゼズ屢ニ織物洗濯等ノ糊ニ供スルニ過ギザリシガ近來米ノ旨味澹泊ニシテ滋養多量ナルヲ贊シ漸次需用ノ度ヲ増加シ中ニモ埃地利ノ如キハ千八百八十一年始テ米ヲ輸出セシ以來頓ニ需用ヲ増シ其他ノ歐米各國モ漸次ニ米ヲ以テ食料トナスノ傾向ヲ生ジ殊ニ我邦ノ産米ハ最モ好評ヲ博シ輸出額モ年一年ニ増加スルヲ以テ政治家貿易家ノ注目スル所トナレリ殊ニ明治廿二年ハ茶ノ輸出額ニ超過シタリ年々ノ輸出額ヲ舉グレバ左ノ如ク

明治十九年	數量	元價
全	一、三八七、四三九	三、三〇〇、八六三
二十年	八九三、二五三	二、二五五、一九七

全	二十一年	三、三三三、四二七	七、四二二、三三三
全	二十二年	三、二七二、四九九	七、四三四、九四一
全	二十三年	三、八五〇、二七	一、三三三、五一一

一担ハ凡ツ我百斤トス

表ニ於テ示スガ如ク概シテ米ノ輸出ハ増加ノ傾向アリ元來産米地ハ人力ヨリモ寧ロ地理的事狀ニヨリテ定マル處多ク世界中ニアリテモ産米地ハ重ニ氣候風地ニ限レリ又我國内ニ於テモ東北寒地ヨリハ西南暖地ニ適スルモノニシテ先ヅ産米區域ハ狭少ナリト云ハザルベカラズ然リ而シテ我島國ノ如キ狭小ノ地ニアリテハ盡ク産米地トナスモ其産額知ルベシ唯人力ヲ以テ産額ヲ左右スベキハ稻耕ノ法ヲ改良シテ一反歩ノ收穫ヲ多カラシムル一法アルノミ然レモ是レ又土地ノ生産力ニハ自ラ限アルモノナレバ妄リニ多量ヲ得ルハ殆ンド望ムベカラザルコトタリ而シテ我國民ハ米食人ナレバ是非之ヲ消費セザルヲ得ザルナリ然ルニ近來ノ如ク海外ニモ次第ニ米ノ需用ヲ増シ輸出額頻リニ増加セバ其結果如何ナルベキヤ彼ノ毎年豊稔ニモ均ラズ米價頻リニ騰貴シテ却テ海外ヨリハ多量ノ輸入ヲ仰ギ明治二十三年ノ如キハ米ノ輸入ハ元價一千二百三十萬圓ノ巨額ニ達スルガ如キ奇觀アリ前途

我國米ノ經濟ハ如何ナルベキヤ須テク一考ヲ要スベキ所ナラシカ

麥

麥ハ米ニ次テ我國農産ノ重要ナル品ニシテ麥食者ハ我邦人口ノ百分中二十七分神苑會ノ調査ニ據ルニ即チ凡一千五百萬人ヲ養フニテモ知ルヘシ明治二十三年ニ於ケル麥作反別ハ凡百七十萬町歩ニシテ其産額ハ凡一千七十萬石アリ麥産地ハ分布モ亦沖積層ト相關シ關東畿内濃尾筑紫等ノ諸沖積的平野ハ著シク麥作ノ盛ナル所トス中ニモ關東平原ノ武藏濃尾平原ノ尾張及讃岐ノ如キハ全國第一ニシテ一方里内ニ三千石以上ノ割合ヲ以テ産シ次テ畿内平原ノ和泉筑紫平原ノ筑後及關東平原ノ下總ハ二千石乃至三千石ノ平均ヲ以テ産セリ其他概シテ麥産多キハ太平洋南岸各地瀨戸内海岸及九州北部各地トス麥産ノ少キハ北海岸及北國東北地方等温度低キ地ナリ又火山岩各地ハ著シク麥産ヲ減ズ殊ニ越中以東陸奥ニ至ル西北沿岸各地ハ一方里ニ産シ七十五石以下ヲ産スルニ過ギズ

麥ノ作付反別モ年々其區域ヲ増加セリ其收穫高ニ至リテハ年々ノ氣候ニ關スルコト大ナレバ氣候ノ適否ニ應ジテ差違アリ今左ニ各年ノ麥作反別收穫高及一反ノ收穫高ヲ擧グベシ

年次	麥作反別	收穫高	一反收穫高
明治十三年	一、四三二、三四四	一一、五〇三、〇六三	〇、八七
全 十四年	一、四五八、七五九	一〇、五〇七、九八三	〇、七二
全 十五年	一、四六八、六九九	一二、九三八、七五二	〇、八八
全 十六年	一、四六二、七三九	一一、七六三、八四六	〇、八〇
全 十七年	一、四八五、七七九	一三、一〇五、八四一	〇、八八
全 十八年	一、五三四、〇九一	一一、九三五、四六七	〇、七八
全 十九年	一、五八七、五三三	一六、〇三三、九六〇	一、〇一
全 二十年	一、五九一、三七四	一五、八二三、一四四	〇、九九
全 二十一年	一、六二二、四三五	一五、二八一、六五八	〇、九四
全 二十二年	一、六五五、一六二	一五、三〇五、一五八	〇、九二
全 二十三年	一、七〇一、七二六	一〇、七二二、九六五	〇、六三

麥ハ海外輸出ノ多キハ小麥トシ明治二十三年ニ於テ凡テ六百六十萬斤ノ輸出ニシテ元價十二萬圓ナリトス

茶ハ米ト同ジク天然的支配ヲ受クル生産物ニシテ亞細亞ノ特産品トモ稱スヘシ支那印度ハ如キハ世界第一ハ産茶地ニシテ日本ハ之ニ次グベキ産茶地ナリ。茶ハ我邦ニテハ攝氏零度ノ同温線マデハ生育ヲ遂グルヲ以テ其産域頗ル廣ク全國過半ヲ占ムル彼ノ植物第二帶ニ於テハ茶樹ハ特有産ニシテ特ニ九州西海岸・四國畿内ヨリ東海道西南部及關東平野等ハ重ナル茶ノ産地ナリ

全國ニ於ケル茶ノ産額ハ平均歲額六百六十萬貫ニシテ一万里ニ二百六十六貫強ノ産トス頗ル多額ノ産ト稱セザルベカラズ今數年來ノ産額ヲ示セバ左ノ如シ

明治十七年	六〇一三、九八二
全 十八年	五四七七、九二八
全 十九年	六八八二、三二七
全 二十年	七二二一、三二一
全 二十一年	七二五二、七八七
全 二十二年	六、九〇七、五六四
平均	六、六〇七、六三三

一、方里ニ對スル産額ノ最モ多キハ山城ニシテ流石ニ古來宇治茶ノ名アル地トシテ、

一、方里内三千五百貫ノ平均ヲ以テ産シ是ヨリ近江伊賀伊勢大和河内攝津等山城ヲ圍ム四近ノ地ハ總テ二千貫以上ノ産地ナリ九州西海岸中ニモ筑後ハ産額最モ多ク三千貫ノ平均ニシテ兩肥薩隅又一千貫以上ノ産額アリ東海道ニテハ駿遠最モ多ク一万里二千六百貫平均ノ産アリ之ニ反シテ中央内地ノ高原各國ヨリ以東奥羽各地等植物第三帶ノ地ニ於テハ茶ノ栽植ハ自然上既ニ不適當ニシテ茶産ハ殆ト皆無ノ姿ナリ本州北區ノ一万里平均産額ハ三十五貫ニシテ信州ノ如キハ厘ニ五貫ヲ産スルニ過ギズ

茶ハ外國ト交通以來海外各國ノ需用多ク從テ輸出額モ著シク増加シテ國産ハ輸出品中二三ヲ爭フ重要ハ産トナリ數年ノ平均輸出元價六百八十萬圓トス各年ノ輸出額左ノ如シ

明治十九年	七、七三三、三〇〇
全 二十年	七、六〇三、三四一
全 二十一年	六、二四八、八一七
全 二十二年	六、一五六、七二九
全 二十三年	六、三二六、六八一

雜產

粟ハ九州地方重ナル産地ニシテ肥後五十萬餘石ヲ第一トシ兩筑薩隅等各二十萬石内外ニシテ神奈川縣モ亦粟ノ産地ナリトス大豆ノ産地ハ九州ノ肥後・關東平原各地ニシテ一縣下概テ二十萬石内外ノ産額アリ甘藷ハ元ト九州四國ノ温暖地方ノ産物ナレトモ夏期暈少ノ高温ニ遇ヘバ生育スルモノナレバ宮城埼玉長野等ニモ少カラザル産額アリ蕎麥・稗ハ地味瘠セタル高寒地ニモ生ズルモノナレバ寧ロ他ノ穀産地ノ産ニアラズシテ東北地ノ産ナリ

藍ハ有名ナル阿波ヲ以テ第一ノ産地トシ尾張遠江之ニ次ギ一方里ニ七千貫以上ノ産アリ藍ハ多ク沖積層ノ産ナレバ關東筑紫内海岸ノ各平原ヲモ重ナル産地トス烟草ハ特ニ地味ヲ要セズ且ツ夏期高温ノ候ニ於テ生茂スルモノナレバ産域天然的ノ支配ヲ受クルコト少ク全國概テ産セザルノ地ナシ中ニモ九州・瀬戸内海岸・東海岸ハ重ナル産地ニシテ九州ノ薩摩烟草肥後烟草長崎烟草等ハ著名ニシテ瀬戸内ノ三備烟草阿波烟草東海ノ水戸烟草モ亦著名ナリ其外大和尾張越前丹波等ハ産額少カラズ

(四) 蠶業

蠶業ハ近來我邦著名ノ特産トナリ蠶業ヨリ生ズル産品ハ輸出品物中絶對的多額品トナレリ我邦蠶業古ヨリ行ハレザルニアラザレトモ元來内國需用ノミヲ目的トシタルヲ以テ勢桑圃ハ人生必需ノ食料産ニ壓倒セラレ其産地モ屢々ノ所ニ限ラレタリ然ルニ維新開國後海外ノ需用究リナキヲ以テ蠶業ハ大ニ發達シテ遂ニ輸出品ノ最多部ヲ占ムルニ至レリ

明治二十二年ニ於テ全國桑畑ノ總反別ハ二十二萬町ニ達セリ即チ總畑地ノ二割ヲ占ムルニ垂ントス而シテ繭ノ總産額ハ一百十八萬餘石即チ一方里四十八石平均ニシテ蠶糸ノ總産額ハ一百五十萬貫ニ及ベリ之ヲ數年前ニ比スレバ頗ル進歩ヲ現ハセルコト左表ヲ一閱スベシ

年次	繭産額	蠶糸産額
明治十七年	一〇六二、四四七	七八二、〇八八
全 十八年	九三八、四〇六	七〇二、四二一
全 十九年	一一二、四一九	九一〇、八二五
全 二十年	一一三、四一八	一〇四二、七六〇

全 二十一年

二一八四、三五七

九四四、四〇〇

全 二十二年

二一八四、六八一

一、四〇二、七三三

前表ヲ案ズルニ近來製糸法ノ熟練スルニ隨ヒ繭ノ原品ノ儘ニテ出スモノ少キニ至リシヲ以テ繭ノ産額ハ増加ヲ見スト雖モ繭糸ハ年々著ク増加シテ明治二十二年ヲ十七年ニ比スレバ殆ド二倍ニ増加セリ

蠶業ノ配布ニ就テ之ヲ見ルニ其發達ノ度ハ甚ダ不均一ニシテ養蠶製糸ノ業ハ之ヲ中央内地特産ト稱スベクシテ其産地ハ近江美濃以東羽前ニ達スル内地各所ニ限ルモノ、如シ。即チ全國中、産額ノ最も多キハ近江美濃、飛騨、甲斐、上野、岩代、羽前及武藏相模ノ内地ノ各國ニシテ羽前ノ一部ヲ除クノ外ハ悉ク海ニ濱セザル所ノ内地諸國ナリ以上八國合計ノ面積ハ厘ニ全國ノ一割五分強ヲ占ムルニ過ギズシテ繭ノ産額ハ全國ノ六割三分強ヲ占メ蠶糸ノ産額ニ至テハ七割弱ノ多額ヲ占ムルニ至レリ亦以テ中央内地ノ養蠶製絲ノ盛大ナルヲ知ルベシ  
蠶業ノ區域ハ比較的ニ他ノ農産地域ノ如ク天然ノ支配ヲ受クルコト甚シカラズ桑樹ノ栽培ハ或ル地味ト或ル氣候トニマデハ適スルモノナレバ本邦ノ如キ温帶氣候ト肥沃ノ地質トニハ到ル處栽培ニ適セザル所ナシ又蠶兒モ我邦ノ氣候ニテハ先ヅ

到處ニ生育セザルハナシ故ニ蠶業ハ我邦ニ於テハ天然ノ限境ナキ適地ト稱セザルヲ得ズ蠶業ノ我邦ニ適スルコト斯ノ如クナルガ故ニ蠶業ノ分布上、前節ニ謂ルガ如キ一種ノ現象即チ蠶業ハ重モニ中央内地、他ノ農産生セザル地ニ限り發達セシ所以ナリ

夫レ東北地方ハ地味頗ル劣等ナル火山質岩ニシテ氣候モ亦寒冷ナルヲ以テ他ノ農産品ハ比較的ニ不適當ナリ然ルニ東海道各地ヨリ内海岸及九州各地ハ農作物ニ對スル氣候ノ適順ナルノミナラズ地味モ亦頗ル佳良ナリ是ヲ以テ土地ハ早ク已ニ從來邦人ノ必需食料品ノ耕作地ニ占領セラレ桑園ノ餘地ヲ存スルコト少キニ至ルル理由アルニヨリ蠶業ノ分布ハ從來農業ノ盛ニシテ農産豐ナル地トハ恰モ正反對ノ事實ヲ現ハスニ至レリ東海、中國、九州等ノ從來蠶業盛ナラザルハ必ズレモ蠶事ニ適セザル天然ノ事狀存スルニアラズ只先占ノ耕作之レガ主トナリレニヨル。又中央内地ノ如キ海産農産共ニ欠乏セル地理的支配ヲ受ケン地ガ一旦蠶業ナル一大富源ヲ得テ發達開進ノ血路ヲ開クニ至リシハ人民職業ノ赴ク所、遂ニ之レニ至リシナルベシト雖抑、又天然事情ガ微妙ノ間ニ不偏不黨ナルヲ見ルニ足ラン乎  
中央内地蠶業地ニ於テモ其部分ニ就テ之ヲ觀レバ各地自ラ差違アリ最も盛ナルハ

其中央地上野及武藏相摸ノ地ニシテ一方里毎ニ繭ノ平均産額ハ三百石以上ニシテ特ニ上州ハ古ヨリ著名ノ繭地ニシテ每一方里ニ付實ニ三百七十石強ノ産額ニシテ一戸ニ付一石一斗五升平均ニシテ人口ニ對スル分頭ニ斗一升ハ産額アリ亦盛ナリト謂フヘシ其他ノ一方里毎ノ産額ハ左ノ如ク

神奈川(三百七十石) 埼玉(三百十三石) 長野(二百十五石) 滋賀(百九十三石) 山梨(百八十石) 福島(百三十八石) 岐阜(百十七石) 山形(九十八石)

之ニ反シテ東海、中國、四國、九州ノ穀産地ハ繭ノ産額ハ實ニ屢少ニシテ東海道ノ武甲相ヨリ西即チ植物第三帶ノ農區ハ一方里ニ對スル繭ノ産額ハ三十石以下ニシテ中國モ丹波、但馬等高寒地ノ外ハ總ヘテ二十石内外ニシテ四國ハ一方里平均産額ニ八石強ニシテ九州ニ至テハ平均七石弱ヲ産スルニ過ギズ以テ繭絲分布ノ概略ヲ見ルベシ。繭ノ輸出ハ世人ノ知ルガ如ク我國産物ノ海外輸出額中最多位ヲ占ムル重要ノ品額ニシテ米穀製茶ト雖モ遙カニ下位ニアリ數年來ノ輸出額元價ハ平均年額二千三百五十萬圓ニ上レリ是レ蠶業ノ發達ト共ニ長足ノ進歩ヲナセルノモニシテ今ヲ距ル十餘年前即チ明治十二年ヲ顧レバ蠶絲ノ輸出額ハ九十七八萬圓ニ過ギザリナリ

然ルニ一年一年ニ増額シテ明治二十二年ノ如キハ二千九百萬圓ニ垂ントシテ未曾有ノ盛況ヲ呈セリ今數年ノ輸出元價ヲ左ニ示スヘシ

明治十九年	一九五四、四六三
明治二十年	二四、一六四、二六六
明治二十一年	二八、三四五、六四六
明治二十二年	二八、八七六、七三四
明治二十三年	一六、四三二、一九三
平均	二三、四七二、四九五

畜産

中古以來本邦人ハ穀食ヲ專ラトシ肉食ハ殆ト跡ヲ絶チシヲ以テ家畜ハ食用ニ牧飼スルモノアラズシテ牛馬ノ如キ重モナル家畜ハ單ニ乘馱ノ目的ナリ是ヲ以テ我邦牧畜ノ業ハ實ニ微々タル景況ニシテ畜産モ從テ少ク特ニ維新後肉食俄ニ流行シ年々食用ニ供スルモノ少カラザルヲ以テ其數モ稍減少セリ之ヲ他ノ海外肉食國ノ家畜ノ豊ナルヨリ觀レバ比較スベクモアラズ實ニ寥々タリ

世界家畜ノ統計ニ據レバ總數殆ト十億頭ニ達シ其最モ多キハ羊四億九千七百三十

四萬ニシテ其次ヲ牛、二億九千三百三十八萬、九千九百六十九萬馬、六千四百六十六萬山  
 羊、二千九百十四萬トシ最モ少數ナルハ驢、九百三十三萬トス而シテ世界中最モ家  
 畜ニ富ムモノハ歐洲ニシテ其次ハ南亞米利加トス又各國人口ニ對スル食用家畜牛  
 羊、家ノ割合ヲ示セバ最モ多キハ南米ウругエイ(Uuguay)ニシテ一萬四千二百二十八  
 頭ナリ歐洲中ニテ家畜ノ最モ多キハ丁抹ノ七百五十五頭ナリ次ニ諾威五百二十八  
 頭ナリ次ニ重モナル諸國ヲ舉グレバ和蘭、三百五十八頭・獨逸、三百四十二頭・佛蘭  
 士、三百三頭・英、吉利、二百九十八頭ナリ  
 我邦ノ家畜統計ヲ示セバ牛馬合計二百五十九萬三千三百四十四頭(明治二十年末)ナリ内牛  
 百四萬四千九百七十六頭ニシテ馬百五十四萬六千三百六十八頭ナリ之ヲ我邦全年  
 ノ人口ニ配當スレバ牛馬ノ合計ニ於テハ人口千人ニ付六十四頭、二ノ割合ニシテ食  
 用ニ供スル牛ハ千人ニ付二十五頭、八ナリ馬ハ千人ニ付三十八頭、二ナリ我邦肉食ノ  
 流行以來牛ハ重モナル食料ニシテ毎年屠殺スル牛ノ頭數ハ七八萬頭ニ下ラズ明治  
 二十二年ハ八萬五千頭、二十三年ハ七萬七千頭ナリ今、八萬頭ヲ平均トスレバ一日、二  
 百二十頭ヲ減セリ故ニ牛ハ現在高ニテハ一厘ニ十三年ヲ支フルニ過ギズ是ヲ以テ  
 徒ニ肉食ヲ獎勵スルモ原料ヲ養成セズンバ豈ニ得ヘケンヤ

馬。モ近年各地トモ食用ニ供スルヲ流行シ長野、東京、福島、山形、岐阜、福岡ノ如キハ最モ  
 盛ニシテ年々屠殺スル頭數ハ二萬三四千頭ナリ豕ノ如キハ一層壓少ニシテ養豕  
 ノ行ハル、ハ九州ノ西南部ニシテ琉球薩摩ヲ第一トシ羊ノ如キモ西南地方ニ於テ  
 種ニ之レアルノミ家禽ハ下總常陸ニ飼養スルヲ最モ多ク次ニ中國地方稍飼養スル  
 所アリ

牛馬ノ配布

牛ノ配布ハ著シク二部ニ分ル本邦ノ南部即チ畿内以西ノ各地中國九州ハ重モ  
 ナル牛ノ産所ニシテ畿内ヨリ東北ハ牛ハ生育頗ル少シ土地ノ面積ニ比シテ牛ノ最  
 モ多キハ讚岐ニシテ一方里ニ三百頭以上ナリ次ニ三百頭乃至二百頭ノ地ハ肥前、備  
 前、備中、和泉及安房ナリ次ニ百頭以上ヲ有スルハ中國各地及ヒ伊豫、紀伊、九州各地(日向  
 除ク)トス彼ノ神戸、牛ト稱シテ神戸港ヨリ東京其他關東ニ配送スルモノハ中國産  
 牛ナリ以上ヲ重モナル産牛地トス之ニ反シテ牛ハ最モ少キハ上野、常陸、下總ニシテ  
 一方里内ニ一頭以下ナリ其他ノ關東諸國ヨリ東北諸國ハ五頭以下ナリ唯、陸奥、陸中  
 羽前ハ十頭ヨリ五頭ノ間ニアリ  
 馬ノ配布ハ日本ノ中央部ニ少ク南部ノ九州及東北部ノ東海岸ニ多シ一方里ニ對ス



馬ノ頭數最モ多キハ大隅ニシテ三百頭以上ヲ牧シ次ニ肥後薩摩筑後ハ三百頭ヨリ二百五十頭ノ間ニアリ肥後筑後ハ農馬ヲ主トシ薩摩ハ精悍ノ馬ヲ産ス次ニ百五十頭以上ノ地ハ肥前備中及東海岸ノ兩總常陸磐城トス次ニ舊奥州各地及九州各地ハ百頭以上ヲ有ス奥州ノ雄壯ナル産馬是ナリ馬ハ最モ少キハ河内但馬ニシテ一頭以下及畿内ヨリ北陸各地ハ總テ馬ノ厩少ナル地方ナリ

### 第三十六章

#### 林制及林産

我邦ハ氣候ノ中和ナルト雨濕ノ多キトニヨリ到處樹木ノ栽培ニ適セザルノ地ナク新火山岩中礫礫ノ地ヲ除クハ外ハ山峯巒々トシテ綠ニ密樹茂林ヲナシ我國土ノ風致ヲ成セリ故ニ林産ハ頗ル裕ナリ。夫レ山林ハ國土ノ裝致國家ノ森嚴ニシテ猶ホ人跡ニ毛髮鬚髻アルガ如ク且ツ人類ノ生業ニ關シテハ之レガ爲メニ家屋原材ヲ採リ薪炭ヲ得。間接ニハ氣候之レガ爲メニ調和シ。泉源之レガ爲メニ涵養セラレ實ニ至要ノ國産ナリト謂フベシ。是ヲ以テ山林保管ノ制ハ重ナル邦國ハ必ズ之ヲ供ヘ我國ハ維新前ニアリテモ各藩

共ニ山林ノ制ハ頗ル嚴重ナリシガ維新變革ノ爲メ一時其制ノ緩慢ナリレニ乘ジ各地トモ濫伐大ニ行ハレ數百年來曾テ斧斤ヲ入レザリ深林モ一朝ニシテ裸山トナリシ所モ少ナカラザリシ。然ルニ維新後大政ノ舉ルト共ニ政府モ大ニ愛ニ見ル所アリテ獨逸及其他各國ノ山林制ニヨリテ大ニ山林ノ制ヲ改定シ樹木ノ保存栽植ニ着手セリ即チ山林ノ等級ヲ制シ全國ノ林政區畫ヲ大林區及小林區ニ分チ之ヲ監視スルガ爲メニ大林區署及小林區署ヲ設ケ林務官及其他ノ林官ヲ置テ專ラ之ニ當ラシム是ニ於テ林制大ニ備ハレリ

大林區 管轄府縣

宮城	宮城	山形
秋田	秋田	
青森	青森	
岩手	岩手	
栃木	栃木	福島
東京	東京	埼玉
		千葉
		茨城
		群馬

林制及林

長野	長野	新潟	福井	岐阜
石川	石川	富山	滋賀	三重
大阪	大阪	京都	滋賀	和歌山
兵庫	兵庫	鳥取	岡山	奈良
廣島	廣島	島根	山口	
高知	高知			
愛媛	愛媛	徳島	香川	
福岡	福岡	佐賀	長崎	
熊本	熊本	大分		
鹿兒島	鹿兒島	宮崎		

山林ノ等級ヲ一等二等三等及員外ニ別チ一等林トハ松・赤松・落葉松・杉・檜・榧・樅・梅・樟・樺・櫟・桂・栗・鹽地・檜・橡等凡ソ良材トナルベキ木種ノ森列シ又ハ現ニ格別ノ良材ナクトモ土地膏腴運輸至便ニシテ將來良材ノ生立スベキ林ヲ云フ二等林トハ良材大樹アリト雖モ町歩狭少ノ土地或ハ運輸不便ニシテ生長稍劣ルモノ并ニ堤防橋梁ニ備フル林ヲ云フ三等林トハ薪炭用材林并ニ鑛山備

林其他從來村民ニ於テ資用セシ雜木篋竹等叢生スル林ヲ云フ員外林トハ小畝歩又ハ地味礫礫ニシテ等級ニ列シ難キ林ヲ云フ。以上ハ一般供用林ニシテ又別ニ保存林ト稱スルモノアリ之ヲ禁伐林風致林ノ二類ニ別ツ禁伐林トハ水源涵養土砂扞止風潮除等ノ如キ全國ノ保安ヲ謀リ存養スルモノニシテ風致林トハ社寺ノ勝景及ビ舊跡等ヲ裝飾スルモノナリ此等ノ森林ハ皆手入等ノ爲メ伐木スルノ外普通利用ノ計畫ヲ執ラザルモノトス以上ヲ現林制トス

現今我國ノ山林數ハ凡ソ一。千。五。百。八。十。五。萬。箇。所。ニ。下。ラ。ズ。而。シ。其。反。別。ハ。一。千。四。百。五。十。萬。餘。町。步。アリ。即。チ。人。口。一。ニ。付。三。反。五。畝。餘。ナリ。而。シ。之。ニ。森。列。ス。ル。樹。木。ノ。數。ハ。無。慮。三。百。九。十。三。億。五。千。四。百。萬。本。アリ。之。ヲ。人。口。ニ。配。當。ス。レ。バ。九。百。八。十。四。本。ナリ。頗。ル。巨。額。ノ。産。ナリ。然。レ。モ。我。國。ノ。如。ク。家。屋。ニ。器。具。ニ。又。薪。炭。ニ。多。ク。木。材。ヲ。使。用。消。費。ス。ル。所。ハ。其。量。年々。夥。シ。キ。巨。額。ニ。上。リ。只。薪。炭。ニ。消。費。ス。ル。量。ニ。テ。モ。年々。左。ノ。額。ニ。上。ル。ト。云。フ

薪 炭

一三五六三九三八一\* 一六八一七四七〇\*

之ヲ合計スレバ一億六千八百萬本餘ニシテ之ニ建築材料ヲ加フレバ恐ラクハ二億萬本ニ上ルベシ故ニ若シ栽植ヲ怠リテ使用ノミスルモノセバ二百年ヲ出スシテ到

林制及林産

處寸青ナキ秃山トナリ綠峯如黛ノ好景モ青一髮ノ風致モナキ殺風景ノ赤地タラン  
 ノミ豈ニ忽ニスベケンヤ  
 林制改定以來官林ノ保護ハ頗ル嚴密ニシテ將來永遠ニ國家有トシ保存スベキモノ  
 ナリ今官林ノ在高ヲ舉グレバ左ノ如シ(三十七年)

官林箇所 一二〇、八四二  
 官林反別 七、〇九七、九八七

保禁伐林立	水	四五、二七、四〇六	計	水	一四六、七一、九九五本
存	竹	六七、四〇、九〇	計	竹	九二六、七二五本
林風致林立	木	一〇一、四九二、五〇九			
	竹	二五二、六三五			
保	一等林	一、一三七、四一六、八四一			
	二等林	四四九、五一〇、五四五			
用	三等林	六六〇、八六八、〇五〇	計	木	二、九五、四一、七五、一一七本
林	員外林	一〇、九三九、五二〇		竹	一一、六一六、六六八本
未	定林	六九五、四四〇、一六一			

凡テ樹木ハ氣候ニ應ジテ自ラ其發生ニ限界アリ是レ植物帯ノ區別アル所以ナリ(日本植物帯ノ條參照)例ヘハ九州ニハ常綠樹潤葉樹ノ樟、欖、柯及竹等ヲ重モナル産樹トスレバ東北地方ニハ既ニ之ヲ生ゼズ之ニ反シテ東北地方ニハ羅漢柏、落葉松、椴、山毛櫸等ヲ常生樹トスレバ九州ニハ之ヲ産セザルガ如シ然レバ我邦ノ氣候ニ於テハ北ハ北海道ヨリ南ハ琉球ニ至ルマテ悉ク樹木ノ生茂ニ適セザル地ナシ左ニ順次之ヲ説クヘシ

東北地方ハ到處ニ羅漢柏、樟、松、杉ノ森林アリ中ニモ青森・秋田ニ亘リテハ最モ森林ニ富ム青森大林區ノ包括スル山林ハ火山岩及第三紀岩ニシテ反別九十一萬餘町歩ニ立木三億五千一百萬本ニ餘リ運漕ノ便亦少カラズ故ニ材産ハ陸奥ノ第一流ナラシ秋田林區ハ其反別一百二十三萬町歩ニシテ地域ノ廣キ全國第一トス杉、松、樟、椴、桂、栗ノ類多ク特ニ杉ハ最モ佳良ノ大林アリ此等ノ立木六億二三千萬本ニ下ラズ岩手林區ハ羽前陸中ニ亘ル古生岩及第三紀岩ニシテ反別四十萬町歩ニシテ立木二億三千万アリ只宮城山形ニ亘リテハ廣大ノ山林多カラズ栃木林區ハ下野磐城岩代ニ連リ中ニ彼ノ有名ナルノ日光ノ森林ヲモ包括シ杉、椴ノ良材アルコト世人ノ知ル所ニシテ之ニ次テ松、栗、桂、樅、山毛櫸、落葉松、檜ノ深林少カラズ凡ソ四億二千萬本ノ立木ヲ有セ

本州中部ノ重モナル山林ハ東海道ニ伊豆、天城山ノ大林アリ總テ火山岩ヲ以テ成ル  
・此山林ニハ鑿材用ト稱セラル、樺ノ大樹及杉樅ノ茂林ニ其地域凡ソ二十方里  
ニ及ブト云フ駿河ヨリ遠江ノ北部東山道境ノ古生岩及中古岩ニハ巨樹蒼鬱トシ繁  
茂シ廣大ノ山林アリ駿河ノ田代、民林、遠江ノ千頭山官林ノ如キハ重要ノ大林ナリ東  
山道ニ入レバ甚ダ山林ニ富ミ良材少カラズ信濃ノ木曾官林ノ如キハ水曾川ノ幽溪  
ヲ夾ミ廣サ凡十五萬町ノ間巨木大樹ヲ以テ蔽ハレ幽谷風ナキ邊ノ如キハ檜杉ノ良  
材亨々トシテ盡立レ無心ノ行旅ト雖モ歎美セザルハナシ其計一千二百萬本ニ及ブ  
ト云フ加フルニ材理堅密木曾五木檜杉、櫻松、越ノ名既ニ海内ニ鳴レリ之ヲ過ギテ美  
濃ニ入レバ惠那山、四近ノ大林アリ伐木丁々鳥聲ニ和シ木挽ヲ業トスルモノ少カラ  
ズ是ヨリ東北方飛騨、高原ヲ包シテ越中、立山ノ大林ニ及ブマテ密樹茂林ヲ以テ充  
サレ櫻梅杉ノ良材アリ飛騨匠ノ名人口ニ膾炙スルニ至ル實ニ偶然ニアラザルナリ  
大和南部及紀伊ニ亘ル始原岩太古岩及中古岩ニハ松、樅、杉、樅ノ茂林アリテ吉野山林、  
春日山ノ官林、大臺原山ノ茂林等最モ繁茂シ未ダ人跡ノ到ラザル地アリト云フ紀州  
ニハ殆ト半熱帶産ノ樺、椎、檜等森立シ木ノ國ノ名ハ蓋シ之ニ基原ス

中國地方ノ山林ハ黒松帯ニ屬シ松ヲ以テ定在樹トス黒松、椎、檜ハ重モナル産材ナリ  
稍高所ニハ扁柏ヲ生ズ夫レ中國ノ地質ハ多クハ花崗岩ニ屬シ水蝕風化ニ耐ユルノ  
度甚タ弱ク岩石ハ土砂トナリテ母岩ヨリ剝離シ常ニ海岸ニ落ツ故ニ樹木ハ永久ニ  
宿根スル能ハズ是ヲ以テ到處白砂青松ノ美觀アレモ規模廣大ナル大林ニ乏シ然レ  
モ官林ノミテモ二十六萬町ニ超ヘ其立木ハ八千二百九十八萬本アリ對岸ノ四國ハ  
其地質概テ古代ノ水成岩ニ屬シ樹木ノ發生頗ル佳良ニシ全島ノ官林三十五萬八千  
町歩ニシテ八億六千五百萬ノ立木ヲ有スト云フ  
九州ハ氣候温暖ナルヲ以テ巨樹大木ヲ生シ特ニ其南部ハ熱帶産ノ植物ナル榕、樟、ア  
リテ榕、蒲桃、橙等ヲ生シ中部ニアリテモ黒松ノ如キハ山ノ半腹マテ發生シ樟ノ大樹  
ハ周圍十抱以上ノモノ少カラズ且ツ竹林ノ多キハ九州ノ特異トス本島ノ山林ハ北  
部、中部、南部ノ三部ニ區別スベク北部福國兩筑豊前肥前ニ亘ル山林ニシテ此部ハ花  
崗岩及第三紀層ニシテ廣大ナル密林少シ官林ニハ八千三百萬本ヲ有ス中部熊本ハ肥  
後豊後ニ亘リ阿蘇山ヲ包シテ大矢、若葉、大野ノ深林アリ官林十九萬三千町・立木一  
億八千七百萬本ヲ有シ竹叢亦少カラズ南部鹿島ハ日薩隅ニ亘リ頗ル廣大ノ森林ア  
リ特ニ日向ニ樟ノ巨材、薩摩ニ杉ノ良材アリ其僻遠ノ深山ニハ常緑ノ密林日光ヲ蔽

ヒ人跡未ダ稀ニ山靜ニシテ太古ニ似タル所アリテ山林調査モ及バザリシガ明治二十三年度ニ於テ二十五萬町實地調査ノ結果トシテ増加シタリ故ニ官林ノ反別四十萬町餘立木殆ト十億萬本ニ上リ全國ノ最タリ

北海道ノ森林ハ天然林ノミニシテ樹藝林ナシ樹下一圓ニ笹箬叢生シ茨ノ類甚ダ稀ナリ木種ハ潤葉樹多ク針葉樹少シ深山ハ未ダ斧斤ノ入ラザル森林アルモ沿海及ヒ人ノ住所近キ處ハ内地漁業人ノ濫伐ト野火ノ延燒トニヨリテ童山尠カラズ其森林ノ立木ハ内地産ト異ナルモノアリ左ニ重モナル樹種ヲ記スベシ(傍訓ハ方)

針葉樹

水松 蝦夷松 檜 粗榧

潤葉樹其類多シ今重モナルモノヲ掲ク

榎 槲 桑 桂 浮爛羅 山胡桃 榲木 じうり 刺楸 槭樹 檜 白楊 樺 菩提樹 赤楊 水楊 接骨木 石楠木等

木材ヲ運搬スルニハ冬期雪中ニ限ルト云フ其他ノ期節ニハ蚊虻發生シ笹箬發生スルヲ以テ運搬不便ナリ雪中ニハ橋車ニテ川邊ニ出シ然ル後筏ニ組ミ或ハ管流トテ一本宛流スト云フ

### 第三十七章

#### 三業及美術

我邦ニ於ケル美術及工藝ノ業ハ國土ガ半熱帶ヨリ半寒帶ノ間ニ亘ルヲ以テ諸種ノ原料多キト・國民ノ意匠巧ミニ手工ニ長ズルトニヨリ古ヨリ頗ル發達シタリ・而シテ工業トシテ先ヅ行ハレタルハ織工ナリト云フ機械ノ業ハ既ニ神代ニ於テ行ハレタリ其後朝鮮及漢土ニ交通スルニ及ビ彼レノ技術ヲ輸入センニヨリテ益々發達シ

織物ニ於テハ古來既ニ見ルベキモノアリシ  
武器ノ製造モ亦上古ヨリ行ハレタリ然レモ太古ニアリテハ我邦モ他ノ原始人民ト全ク石ヲ以テ兵器ヲ製造シタルコトハ彼ノ雷斧石ニヨリテ知ルベシ從テ石工ハ太古ニ發達シ石棺石槨石殿石藏石人石馬ノ製作ハ古ヨリ之レアリシ次テ鑄工出テ鏡劍ヲ鑄治セリ其他土器工矢作船工等モアリシ其後海外ヨリ輸入セル建築法橋梁架設ノ業等モ行ハレタリ

奈良朝時代ニ及ビテハ製造工業モ大ニ進歩シ彼ノ我國民ノ特有ナル美術次第ニ萌芽ヲ生ズルトトナリ平安遷都ノ後ヨリ武門執政時代特ニ東山時代ニ至リテハ美術

益發達シタリ降テ徳川氏ノ時代ニ及ビテハ世運ノ開進ト共ニ工藝美術ノ業ハ非常ニ進歩發達シ殆ト世界ヲ凌ギ美術ハ日本獨得ハ技術ト稱セラハ至レリ特ニ武器ハ古ヨリ尙武風ヲ成シ且ツ世々ノ戰亂ヲ經テ益其巧ヲ積ミ武士モ武器ニハ資財ヲ吝マズ職工モ全力ヲ愛ニ用井タルヲ以テ著シク進歩發達シ彼ノ刀劍ノ鍛鍊裝飾甲冑弓箭ヨリ馬具ニ至ルマテ其精ヲ極メタリ其外繪畫彫刻陶磁器織物漆工金工等モ頗ル發達シタリ特ニ刀劍鍛鍊ノ如キハ我國獨得ノ長技ニシテ日本刀ノ切味ハ世ノ最モ賞スル所ナリ

抑○我○民○ガ○美○術○思○想○ニ○富○ミ○世○界○ノ○美○術○國○ヲ○以○テ○稱○セ○ラ○ル○モ○ハ○我○國○天○然○ノ○風○景○之○レ○ヲ○シ○テ○然○ラ○シ○メ○ス○ル○モ○ト○謂○ハ○ザ○ル○ベ○カ○ラ○ズ○既○ニ○述○ブ○ル○ガ○如○ク○凡○ソ○一○國○民○ノ氣風ハ概子之ヲ繞圍スル地文地形トノ間ニ涵養セラレモノニシテ其思想・其嗜好・其意匠等ハ其住民ノ四邊ニ羅列スル地理的ニ存セズンバアラズ試ニ亞弗利加沙漠ニ住スル人民ニ就テ其思想ヲ問ヘバ・空漠抹糊ナルト恰モ無邊ノ沙海ニ幻象ヲ望ムガ如クナルベク・其嗜好ハ駱駝張幕泉地及多液ノ菓實等ノ外答フ所ナカルベク・又其意匠ノ變化ナキトハ平沙ノ渺茫タルガ如ク其殺風景ナルトハ炎陽ノ熱沙ヲ照レテ極目寸膏ナキガ如クナラン是レ自然ノ理ナリ

我邦天然ノ風景タル山水麗秀ニレテ自然ノ美ナラザルハナク此間ニ住スル人民ニレテ美術思想ニ富ム亦宜ナラズヤ自然ノ山水之ヲ紙ニ寫セバ即チ繪畫ニレテ之ヲ念頭ニ抱ケバ即チ詩思ナリ斯ノ如ク自然ノ風景是レ美術的ナルヲ以テ古ヨリ美術思想ハ次第ニ發達シ中古以來戰亂相鍾クト雖モ時ニ小康アレバ先ヅ發シ易キモノハ美術的傾向ナリシ其思想ノ發スルモノハ國歌トナリ國文トナリ其技藝ニ現ハルモノハ彫刻・繪畫・採技等ナリシ中ニモ近古江戸政府ニ及ビテハ三百年ノ泰平美術ハ進歩ハ驚クベキモノニレテ美術國トシテ世界ニ誇ルベキモノハ少カラズ然ルニ維新開國後ハ歐米ノ新思想ヲ輸入セシヨリ其文化ヲ慕フノ極盡ク在來ノ國風ヲ打破シ去リテ(所謂火山國)一ニ彼ニ模倣シ殆ト底止スル所ナキノ傾キアリテ先覺ノ士ハ頗ル之ヲ愛ヒ外國人スラ我國民ノ急激ナルヲ責メタリ英國有名ノ美術家あるねすと氏は(Arnest Hart)氏ハ日本美術ノ說中左ノ如ク云ヘリ

三百年間鎖國ノ主義ヲ守リタル日本國ガ遠ニ開明國ノ列ニ加ハリ其數百年間秘藏セシ寶物貴品ヲ露發シテ吾人ヲ驚嘆セシメタルハ屢ニ二三十年以來ニ過ギズ此ノ開國ニ引續キテ日本國ハ其封建制度ヲ破壞シ舊來ノ諸法律ヲ廢シテ頓ニ歐洲ノ制度風俗ヲ模倣シ英國ノ旅客學士工藝家等ヲ優待スルニ至リタレモ奈何セ

歐洲ノ習慣嗜好ニ倣フテ急激ニ失シ其固有ノ優美ナル服式風習及裝飾ヲ失フニ從ヒ舊來非常ニ愛藏珍重セシ寶物貴品ヲモ毫モ顧慮スル所ナク散逸セシムルニ至レリ。此ノ故ニ數百年間蓄積セシ所ノ貴重品モ又曾テ皇族貴族士族等ガ厩ニ一品ヲ得テスラ誇稱スルノ價值アリト看做セシ寶物モ細々歐洲諸國ニ輸出スルトナレリ是レ即歐洲人ガ今日此等ノ貴寶ニ接スルノ幸ヲ得タル所以ナリ。然レモ悲ムベシ舊大名旗下及其他腰ニ兩刀ヲ横ヘシ武臣等ハ之ガ爲ニ其家傳ノ品物ヲ亡失シ神社佛閣ハ靈寶モ亦破壞スルニアラザレバ則散逸シ其多分ハ吾人ハ所有ニ歸セリ其縫箱物銅器又ハ鐔鞘等ノ珍重ナルモノヲ備ヘタル刀劍諸侯其他ノ武士等カ腰帶ニ帶ビタル印籠稀有ナル篋箱書籍香箱諸大家ノ手ニ成レル掛物額面等總テ漫ニ世人ニ示スト能ハザルベキ貴重ナル物品ハ皆戰亂窮困並ニ變革等ノ爲メ往々無識ノ商賈ニ占有セラレタリ而シテ其無識商價等ハ是等貴寶ノ價值ヲ單ニ其物質ノ價值ト分量トニヨリテ鑑定シ絶テ功ヲ顧ルコトナカリシハ痛惜ノ至リト謂フベキナリ。加之夫ノ稀絶精妙ナル品物ノ破毀セラレ無比ノ技巧ニ成リ幾百千ノ星霜ヲ經タル古銅品ノ徒ニ坩鍋ニ投セラレ又往古ノ名工絶技ヲ以テ裝飾シ由來久シク秘藏セル武器ノ空シク消耗セルモノモ亦幾干ツヤ

然レモ幸ニシテ日本雅致風韻ニ乏シカラザル人士ハ漸ク其既往不同ノ損失ヲ悔悟スルニ至レリ殊ニ同國ニ於テ今尙留存セル所ノ妙工貴品ヲ蒐集シ鄭重ニ之ヲ博物館ニ保存スルノ舉アルハ吾人ノ最モ喜悅ニ堪ヘザル所ナリ聞ク此ノ蒐集セル物品ハ博物館ニ於テ精細ナル目錄ヲ製シ國民ガ其古來固有ノ妙工ニ對スル妥當ノ愛情尊敬ヲ加フト云フ云々  
以上ハ評言顧ミレバ我國民ハ逃レントスルモ免レ難キ評ナルハ然レモ其末段ニ言ヘル如ク近時所謂國粹ハ宜シク保存スベシト云ヘル聲漸ク高ク一般ニ此ノ傾向ヲ生ゼリ從テ固有ノ美術モ再ビ活氣ヲ帯ビルニ至リシモ昔時ノ盛況ニ比スレバ頗ル微々タリ然レモ他ノ工藝製作ニ至リテハ獎勵ノ及ブト一般必要ヲ感シタルトニヨリテ年々盛運ニ向ヘリ  
支那美術トノ比較 東洋ニテハ支那モ一種ノ美術ニ長ズルノ國ニシテ支那美術品ノ歐米諸方ニ賞玩セラル、コトハ人ノ知ル所ナリ。然ルニ我國美術品ト比較スルハ亦自ラ優劣ナキ能ハズ久シク亞細亞ニ住シテ東洋品ノ貿易ニ從事スル米國人ノ評ニ日支ノ美術ハ各々長所アリ日本人ハ支那人ヨリモ風致(Taste)ニ富ミ支那人ハ日本人ヨリモ熟練(Skill)ニ長シタリ故ニ前者ハ意匠(Design)ニ勝リ後者ハ執行(Execution)

三〇三)ニ、長ケ、タリ、例ヘバ日本ヲシテ屏風ニ織物ヲ爲サレメレ乎、彼ハ樹上ニ必ズ一羽ノ小鳥ヲ棲マシムベシ。又支那人ヲシテ同技ヲ爲サレメン乎、彼ハ一羽ノ鳥、既ニ樹ノ風致ヲ増ストアレバ二羽尙ホ可ナルベシトテ三羽、四羽ト漸ク數ヲ増シ終ニハ枝毎ニ之ヲ置キ樹ニ鳥ノ鈴成リヲ見ルニ至ルベシ。之ニ反シテ日本人ハ審美ノ骨粹ヲ穿テ一見人ノ意表ニ出ヅル物ヲ製出スルナリ、支那人ガ小心翼翼タル辛苦ノ成蹟ハ唯、細キノミニシテ觀者ハ唯其異形ナルニ驚クベシ、然レモ此兩國人ノ製出タル彼ノ屏風ヲ尙ホ仔細ニ閱シ來レバ支那人ノ針歩ヘ日本人ノモノヨリモ規律正シクシテ能ク整合シ離形ニ習ヒテ精細ニ模造スルノ苦心ハ之ヲ見ルヲ得ベシ云々ト以テ日支兩國人ガ美術觀念ノ一斑ヲ見ルベシ

現今工業ノ景况

凡ソ工業ト稱スレバ其種類甚タ多ク其國土ノ事情ニ應ジテ自ラ適否盛衰ノアリテ悉ク之ヲ網羅シ難シト雖モ今農商務省ノ報スル工業年報ニヨリ我邦ニ於ケル重ナル工業ヲ舉グレバ凡ソ四十四種ニシテ對スル全國製造家ノ總數ハ三十五萬三千七百ナリ又之ニ從事スル職工ノ總人員ハ八十五萬二千六百十三人ニシテ其製造品價額ノ總數ハ五千七十五萬圓ナリ今其各業ヲ示セバ左ノ如シ(明治二十二年報告ノ

工業年報ニシテ最近ノ數ト固ヨリ差アレモ以テ各工業ノ梗概ヲ知ルニ足ラン故ニ重ナル工業織物、紡績、陶磁、及酒類、醬油、生糸ノ如キハ別ニ示ス所アリ)

- (一) 絹織物 (二) 綿織物 (三) 麻織物 (四) 染物
- (五) 紙 (六) 金屬器 (七) 銅 (八) 陶磁器
- (九) 漆器 (一〇) 漆 (一一) 硝子 (一二) 寄木細工
- (一三) 竹細工 (一四) 麥稈紐 (一五) 寒天 (一六) 硫酸
- (一七) 刻昆布 (一八) 扇子 (一九) 生蠟 (二〇) 晒蠟
- (二一) 茶種油 (二二) 蠟表 (二三) 摺附木 (二四) 傘
- (二五) 藍 (二六) 革 (二七) 墨 (二八) 柳行李
- (二九) 網 (三〇) 薄荷 (三一) 鱈肝油 (三二) 鍼線
- (三三) 石盤 (三四) 硝石 (三五) 生糸 (三六) 繡綉
- (三七) 金屬箔 (三八) 金屬鈴 (三九) 麻 (四〇) 紙料
- (四一) 蚊帳 (四二) セメント (四三) 鋸 (四四) 元結

以上各業ニ付進歩増加ノ最モ速ナルハ蚊帳、紙、綿織物、絹織物等ノ業ナリトス左ニ重ナル工業及製造品ニ就キ其景况ヲ述ブベシ



織物業

機械ノ業ハ本邦ニ於テ最モ古代ニ開ケタル丈ケアリテ今尙ホ工業ノ中<sup>○</sup>最<sup>○</sup>盛<sup>○</sup>ナル<sup>○</sup>モノ<sup>○</sup>ハ織物ノ業ト<sup>○</sup>ス<sup>○</sup>特ニ近年ハ一般實業ノ傾向ヲ生シタルニヨリテ機業ハ一年盛況ヲ呈スル有様ニシテ全國產出ノ價額總計ヲ以テ之ヲ示セバ明治十七年ニハ千九百九十七萬圓ナリシガ十八年ニハ二千三百廿六萬圓トナリ十九年ニハ三千三百八十七萬圓ニ上リ二十年ニハ五千五百十五萬圓トナリ二十一年ニハ五千四百五十四萬圓トナリ二十二年ニハ既ニ七千四百三十二萬圓ニ達セリ即チ之ヲ五年前產額ニ比スレバ六倍餘ニ當レリ勿論之ヲ以テ英國ノ如キ工業國ニ比スレバ未ダ同日ノ論ニアラズト雖モ其進歩頗ル速ニシテ大勢ノ既ニ工業ニ傾向セル一斑ヲ見ルベシ

明治二十二年ニ於ケル織物產出價ヲ全國人口ニ配當スレハ一人分頭一圓八十六錢ノ平均ニ當リ我國ノ製造品中ニテハ頗ル多額ヲ占ムル業ナリ而シテ機織業ハ地方ニヨリテ甚タシキ盛衰ノ別アリ著<sup>○</sup>ク盛ナル<sup>○</sup>ハ埼玉及京都ニシテ其價額埼玉ハ千二百四十五萬圓ニ上リ京都ハ九百三十三萬圓ニ上ル而シテ埼玉ハ水綿織ヲ主トシ其重モノナル產地ハ八王子附近塚越結城織村山飛白織川越二子織等頗ル有名ニシテ產額モ亦多シ<sup>○</sup>京都ハ絹織ヲ專トシ先ヅ西陣ヲ第一ノ產地トシ其金襴緞子縞子織等ノ

著名ナルハ偏ク人ノ知ル所ナリ次テ愛知ノ水綿織・群馬ノ絹織等兩ナガラ五百萬圓内外ノ產アリ愛知ハ二子織ヲ主トシ群馬ハ桐生織伊勢崎太織綿等特產ナリ次ニ織物ニテ二百萬以上ノ產アルハ栃木二百九十一萬圓ニシテ足利織結城紬佐野織眞岡水綿ノ特產アリ愛媛ノ水綿二百八十萬圓ハ彼ノ伊豫縞絹飛白織頗ル產出多シ大阪ノ水綿二百四十萬圓及ヒ奈良和歌山ノ水綿何レモ二百二十萬圓内外ノ產額アリテ大和飛白織ノ如キ最モ名アリ和歌山ハ近來ノ特產ナル紀州綿ふらねる產額甚多シ又新潟・福島・神奈川等ハ何レモ諸織物ノ產額貳百萬圓以上ニ達セリ近來福井ハ絹ノ機業著<sup>○</sup>ク發達シ<sup>○</sup>遠額四百萬圓<sup>○</sup>重モニ海外輸出ノ手巾ヲ織出シ福井絹ハ外國市場ニ名アリト云フ

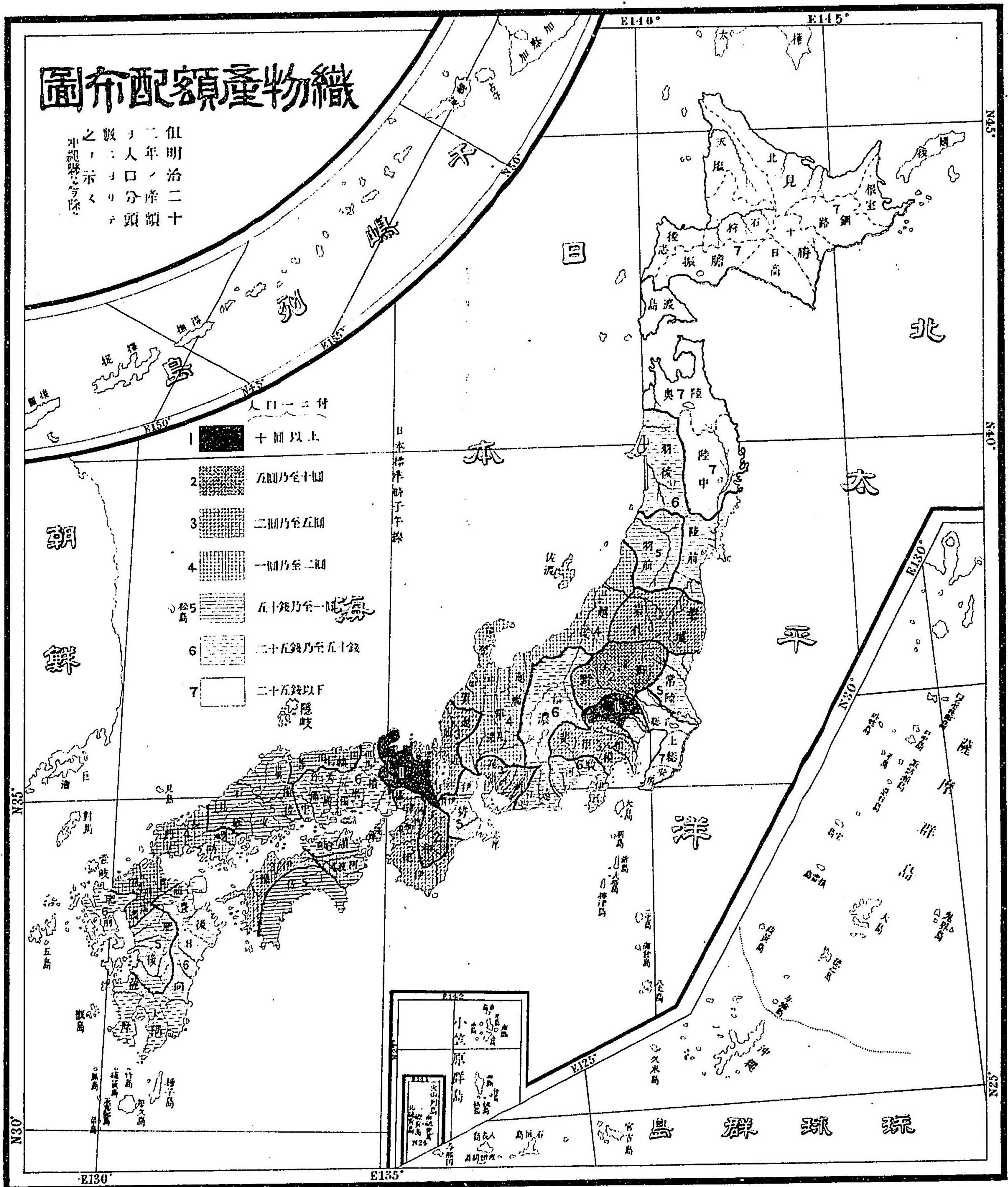
其他一部ハ著名產ニシテ產額ノ多キモノハ伊勢松阪水綿織・伯耆渡段通・豊前ノ小倉織・近江濱縮緬・常陸銚子縮・周防ノ岩國縮・博多織・琉球織物・久留米緋

・甲斐絹・米澤織等ナリ

機織業ノ未ダ發達セザル處ハ多クハ維新前大藩ノ地ニシテ舊岡山仙臺鹿島靜岡水戸ノ諸藩地ノ如キ即チ是ナリ・要スルニ大藩ノ下ハ其餘澤ニヨリ生活便ナルヲ以テ手工ヲ務ムルヲ要セザリト不生產者タル藩士多ク其坐食ニ慣レタル風習ハ他

# 織物產額配額圖

但明治二十年ノ產額  
ノ人口分額  
之示ク  
中絶等を除ク



ノ種族ニモ感染シ維新後力食自營ノ世運ニ至リテモ其舊習ノ俄ニ改新シ難キトニ  
ヨル其他二三藩ノ例外ニ機業ノ盛ナルハ舊來幾分カ機業發達セシ地カ若クハ蠶糸  
綿糸ノ特産アリテ特ニ機業ニ適當セル風土ナルニヨレリ  
全國機業ノ配布ハ各府縣別織物產額賦布圖ニ就テ之ヲ知ルベシ  
織物產額中絹織・木綿織ノ兩者ニ就テ之ヲ觀ルニ絹織物ヨリモ木綿織ハ頗ル多數  
ヲ占メ數量ニ於テハ凡ツ木綿ハ絹ノ八倍トス木綿織ノ最モ盛ニ產出スルハ畿内各  
地ヲ第一トシ續テ中國地方即チ棉花生產地ナリ又絹織ハ關東及中仙道各地蠶業地  
方ハ最モ盛ニ產出アリ

## 紡績業

近來綿糸ノ外國ヨリ輸入唐糸ト稱スル機械糸スルモノ夥シキカ爲メ綿糸紡績ノ業  
ハ各地ニ起リ年々產出額ヲ增加スルニ至レリ所謂洋製機械取ノ紡績會社ハ全國ニ  
三十箇所ニ及ビ年々製出スル綿糸ノ高ハ五百萬貫以上ニ達セリ就中最モ盛ナルハ  
大阪府ニシテ七會社ヲ有シ製出高二百十萬貫ニ超ヘ殆ト全國產額ノ半ニ達セント  
ス次テ岡山ハ殆ト百萬貫ノ製出アリ東京六十二萬貫名古屋五十五萬貫三重四十三  
萬貫等之ニ次ギ其他栃木山梨靜岡京都奈良和歌山兵庫廣島愛媛長崎鹿兒島等多少

ノ製出アリ

### 陶磁器

陶磁器ハ我邦工業品中産出ノ多額ナルモノ、一ナリ抑本邦製陶術ノ古來進歩セル  
トハ陶器家ノ普ク許ス處ニシテ其初ハ支那ヨリ傳習センモ創製ノ時代甚々遠ク古  
代ヨリ行ハレタルト疑フベカズ陶器中古代術ト稱セラル、行基流陶器ハ既ニ天平  
寶字年間盛ニ製造セラレタルハ一千年前ニアリトテ證スルニ足ルベシ斯ノ如ク  
製陶術ハ古代ヨリ傳ハルヲ以テ工藝品中ニモ産額ノ多キ當然ト稱スベシ。今明治  
二十二年ニ於ケル全國産額ハ三〇。二〇。一〇。一〇。一〇。一〇。一〇。一〇。一〇。一〇。  
治二十年ノ産額ヲ願ミレバ僅ニ百八十八萬圓ニ過ギザリ(必シモ此率ヲ以テテ)陶磁  
器ハ本邦日常必須ノ家器ニシテ全國之ヲ用ヰザル所ナキヲ以テ陶磁器ノ産セザル  
國ハ殆ド之レナント雖モ其原料トナルベキ陶土ノ多少ニヨリテ産額ニハ甚ダ不同  
アリ全國中最モ多額ノ産出アルハ尾張ニシテ一年ノ産額七十三萬圓ニ達シ陶器ノ  
異名トシテ瀬戸物ノ名ヲ占メ美濃ハ之ニ次ギテ産額多ク五十三萬圓ニ及ベリ次ハ  
磁器製造ノ濠鶴ト稱セラレタル有田及伊萬里ノ産ニシテ即チ肥前焼ノ名アルモノ  
ナリ是レ又五十萬圓ニ下ラズ之ニ次ギテ産額ノ多キハ加賀ニシテ彼ノ赤色書即チ

赤釉ニ金泥ヲ附着セル美麗ナル九谷焼ハ近來海外輸出頗ル多ク從テ產出モ増加シ年額三十八萬圓ニ垂ントス次ハ京焼ト稱スル青磁淡泊ノ京都產陶器ニシテ二十二萬圓ノ產出アリ神奈川十九萬圓長崎十三萬圓等之ニ次ギ其他ノ各地ハ著シク產額少シ

### 酒類釀造

全國一年ノ酒類釀造高ハ三百八十二萬石ニシテ人口一ニ對シテ一斗一升九合弱ニ當ル・頗ル巨額ノ釀造高ト稱スベシ各地ニ就テ釀造ノ多寡ヲ示セバ兵庫ハ世人ノ知ル如ク造酒ノ本場ニシテ伊丹ノ如キ重モナル產地ナリ故ニ釀造高モ全國第一ニシテ年々五十一萬石ノ釀アリ即チ全國釀造ノ殆ド七分ハ一ヲ占メタリ次ハ愛知ノ十七萬石及長野ノ十六萬石大坂ノ十五萬石ニシテ福岡十四萬石京都十二萬石愛媛岡山新潟何レモ十二萬石茨城三重廣島何レモ十萬石之ニ次ギ其他各地ハ十萬石以下ナリトス

### 醬油製造

醬油ハ本邦ノ食物調料ニ要用ナル品ニシテ本邦人ノ醬油ヲ用ユルコトハ頗ル古來ニアルヲ以テ各地皆製造シ近來ノ一年製造高ハ百二十三萬石ニ及ビ人口一ニ對シテ三升七枚ニ當ル夫レ醬油製造ハ製鹽ト關係シ製鹽ハ晴雨ニ關スルヲ以テ醬油製造ハ雨量ノ少キ地ナラザルベカラズ故ニ東海岸及ビ瀬戸内沿岸ノ如キ醬油製造高多シ即チ製造高ノ最モ多キハ千葉ニ過ギタルモノナク醬油ノ特產地トモ稱スベシ即チ一年ノ製造高ハ十六萬四千石ナリ全國八分ハ一ヲ占メタリ其產地ハ野田ヲ以テ第一トス次ハ兵庫ニシテ七萬二千石播州龍野ハ重モナル產地ナリ次ハ東海岸ノ茨城七萬石瀬戸内沿岸ノ岡山六萬三千石香川六萬石及愛知六萬一千石等ニシテ其他ハ著シク少額ナリ

### 漆器

漆器製造ノ業ハ本邦人獨得ノ長技ニシテ西洋交通以來ハ大ニ泰西人ノ好嗜ニ適シ特ニ我邦ヲ稱シテJapan(漆ノ義)ト名クルニ至ル佛人ゴンズ氏(有名美術家)ノ如キハ日本漆器ヲ評シ曰ク凡漆器ハ人工品中最モ完全ナルモノナリ縱令之ヲ最完全ナルモノト爲ザルモ其精緻ヲ極ムルモノナリトノ評ハ趣言ニ非ザルナリ願フニ漆材工ハ他國人民ハ得テ爲シ得ヘカテザル日本固有ノ製品ニシテ現今ニ於テモ其技ハ日本人ノ榮譽ト爲ス所ナリ而メ其製法ノ妙ハ作爲ノ簡單製造ノ仕上及漆材ノ美且貴ニ在リ要スルニ日本ノ漆材工ハ世界ノ共ニ稱揚スル所ニシテ室内ノ裝具ニ供シ